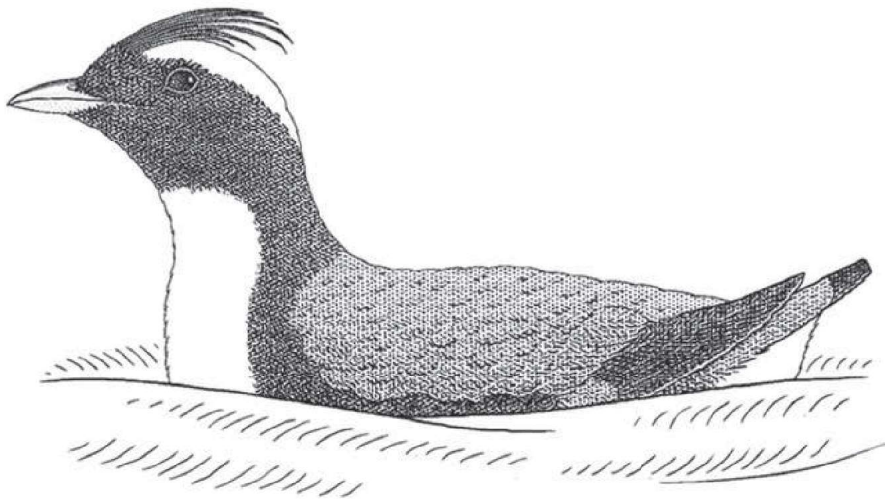


鳥類



絶滅危惧IA類 (CR)

カンムリウミスズメ

Synthliboramphus wumizusume

鳥類概論

● 鳥類分科会／岡部海都・石間妙子・小野 仁・武石全慈・田代省二・筒井哲史・中原 亨・松富士将和

■ 検討手順

福岡県に生息する鳥類の絶滅のおそれのある種を選定するにあたって、環境省の判定基準に準じて評価・選定する基本方針のもと、既存文献からの情報の収集および現地調査を行い、可能な限り定量的な評価を行うように努めた。このため、鳥類分科会委員には公益財団法人日本野鳥の会の県内の4支部から各1名と学識者など4名の計8名が参加し、検討作業を行った。既存資料については、日本野鳥の会の支部報、自治体や官公庁が実施した自然環境調査、アセス図書などを収集し、整理した。また、環境省によるモニタリングサイト1000の調査結果や認定NPO法人バードリサーチが事務局となって実施した全国鳥類繁殖分布調査などの公的なモニタリングのデータを活用し、経年的な個体数動向の確認を行った。現地調査は、主に島嶼や海域について実施したほか、岡部委員による県内の調査データ約6万件も活用した。

前回の「福岡県レッドデータブック2011」で提示した福岡県産鳥類目録をベースに、その後の記録を収集し、整理・検討を行って目録を更新し、407種をリストアップした（表 鳥類-1）。これらのうち、定期的に観察される種を選定し、偶産種を除外し（ただし環境省レッドリスト掲載種は除外しない）、289の種・亜種を検討対象種とした。なお、鳥類の目名・科名・和名・学名および配列は日本鳥学会（2024）に従った。

検討対象種のうち、前回の選定種90種については、前回の選定時と同様、山岸ら（2002）を参考とした生息状況調査シート（福岡県，2011）を日本野鳥の会4支部ごとに作成し、それらをもとに県内の状況を整理した。また、残りの検討対象種（199種・亜種）についても同様に県内の状況を整理した。カテゴリーの選定にあたっては、環境省レッドリストカテゴリー判定基準の元となっているIUCN（国際自然保護連合）のカテゴリー判定基準に適用できるよう、検討対象種に対して、県内の分布パターン（生息地数）、分布面積、生息概数、個体数の増減傾向（減少率）についてIUCNの数値基準で区分した。数値基準の凡例区分は表 鳥類-2のとおりである。これらの項目の数値区分をもとに、環境省レッドリストカテゴリーと判定基準の表（p.13の表3を参照）によって導き出されたカテゴリー判定結果を一次案とした。そして種別に危機の度合いの大きさ、増減傾向、地域特性やほかのレッドリストとの整合性などを総合的に検討し、絶滅危惧のカテゴリーを選定した。

分布情報については、前回改訂後2011年以降の記録について、現地調査結果や各種文献から抽出し記載した。それらは繁殖・越冬・渡り・偶産の区別なく全ての記録を含んでいる。

■ 検討結果

絶滅のおそれのある種の総数は、2011年の改訂時では46種であったが、今回見直しを行った結果71種（絶滅危惧ⅠA類11種、絶滅危惧ⅠB類16種、絶滅危惧Ⅱ類44種）となり、25種増加した。これらに絶滅種（2種）、準絶滅危惧（41種）、情報不足（5種）を加えると、本書に挙げられるの

は119種（前回90種）となった。カテゴリーの新旧対照表を表 鳥類-3に示す。

前回改訂時と比べて選定種が増加し、カテゴリーの変更も多いが、今回は文献からの情報に加え、現地調査を県内全域で実施したことにより、定量的なデータの精度が向上し、客観的根拠に基づいた判定が行われたためである。根拠とした環境省の定量要件を、CRからVUまでは特記事項欄に、NTは選定理由欄に記載した。

今回の改訂でカテゴリーの変更がなかった種は45種、ランクアップした種が24種、ランク外から新たに選定されたのが37種であった。特にシギ・チドリ類や小型から中型サギ類の減少率が高くなっており、多くの種がランクアップまたは新規に選定された。

一方、ランクダウンした種は13種、ランク外としたものは8種で、生息数の増加、回復によりランクを下げたものはヘラサギ、トモエガモ、カンムリカイツブリ、クロツグミ、そのほかは現在の生息状況と定量要件を精査した結果、ランクダウンが妥当と判断された。

前回DDとされたウズラ、オオコノハズク、コサメビタキ、コガラについてはその後の調査である程度生息状況が把握され、ウズラ、オオコノハズクについては確認頻度や生息確認数からENに、コサメビタキは繁殖期の確認場所の密度からVUに選定した。コガラについては釈迦岳山地、筑肥山地に比較的普通に生息していることが判明したことから、選定しなかった。今回ランク検討を行う中で、アオシギ、トラフズクについては推定される生息状況に対して確認情報が少なく、DDに選定し、次回改訂に向けて生息状況の把握に努めることとした。ビロードキンクロ、オオセッカの2種はレッドリスト検討中に新たな越冬地に関する知見が得られたものの、まだ情報の蓄積が不十分と考えられたため、DDに選定した。キジは県内の生息状況が放鳥事業に依存していることが明らかとなり、在来個体群がどの程度生息しているか、遺伝子レベルの検討が必要とされることから、DDとして判断を保留した。

検討過程において、筑後平野および佐賀平野では、カササギが以前と比べると減少しているのではないかという意見があり、絶滅危惧種として検討すべきではないかと議論が行われた。減少要因としてカラス類との競合による影響と考えられ、NTに選定すべきとの意見も出たが、この地域のカササギは1600年代に人為的に移入された可能性が高いことから（江口・久保，1992）、外来種は選定しないという原則に準じて選定は見送った。また、県内の玄界灘沿岸の個体群については遺伝子レベルの研究により、朝鮮半島からの飛来が示唆されており、他の外来種とは異なる事情も有している。このように長い歴史を通じて地域に根付いた外来種の取り扱いについては次回以降への課題としたい。

■ ハビタット

(1) 山地

県内で最も山地の鳥類相が豊かな英彦山地では、標高700m以上にブナやミズナラなどが優占する落葉広葉樹林が多く、県内のほかの山地では生息していないコノハズクが生息している。2000年以前にはコマドリも繁殖していたが、台風による風倒木被害とニホンジカによる下層植生の食害により生息環境が消失した。ヨタカ、オオコノハズク、オオアカゲラ、ジュウイチ、ゴジュウカラなど、ほかの山地では少なくなった種が比較的多くみられる。脊振山地では現在のところニホンジカによる食害がみられず、県内の山地ではほぼ唯一ニホンジカ増加以前の下層植生が保たれている。脊振山と金山にはブナ林があり、コルリの生息が確認されていたが、2015年を最後に確認ができない状況である。また、脊振山地は県内の山地で最もヤイロチョウの生息密度が高い

と考えられる。釈迦岳山地および筑肥山地では、標高800m以上にブナやシデ類などの落葉広葉樹林がみられ、オオアカゲラ、ゴジュウカラ、コガラが比較的普通に生息しているほか、ヨタカ、オオコノハズク、ヤイロチョウの生息も確認されている。冬季には下層のスズタケ群落で少数のカヤクグリが越冬している。また、県内で唯一ブッポウソウの営巣が確認されている地域でもある。一方で、県内のほかの山地に比べると植林率が高く、山地の中腹以下の鳥類相がやや貧弱となっている。三郡山地、古処山地ではオオアカゲラ、ゴジュウカラが生息しているものの、分布は縮小傾向である。福智山地ではセンダイムシクイの生息密度がほかの山地に比べて高いが、高標高帯に高木が少ないためか、標高の割に生息する種は少ない傾向がみられる。県内の山地での共通の危機要因としては、ニホンジカ、イノシシ増加に伴う環境改変と付随する様々な影響、温暖化や里山荒廃に伴う急速な遷移進行（落葉樹林やマツ林の衰退）、台風や豪雨に伴う土石流や風倒木による被害、林道開発などが挙げられる。

(2) 低山・丘陵地

標高300m以下の低山や丘陵地では、地域による鳥類相の変化は山地に比べると比較的少ないものの、生息密度や増減傾向については地域差がみられる。ミゾゴイ、サシバ、ツミ、アオバズクについては山地にも生息するが、低地にも広く分布している。またサンコウチョウは丘陵地や山裾の低標高地に生息する傾向がある。ミゾゴイ、サンコウチョウは筑後地方に少ない傾向があり、サシバは福岡地方や北九州地方の市街地に近い地域から減少している。アオバズクは筑豊地方や北九州地方の京築地域でやや少ない傾向がみられる。かつて夏には九州に生息していなかったオオタカが丘陵地を中心に分布を拡大しており、クマタカの山麓部への分布拡大も進んでいることから、これら生態系上位種の競合によりサシバが減少している可能性もある。また、フクロウも増加傾向にあり、アオバズクの減少要因の一つとなっている可能性がある。福岡地方については全国的にみても人口の増加が続いている地域であり、住宅需要の増加から今も郊外での宅地造成が行われている。また、県内各地の地形のなだらかな丘陵地では大規模な太陽光発電施設が建設されており、地形を大規模に改変する事例もみられている。

(3) 草原・草地環境

県内ではまとまった草原環境は少ないため、草原環境に特有な鳥類相はあまりない。平尾台がほぼ唯一のまとまった草原環境であり、かつてホオアカは平尾台のみで繁殖していたが、ここを起点に分布が拡大したと考えられ、北九州地方の京築地域の農耕地や遠賀川水系の河川敷では普通にみられるようになってきている。筑後川水系の河川敷や福岡地方の北東部でも繁殖期に確認例が増えており、県内全域で繁殖するようになりつつある。平尾台ではヨタカの生息が確認されているが、確認頻度は少なくなっている。また、春から夏にかけてノスリが確認されており、繁殖の可能性が指摘されている。

(4) 農耕地・干拓地

本県は筑後川、遠賀川および博多湾や周防灘への流入河川沿いに平野が発達しており、国内有数の農業県という側面もある。これらの農地は鳥類の生息適地となっており、タマシギ、ヒクイナなどの繁殖地、チョウゲンボウなどの猛禽類やホオジロ類などの越冬地、淡水湿地性や草地性のシギ・チドリ類をはじめとした多くの鳥類の渡りの中継地および採餌場として利用されている。

(5) 河川

一級河川の筑後川，矢部川，遠賀川は，河川の規模が大きいため，河川を生息場所とする多くの種が生息している。冬季には下流から中流にかけての水域で数千羽の規模の陸ガモ類がみられる。中・下流域のヨシ原ではオオヨシキリ，中流域の中州ではイカルチドリが繁殖し，河川敷に広い草地や農耕地，樹林がみられる場所では，ハイイロチュウヒやオオタカなどの猛禽類，コミミズク，トラフズクなどのフクロウ類が越冬している場所もある。水系ごとに特徴があり，筑後川ではツバメチドリやコアジサシが小規模なコロニーを形成することもあったが，現在はほとんどみられなくなっている。矢部川やその支流ではササゴイが多く，堰や瀬などで採餌を行っている。上流域にはヤマセミやカワガラスが生息しており，多くみられる。また，上流域の川岸が樹林に覆われた場所で越冬期にオシドリが多くみられる。遠賀川水系では，県内の他地域では比較的稀なカワアイサの小群が越冬している。

洪水が発生した際には生息環境全域が消失する場合もあり，特にカワガラスやヤマセミなど河道内を主な生息環境とする種にとっては，災害復旧工事の長期化も併せて影響が大きいと考えられる。

(6) ため池・湿地

県内には自然由来の湿原が少なく，県内でみられる湿地環境はため池，遊水地，水田由来の休耕湿地，ビオトープなどである。特にため池は県内に4,500以上存在し，多くの水鳥の生息場所となっている。抽水植物が水辺に繁茂している場所ではカイツブリ，バン，ヒクイナなどが繁殖し，サギ類の餌場となっている。これらの種は環境さえ整っていれば，小面積や住宅隣接地などであっても生息できるため，単純にため池の多さが個体数維持に繋がっている。冬季にはカモ類がため池を利用し，特にトモエガモ，ハシビロガモ，ミコアイサはため池への依存度が高く，山地に接するため池にはオシドリが多い。ヨシやガマ，マコモなどの抽水植物が繁茂している湿地環境は，クイナ，オオヨシキリなどの繁殖地や越冬地となっているほか，ヨシゴイやサンカノゴイなど特に希少な種の生息地となっている場合もある。筑後地方のため池群や直方市周辺，宗像市周辺，京築地域のため池群などでは再導入個体群のコウノトリが安定的に飛来するようになっており，筑後地方では繁殖に向けての動きもみられている。

(7) 埋立地

埋立地は人為的な環境であるが，埋立て過程で湿地環境や裸地，荒地などが形成され，一時的に湿地環境や氾濫原環境を好む種が集まる。これまで響灘沿岸，周防灘苅田地区，博多湾，有明海三池港周辺などでこのような環境がみられ，現在，博多湾や三池港周辺ではみられないものの，響灘や苅田地区では浚渫土砂の処理もあり，多くの湿地環境が存在している。裸地となった場所では氾濫原を営巣環境とするコアジサシやコチドリ，シロチドリなどが，ヨシの繁茂した場所ではオオヨシキリ，ヒクイナ，オオバンなどが繁殖している。響灘埋立地や北九州空港人工島にはチュウヒが営巣，周年生息しており，多くの希少種の繁殖場所となっている。また，冬季にはツクシガモ，クロツラヘラサギ，ハマシギなどの採餌場所や休息地として利用され，渡り時期にはシギ・チドリなどの中継地として利用されている。特に渡り時期のトウネンをはじめとしたシギ・チドリ類にとっては重要な中継地であり，海岸や干潟ではみられないような大きな群れが飛来することがある。

(8) 河口・干潟

干潟が形成される河口や海岸は多くの水鳥が越冬や渡りの中継地として利用する。県内には国内有数の飛来地も多く、希少種の重要な生息地となっている。北九州市曾根干潟はズグロカモメ、ダイシャクシギの飛来が有明海に次いで多く、ツクシガモ、シロチドリ、ダイゼン、ハマシギ、ユリカモメ、カモメなども多数越冬し、クロツラヘラサギの越冬数も年々増加している。また、渡り時期のシギ・チドリ類の数も県内有数規模で、特に100羽以上のオオソリハシシギの飛来がみられる。今川河口や佐井川河口、京築地域の海岸の干潟でもシギ・チドリ類やカモメ類の大きな群れがみられる。博多湾では和白海岸でミヤコドリが越冬しており、西日本では唯一の安定した越冬地になっている。ハマシギ、ミユビシギ、シロチドリも群れで越冬しているが、特にハマシギの飛来数は減少傾向が続いており、最盛期の1/5ほどとなっている。瑞梅寺川河口は背後の農地やため池などと併せ、多くの鳥類の越冬地、中継地として利用されている。クロツラヘラサギが国内で安定越冬する最初の場所となったが、近年の越冬数は減少傾向にある。原因としては、以前ねぐらとして利用されていた中州が浸食により消失したこと、後背地の市街地化・宅地化が進んでいることなどが上げられる。筑後川河口から三池港にかけての有明海の干潟は、1990年代以降水鳥類が少なかった時期もあるが、現在は回復傾向にある。近年はクロツラヘラサギやツクシガモが増加し、越冬期には筑後川河口にハマシギの大きな群れもみられる。春の渡り時期にはハマシギ、トウネン、オオソリハシシギ、ソリハシシギ、キアシシギなどが多数みられることもある。

(9) 海岸・砂浜

玄界灘、響灘および周防灘の一部の海岸には砂浜や岩礁の海岸が発達しており、水鳥類が生息している。干潟同様、越冬期や渡り時期にはシギ・チドリ類が海岸を利用し、砂浜ではシロチドリが繁殖している場所もある。海の中道の玄界灘側や博多湾の西戸崎では年によりコアジサシのコロニーが形成され、繁殖することがある。岩礁海岸ではクロサギが繁殖しているほか、ミサゴの営巣もみられる。

(10) 海域

本県は玄界灘、響灘、周防灘および有明海奥部に面しており、それぞれの海域に多くの水鳥や海鳥が生息する。玄界灘および響灘は島嶼で繁殖するカンムリウミスズメ、ヒメクロウミツバメ、オオミズナギドリの採餌場所となっており、特に生息数の多いオオミズナギドリは全域に広く生息している。沖合については十分な調査が行われていないが、日本海を通過する海鳥は一定数存在すると考えられ、アカエリヒレアシシギが多くみられるほか、アジサシ、ハシボソミズナギドリなども観察されることがある。玄界灘および響灘の沿岸域は全国有数規模の沿岸性海鳥の越冬海域となっており、シノリガモ、クロガモ、オオハム類、アカエリカイツブリ、ウミスズメなどの越冬海域の南限となっている。また、カモメ類の採餌場所となっており、沖合で採餌し、防波堤や海岸、河口などで休息する姿がみられる。2000年以降は秋から冬にかけてカツオドリが飛来するようになり、島嶼の崖などをねぐらとしている。これまで、周防灘沿岸は玄界灘と同様の種が生息するものの、群れの規模が小さいと考えられていたが、船を利用した近年の調査により、オオハム、ウミアイサなどは一定の密度で広範囲に生息しているのが確認された。これらの種は岸から確認できる個体数以上に多く生息している可能性がある。有明海では三池島にベニア

ジサシが繁殖期に多数飛来し、周辺の海域で採餌し、冬季にはノリ養殖場の沖合でスズガモ、ホシハジロなどの海ガモ類が大群で生息するほか、ウミアイサも多い。

(11) 島嶼

玄界灘および響灘には大小さまざまな島嶼が散在し、希少な鳥類の生息場所となっている。多くの島でカラスバト、ミサゴ、ハヤブサ、クロサギが繁殖しており、一部の島ではアマツバメも繁殖している。最も沖合に位置する沖ノ島では、属島の小屋島でカンムリウミスズメ、ヒメクロウミツバメが繁殖し、沖ノ島では約15万羽（福岡県森林林業技術センター、2000）のオオミズナギドリが繁殖しているほか、ウチャマセンニュウの繁殖数も国内最大規模と考えられる。また、リュウキュウコノハズクが本来の分布域である南西諸島から大きく離れて分布しており、特異な鳥類相がみられる。糸島沖の岩礁島である烏帽子島ではカンムリウミスズメが繁殖している。響灘の白島では小規模ながらオオミズナギドリが繁殖しており、繁殖期における海域での確認状況から属島でのカンムリウミスズメの繁殖の可能性も濃厚である。玄界島周辺の大机・小机島、柱島、志賀島属島沖津島ではウチャマセンニュウが繁殖している。

■ 危機要因と保全対策

鳥類の危機要因は以下の5つに大別される。

気候変動（温暖化）

現在、人間活動の影響と考えられる気候変動が顕著化しており、ヒトを含む生態系が著しい影響を受けている。気候変動に起因すると考えられる環境変化には、植生変化、自然災害、餌生物の分布変化などが挙げられる。分布の南限種については、環境変化の影響によって生息適地から外れ、生息地の縮小、消失へと繋がっていく。特に高標高地での影響が大きいと考えられ、落葉広葉樹林の縮小、劣化は、コマドリ、サンショウクイ、コルリの繁殖地の消失やヨタカ、オオアカゲラ、ゴジュウカラの分布域の縮小に関連することが疑われる。線状降水帯の発生が多発し、各地で激甚災害が発生するようになり、大規模土石流やその後の緊急対策工事によりカワガラスやヤマセミなど河川上流に生息する種の生息環境の消失がみられている。増加する洪水被害への対処として、川幅拡張による氾濫原環境の創出や大規模遊水地を活用したビオトープの設置など、洪水対策と生態系保全の両立は可能と考えられる。地域住民への理解を得ながら、積極的な治水と生態系保全の両立が求められる。海域では海水温の上昇により餌生物の分布や生息数の変化が起きていると考えられ、それに伴い海鳥類の生息に影響が出ている可能性がある。

開発関連

上記、気候変動の最も効果的な対策として、再生可能エネルギーへの転換が進められ、太陽光発電や風力発電施設の開発が進められているが、鳥類への影響が懸念されている。風力発電は、バードストライク、建設に伴う生息地破壊、衝突回避行動に伴うエネルギーロスなどが問題となるが、風車の設置が鳥類にどの程度の影響があるかが十分に解明されないまま事業が進んでいる面がある。本県は東西と南北の渡りルートが交差する「渡りの十字路」に位置する。多くの鳥類が様々な場所、高度、時間帯で通過しており、日中に移動するハチクマやヒヨドリなどの移動状況は判明しているものの、小鳥類、シギ・チドリ類、海鳥については、夜間や洋上での移動状況が解明されていないことが多い。センシティブティマップ活用による立地場所の回避も考えられ

るが、本県は渡りの重要コース上に位置しているため、どの場所に設置したとしても何らかの影響は生じるであろう。風車のブレードの形状など鳥類に影響の少ない発電施設の開発が望まれるとともに、渡りの時期に対応した運用面での調整や立地場所に関する十分な検討が行われることが求められる。太陽光発電についても、比較的なだらかな丘陵地や山腹を大規模に切り開いてパネルを設置する事例が各地で増えており、景観、土砂流出とともに生態系への影響が懸念されている。また、埋立地での設置についても、一般的にはただの空き地にみえる未活用地でも、重要種の生息地となっている場所が多くあり、立地に関しては十分な検討が行われることが求められる。

陸域では、ダムや高速道路、鉄道などの大規模な開発や公共事業については一段落ち着いた状況となっている。一方、伐採期を迎えた植林地で集材を行うための林道開発が行われているが、多くの事業では環境アセスメントが実施され、モニタリングとともに配慮を行いながら開発が進められている。近年多くの植林地が壮齢林となり、クマタカの植林地環境への適応やオオタカの九州での分布拡大も相まって、これら猛禽類が植林地に多く生息するようになっている。伐採地の存在はこれら猛禽類の餌場になる一方、広域にわたる皆伐は個体群への影響が大きい。猛禽類がその地域に持続的に生息できるよう、生態系に配慮した伐採計画が求められる。

海域では、浚渫土砂の処分の問題もあり、響灘や周防灘においては埋立地の造成が続いている。既存の埋立地では一時的に広大な面積の湿地や裸地が形成され、チュウヒやコアジサシ、チドリ類の繁殖地、シギ類やクロツラヘラサギの越冬・中継地として利用されるようになっている。土砂処分場としての埋立地造成が当分続くのであれば、計画的にこれらの造成過程の湿地を保全対策に取り入れ、継続的に湿地が存在するような配慮が望まれる。

農業の変化

農耕地は多くの鳥類の生息地となっている。県内においては稲作と麦作の二毛作が進んでおり、品種改良による稲作の短期化が可能となったことから、麦作を春まで行い、初夏に田に水を入れる場所が増えている。特に筑後地方でその傾向は顕著となっている。田への水入れの遅れ、短期化、乾田化はサギ類、シギ・チドリ類などの水辺を利用する鳥類に大きな影響を与えている。シギ・チドリ類は春の渡り時期に水田が減少したことにより、中継地として利用できなくなっている。サギ類やタマシギは、田への水入れの遅れと稲作の短期化の影響を強く受けていると考えられ、繁殖場所や採餌場所としての利用ができなくなっている。水田の代わりに出現する冬季の麦畑は、乾燥していて餌が少なく、麦の成長が早く変化が著しいため、利用できる鳥種は限られる。そのため、稲刈り後の水田と比較して冬季の麦畑は鳥類相が単調になる傾向がある。また、圃場整備が進み、休耕地、休耕地がほとんどみられなくなるなど、鳥類の生息環境の多様性が失われる傾向にある。かつては草の生い茂った休耕地や未舗装の農道はホオジロ類やタヒバリ類、ウズラなどの生息地となり、ハツカネズミやハタネズミが多く生息していたことからコミミズクやハイイロチュウヒなどの採餌場所やねぐらとして利用されていた。また水を張った休耕地は渡り時期のシギ・チドリ類をはじめとする水鳥類の採餌・休息場所として利用されていた。現在はこれら休耕地を生息場所としていた多くの種が減少しており、レッドリストに選定されている。

一方、農地・農村環境を生物多様性戦略の中に位置づけ、保全や再生を推進する取り組みも行われており、今後は農業の効率性の向上だけでなく、生態系に配慮した農業政策が行われることが求められる。

獣害・外来種

県内における獣害は拡大しており、イノシシは全域で普通にみられ、島嶼への進出も続いている。ニホンジカは低標高でも普通にみられるようになり、脊振山地への進出も時間の問題と懸念されている。ニホンジカの増加は下層植生を食い尽くすことにより生態系に大きな影響を与え、英彦山地ではコマドリが繁殖できなくなった。イノシシは林床で土を掘り返すように餌を探すため、地上営巣を行う種への影響が懸念される。ニホンジカ、イノシシは農業分野での経済損失も甚大で、対策が進められているが、現在のところ食い止められていない状況である。脊振山地は九州では数少ないニホンジカの影響がみられない植生が維持されており、この環境を維持するためにも脊振山地でのニホンジカ侵入対策が行われることが望まれる。外来種であるアライグマも急速に分布を拡大しており、木にも登り、手先も器用であることから、鳥類を含む生態系への影響が懸念され、早急な対策が求められる。

沖ノ島の属島の小屋島にはかつて2度ドブネズミが侵入し、カンムリウミスズメ、ヒメクロウミツバメが壊滅的な影響を受けた。現在は回復が進んでいるものの、再侵入のリスクは常にある。沖ノ島にはイエネコが生息していたことがあり、現在はみられなくなったもののイエネコが生息していた際にはオオミズナギドリが捕食されるなどの影響もみられた。クマネズミも生息しており、リュウキュウコノハズクやウチヤマセンニューへの影響が懸念されている。これらの害獣被害は早期の対策が重要であり、関係機関の連携によるモニタリングや駆除などの対応が求められる。

外来種についてはカワラバト（ドバト）、カササギ、コジュケイが戦前より生息しており、1970年代にソウシチョウ、1980年代にガビチョウが確認され、県内全域に広がった。ソウシチョウ、ガビチョウについては特定の種への影響は顕在化していないものの、ソウシチョウは低標高帯や島嶼への進出、ガビチョウは高標高帯への分布拡大が進み、各地で優占種化しており、目にみえにくい影響が懸念される。コブハクチョウは放し飼い状態で飼育されていた場所から逃げ出したと思われる個体が北九州地方を中心に繁殖するようになり、徐々に分布を拡大している。

野鳥カメラマンの増加による影響

デジタルカメラの普及により、多くの野鳥観察者がカメラを携行し、記録として残せる時代となったため、記録精度の向上に繋がっている。一方、多くの人々が野鳥の撮影を行うようになり、SNSの普及も相まって野鳥の撮影熱が高まっている。撮影対象として人気のある猛禽類やフクロウ類、カワセミ類などに加え、生息数の少ない希少種を求めて多くの人々が撮影に訪れるようになり、問題が発生している。繁殖に対する影響は甚大で、多くの人々が撮影に訪れることで過大なストレスを与え、営巣放棄につながることもある。ヨシゴイ、ヤマセミ、アカショウビン、ブッポウソウ、ヤイロチョウなどは特に人気が高く、撮影者による影響が懸念される。撮影による影響は個体への影響に留まることが多いが、ヨシゴイやブッポウソウなど生息数が著しく少ない種に対しては地域個体群の絶滅に繋がる要因の一つとなっている。狭い地域に多くの人々が集まることにより地域住民とのトラブルに発展することもある。住民の感情悪化が地域に生息する鳥類の保全活動に悪影響を与えるケースも懸念される。観察者、撮影者のモラル向上と、情報が拡散した場合の影響を十分に考慮した情報管理が求められる。

■ 調査協力者名

池長裕史, 江口浩喜, 田村耕作, 中嶋秀利, 西 星哉, 野崎達也, 野田美治, 広塚忠夫, 溝田泰博, 村尾裕美

■ 写真提供者名

伊関文隆, 江口浩喜, 岡部海都, 梶田和彦, 片岡智徳, 瀬井俊一, 田代省二, 谷口義和, 田村耕作, 西 星哉, 野崎幸子, 広塚忠夫, Marijka Jansen, 南 順子, 村尾裕美, 森池勝利, 渡邊啓文

■ 参考文献 (引用文献)

- 江口和洋, 久保浩洋. 1992. 日本産カササギ *Pica pica sericea* の由来—史料調査による. 山階鳥研報 24: 32-39.
- 福岡県. 2011. 福岡県の希少野生生物 福岡県レッドデータブック2011—植物群落・植物・哺乳類・鳥類—. 福岡県環境部自然環境課, 福岡.
- 福岡県森林林業技術センター. 2000. 国設沖ノ島鳥獣保護区鳥類生息状況等調査報告—昭和60年度～平成11年度—. 福岡県森林林業技術センター, 福岡.
- IUCN. 2012. IUCN Red List Categories and Criteria: Version 3.1. Second edition. Gland, Switzerland and Cambridge, UK.
- 環境省自然環境局生物多様性センター. モニタリングサイト 1000 ホームページ データファイル「モニタリング 1000 シギ・チドリ類調査」.
https://www.biodic.go.jp/moni1000/findings/data/index_file_shorebird.html (Download 2024. Feb).
- 黒木 茂. 1962. 沖の島の鳥類 (その一). 九州野鳥 (7): 5-9.
- 日本鳥学会. 2024. 日本鳥類目録改訂第8版. 日本鳥学会, 東京.
- 日本野鳥の会 筑後支部. 2020～2024. まめわり 第222号～第263号.
- 日本野鳥の会 筑豊支部. 2020～2024. 野鳥だより・筑豊 第503号～553号.
- 日本野鳥の会 福岡支部. 2011～2024. 野鳥だより ふくおか 第376号～第532号.
- 日本野鳥の会 北九州支部. 2011～2024. 北九州野鳥 第295号～第452号.
- 植田睦之, 植村慎吾, 葉山政治, 荒 哲平, 高川晋一, 川路則友, 梶田 学, 仲村 昇, 田畑早紀, 内山優奈. 2021. 全国鳥類繁殖分布調査で収集された20kmメッシュの鳥類の繁殖分布のデータ. Bird Research, 17: R5-R9.
- 山岸 哲, 江崎保男, 和田 岳. 2002. 近畿地区・鳥類レッドデータブック—絶滅危惧種判定システムの開発—. 京都大学学術出版会, 京都.
- 絶滅のおそれのある野生生物の選定・評価検討会. 2020. レッドリスト作成の手引. 環境省.

表 鳥類-1 福岡県鳥類目録

No.	分類			渡り区分	繁殖	地域				備考	
						北九州	福岡	筑豊	筑後		
1	カモ目	カモ科	コクガン	不定期		●	●		●		
2			ハイロガン	迷鳥		●	●			2022.1 宗像市	
3			サカツラガン	不定期		●	●				
4			ヒシクイ	旅鳥/冬鳥		●	●	●	●	亜種オオヒシクイ, 亜種ヒシクイ	
5			マガン	旅鳥/冬鳥		●	●	●	●		
6			カリガネ	迷鳥			●				
7			コハクチョウ	不定期		●	●	●	●	亜種コハクチョウ	
8			オオハクチョウ	不定期		●	●	●	●		
9			ツクシガモ	冬鳥		●	●	●	●		
10			アカツクシガモ	不定期		●	●	●	●		
11			オシドリ	冬鳥	※	●	●	●	●	ヒナの確認例はあるが、繁殖状況は不明	
12			トモエガモ	冬鳥		●	●	●	●		
13			シマアジ	旅鳥		●	●	●	●		
14			ハシビロガモ	冬鳥		●	●	●	●		
15			オカヨシガモ	冬鳥		●	●	●	●		
16			ヨシガモ	冬鳥		●	●	●	●		
17			ヒドリガモ	冬鳥		●	●	●	●		
18			アメリカヒドリ	冬鳥		●	●	●	●		
19			カルガモ	留鳥	○	●	●	●	●		
20			マガモ	冬鳥/留鳥	○	●	●	●	●		
21			オナガガモ	冬鳥		●	●	●	●		
22			コガモ	冬鳥		●	●	●	●	亜種コガモ, 亜種アメリカコガモ	
23			アカハシハジロ	迷鳥			●				
24			ホシハジロ	冬鳥		●	●	●	●		
25			アカハジロ	不定期		●	●	●	●		
26			メジロガモ	不定期		●	●	●	●		
27			キンクロハジロ	冬鳥		●	●	●	●		
28			スズガモ	冬鳥		●	●	●	●		
29			コスズガモ	迷鳥			●			2017.3 福岡市	
30			シノリガモ	冬鳥		●	●				
31			ビロードキンクロ	冬鳥		●	●		●		
32			クロガモ	冬鳥		●	●				
33			コオリガモ	迷鳥			●				
34			ホオジロガモ	冬鳥		●	●	●	●		
35			ミコアイサ	冬鳥		●	●	●	●		
36			カワアイサ	冬鳥		●	●	●	●	亜種カワアイサ, 亜種コカワアイサ	
37			ウミアイサ	冬鳥		●	●	●	●		
38			コウライアイサ	不定期		○	●	●	●		
39	キジ目	キジ科	ヤマドリ	留鳥	○	●	●	●	亜種アカヤマドリ		
40			キジ	留鳥	○	●	●	●	亜種キュウシュウキジ		
41			ウズラ	不定期		●	●	●	●		
42	ヨタカ目	ヨタカ科	ヨタカ	夏鳥	○	●	●	●			
43	アマツバメ目	アマツバメ科	ハリオアマツバメ	旅鳥		●	●	●			
44			アマツバメ	夏鳥	○	●	●	●	●	亜種アマツバメ	
45			ヒメアマツバメ	留鳥	※	●	●	●	●	繁殖は確認されるものの不安定	
46	ノガン目	ノガン科	ヒメノガン	迷鳥		●	●				
47	カッコウ目	カッコウ科	バンケン	迷鳥		●			2017.10 糸島市		
48			カンムリカッコウ	迷鳥			●			2017.4 福岡市	
49			オニカッコウ	迷鳥					●	2019.5 大刀洗町	
50			ジュウイチ	夏鳥	○	●	●	●	●		
51			ホトギス	夏鳥	○	●	●	●	●		
52			セグロカッコウ	夏鳥	※	●	●	●	●	繁殖期に定期飛来するものの托卵相手は未確認	
53			ツツドリ	夏鳥	○	●	●	●	●		
54			カッコウ	夏鳥	○	●	●	●	●		
55			ハト目	ハト科	カラスバト	留鳥	○	●	●	●	亜種カラスバト
56					キジバト	留鳥	○	●	●	●	●
57	シラコバト	迷鳥					●		●	2022.4 大牟田市	
58	ベニバト	迷鳥					●		●	2017.5 福岡市	
59	アオバト	留鳥			○	●	●	●	●		
60	ツル目	クイナ科	クイナ	冬鳥		●	●	●			
61			パン	留鳥	○	●	●	●	●		
62			オオパン	冬鳥/留鳥	○	●	●	●	●		
63			ヒクイナ	留鳥	○	●	●	●	●	亜種ヒクイナ	
64			ヒメクイナ	不定期		●	●				
65		ツルクイナ	不定期		●	●					
66		シロハラクイナ	不定期		●	●					
67		ツル科	カナダツル	迷鳥			●		●	2021.3 福津市	
68			マナツル	旅鳥		●	●	●	●		
69			アナハツル	迷鳥		●	●				
70	クロツル		迷鳥		●	●	●	●			
71	ナベツル		旅鳥		●	●	●	●			
72	カイツブリ目	カイツブリ科	カイツブリ	留鳥	○	●	●	●	●	亜種カイツブリ	
73			アカエリカイツブリ	冬鳥		●	●	●	●		
74			カンムリカイツブリ	冬鳥		●	●	●	●		
75			ミミカイツブリ	冬鳥		●	●	●	●		
76			ハジロカイツブリ	冬鳥		●	●	●	●		
77	チドリ目	ミヤコドリ科	ミヤコドリ	冬鳥		●	●	●			
78		セイタカシギ科	セイタカシギ	旅鳥/冬鳥		●	●	●	●		
79			ソリハシセイタカシギ	不定期		●	●	●	●		
80		チドリ科	タゲリ	冬鳥		●	●	●	●		
81			ケリ	留鳥	○	●	●	●	●		
82			ヨーロッパムナグロ	迷鳥			●			2020.10 福岡市	
83			ムナグロ	旅鳥		●	●	●	●		
84			ダイゼン	冬鳥		●	●	●	●		
85			ハジロコチドリ	冬鳥		●	●				
86			イカルチドリ	留鳥	○	●	●	●	●		
87			コチドリ	夏鳥/留鳥	○	●	●	●	●	近年越冬個体が増えている	
88			シロチドリ	留鳥	○	●	●	●	●	亜種シロチドリ	
89			オオメダイチドリ	旅鳥		●	●	●	●		
90		メダイチドリ	旅鳥/冬鳥		●	●	●	●	亜種メダイチドリ		
91		オオチドリ	不定期		●	●	●	●			
92		タマシギ科	タマシギ	留鳥	○	●	●	●			
93		レンカク科	レンカク	不定期		●	●	●			
94		シギ科	チュウシヤクシギ	旅鳥		●	●	●	●		
95			コシヤクシギ	不定期		●	●	●	●		
96	ホウロクシギ		旅鳥		●	●	●	●			

●は確認されたことを示す。

植物群落

植物等

哺乳類

鳥類

爬虫類

両生類

魚類

昆虫類

甲殻類等

クモ形類等

貝類

表 鳥類-1(続き)

No.	分類		渡り区分	繁殖	地域				備考				
					北九州	福岡	筑豊	筑後					
97	チドリ目(続き)	シギ科(続き)	ダイシャクシギ	冬鳥	●	●		●					
98			オオソリハシシギ	旅鳥		●	●		●	亜種コシジロオオソリハシシギ*, 亜種オオソリハシシギ			
99			オグロシギ	旅鳥		●	●	●	●				
100			キョウジョシギ	旅鳥/冬鳥		●	●		●				
101			オバシギ	旅鳥		●	●		●				
102			コオバシギ	旅鳥		●	●		●				
103			エリマキシギ	旅鳥		●	●	●	●				
104			キリアイ	旅鳥		●	●	●	●				
105			ウズラシギ	旅鳥		●	●		●				
106			サルハマシギ	旅鳥		●	●	●	●				
107			オジロトウネン	冬鳥/旅鳥		●	●	●	●				
108			ヒバリシギ	旅鳥		●	●	●	●				
109			ヘラシギ	不定期		●	●		●				
110			トウネン	旅鳥/冬鳥		●	●	●	●				
111			ミユビシギ	冬鳥		●	●		●				
112			ハマシギ	冬鳥		●	●	●	●	キタアラスカハマシギ(検討必要), 亜種不明			
113			ヒメウズラシギ	迷鳥			●		●				
114			ヨーロッパトウネン	不定期		●	●						
115			コモンシギ	迷鳥		●	●						
116			アメリカウズラシギ	不定期		●	●		●				
117			ヒメハマシギ	迷鳥			●						
118			シベリアオオハシシギ	不定期		●	●		●				
119			オオハシシギ	不定期		●	●		●				
120			ヤマシギ	冬鳥		●	●	●	●				
121			アオシギ	冬鳥		●	●	●	●				
122			オオジシギ	旅鳥		●	●	●	●				
123			ハリオシギ	不定期		●	●		●	2013.5 北九州市			
124			チュウジシギ	旅鳥		●	●	●	●				
125			タシギ	冬鳥/旅鳥		●	●	●	●				
126			ソリハシシギ	旅鳥		●	●	●	●				
127			アカエリヒレアシシギ	旅鳥		●	●	●	●				
128			イソシギ	留鳥	※	●	●	●	●	繁殖期にみられるものの, 繁殖は未確認			
129			クサシギ	冬鳥		●	●	●	●				
130			キアシシギ	旅鳥		●	●	●	●				
131			アカアシシギ	旅鳥		●	●		●				
132			コアアシシギ	旅鳥		●	●	●	●				
133			タカブシギ	旅鳥		●	●	●	●				
134			ツルシギ	旅鳥		●	●	●	●				
135			アオアシシギ	旅鳥/冬鳥		●	●	●	●				
136			カラフトアオアシシギ	不定期		●	●		●				
137			ツバメチドリ科	旅鳥/夏鳥	※	●	●	●	●	筑後川の中州や埋立地で繁殖するが不定期			
138			カモメ科	ミツユビカモメ	不定期		●	●					
139				ハシボソカモメ	迷鳥		●	●					
140				ユリカモメ	冬鳥		●	●	●	●			
141				ズグロカモメ	冬鳥		●	●		●			
142				オズグロカモメ	迷鳥		●	●					
143				ウミネコ	冬鳥/旅鳥		●	●	●	●	越冬個体も飛来し, 周年みられる		
144				カモメ	冬鳥		●	●	●	●			
145				ワシカモメ	不定期		●	●					
146				シロカモメ	不定期		●	●					
147				セグロカモメ	冬鳥		●	●	●	●	亜種セグロカモメ, 亜種モンゴルセグロカモメ		
148				オオセグロカモメ	冬鳥		●	●	●	●			
149				ハシブトアジサシ	不定期		●	●		●			
150				オニアジサシ	不定期		●	●					
151				オオアジサシ	迷鳥		●	●					
152				コアジサシ	夏鳥	○	●	●	●	●			
153				セグロアジサシ	迷鳥		●	●		●	亜種不明(2020.9 岡垣町沖響灘)		
154				ベニアジサシ	夏鳥	○	●	●		●			
155				エリグロアジサシ	迷鳥		●	●		●			
156			アジサシ	旅鳥		●	●	●	●	亜種アジサシ			
157			クロハラアジサシ	旅鳥		●	●	●	●				
158			ハジロクロハラアジサシ	不定期		●	●		●				
159			トウゾクカモメ科	トウゾクカモメ	不定期		●						
160			ウミスズメ科	マダラウミスズメ	不定期		●	●			2023.2 周防灘		
161				ウミスズメ	冬鳥		●	●					
162				カムリウミスズメ	夏鳥	○	●	●					
163				ウトウ	不定期			●					
164			アビ目	アビ科	アビ	冬鳥	●	●	●	●			
165					オオハム	冬鳥		●	●				
166					シロエリオオハム	冬鳥		●	●				
167					ハシジロアビ	迷鳥		●	●			2015.3 福岡市	
168			ミズナギドリ目	ウミツバメ科	ヒメクロウミツバメ	夏鳥	○	●	●	●			
169					ミズナギドリ科	オオミズナギドリ	夏鳥	○	●	●	●		
170						ハシボソミズナギドリ	不定期		●	●			
171				アナドリ	迷鳥		●			2022.9 糸島市沖玄界灘			
172			コウノトリ目	コウノトリ科	ナベコウ	不定期		●	●	●			
173					コウノトリ	冬鳥		●	●	●	●	近年確認されるのは主に再導入個体	
174			カツオドリ目	グンカンドリ科	コグンカンドリ	不定期		●	●	●			
175					カツオドリ科	アカアシカツオドリ	迷鳥		●	●			
176						カツオドリ	冬鳥		●	●	●	●	亜種カツオドリ
177				ウ科	ヒメウ	冬鳥		●	●				
178					ウミウ	冬鳥	※	●	●			1970年代までは繁殖していたが現在は冬鳥	
179					カワウ	留鳥	○	●	●	●	亜種カワウ, 2010年代以降繁殖するようになった江戸時代の記録がある2016.5 築上町		
180				ペリカン目	トキ科	トキ	絶滅		●	●			
181						フロンストキ	迷鳥		●	●			
182						ヘラサギ	冬鳥		●	●	●	●	
183					サギ科	クロツラヘラサギ	冬鳥		●	●	●	●	
184			サンカノゴイ			冬鳥		●	●	●	●		
185			ヨシゴイ			夏鳥	○	●	●	●	●	亜種ヨシゴイ	
186			オオヨシゴイ			迷鳥		●	●				
187			ミゾゴイ			夏鳥	○	●	●	●	●		
188			ゴイサギ			留鳥	○	●	●	●	●		
189			ササゴイ			夏鳥/留鳥	○	●	●	●	●	筑後地域では少数が越冬	
190			アカガシラサギ	不定期		●	●	●	●				
191			アマサギ	夏鳥	○	●	●	●	●				
192			アオサギ	留鳥	○	●	●	●	●				
193			ムラサキサギ	不定期		●	●	●	●				
194				ダイサギ	留鳥	○	●	●	●	●	亜種ダイサギ, 亜種チュウダイサギ		

●は確認されたことを示す。

植物群落

植物等

哺乳類

鳥類

爬虫類

両生類

魚類

昆虫類

甲殻類等

クモ形類等

貝類

表 鳥類-1(続き)

No.	分類	渡り区分	繁殖	地域				備考		
				北九州	福岡	筑豊	筑後			
195	ペリカン目(続き)	サギ科(続き)	チュウサギ	夏鳥	○	●	●	●		
196			コサギ	留鳥	○	●	●	●		
197			クロサギ	留鳥	○	●	●	●		
198			カラシラサギ	旅鳥		●	●	●		
199			ハイロペリカン	迷鳥		●	●	●		
200	タカ目	ミサゴ科	ミサゴ	留鳥	○	●	●	●		
201			タカ科	ハチクマ	旅鳥	※	●	●	●	繁殖確認例はあるが不定期
202		クロハゲワシ		迷鳥		●	●	●	2016.2 糸島市	
203		クマタカ		留鳥	○	●	●	●		
204		カラフトワシ		迷鳥		●	●	●	2015.10 北九州市	
205		カタシロワシ		迷鳥		●	●	●		
206		アカハラダカ		旅鳥		●	●	●		
207		ツミ		夏鳥	○	●	●	●	亜種ツミ	
208		ハイタカ		冬鳥		●	●	●		
209		オオタカ		留鳥	○	●	●	●		
210		チュウヒ		留鳥	○	●	●	●		
211		ハイロチュウヒ		冬鳥		●	●	●		
212		マダラチュウヒ		迷鳥		●	●	●	2016.5 築上町	
213		トビ		留鳥	○	●	●	●		
214		オオワシ		迷鳥		●	●	●	2015.2 福津市	
215		オジロワシ		迷鳥		●	●	●		
216		サシバ		夏鳥	○	●	●	●		
217		ケアシノスリ		不定期		●	●	●		
218		オオノスリ		不定期		●	●	●		
219		ノスリ		冬鳥		●	●	●	亜種カラノスリ*, 亜種ノスリ	
220	フクロウ目	フクロウ科	アオバズク	夏鳥	○	●	●	●	亜種アオバズク	
221			コノハズク	夏鳥	○	●	●	●		
222			リュウキュウコノハズク	夏鳥	○	●	●	●	亜種リュウキュウコノハズク	
223			オオコノハズク	留鳥/冬鳥	○	●	●	●	亜種オオコノハズク	
224			トラフズク	冬鳥		●	●	●		
225			コミミズク	冬鳥		●	●	●		
226			フクロウ	留鳥	○	●	●	●	亜種キュウシュウフクロウ	
227			ヤツガシラ科	ヤツガシラ	旅鳥		●	●	●	
228	ブッポウソウ目	ブッポウソウ科	ブッポウソウ	夏鳥	○	●	●	●		
229			カワセミ科	アカショウビン	夏鳥	○	●	●	●	亜種アカショウビン
230				ヤマショウビン	不定期		●	●	●	
231				カワセミ	留鳥	○	●	●	●	
232				ヤマセミ	留鳥	○	●	●	●	亜種ヤマセミ
233	キツツキ目	キツツキ科	アリスイ	冬鳥		●	●	●	亜種アリスイ	
234			コガラ	留鳥	○	●	●	●	亜種キュウシュウコガラ	
235			チャバラアカガラ	迷鳥		●	●	●	2023.4 福津市	
236			アカガラ	不定期		●	●	●	亜種ハシフトアカガラ, 亜種アカガラ	
237			オオアカガラ	留鳥	○	●	●	●	亜種ナミエオオアカガラ	
238			アオガラ	留鳥	○	●	●	●	亜種カゴシマアオガラ	
239	ハヤブサ目	ハヤブサ科	チョウゲンボウ	冬鳥		●	●	●	亜種チョウゲンボウ	
240			アカアシチョウゲンボウ	不定期		●	●	●		
241			コチョウゲンボウ	冬鳥		●	●	●	●	亜種コチョウゲンボウ
242			チゴハヤブサ	旅鳥		●	●	●	●	
243			ハヤブサ	留鳥	○	●	●	●	●	亜種ハヤブサ
244	スズメ目	ヤイロチョウ科	ヤイロチョウ	夏鳥	○	●	●	●		
245			サンショウクイ科	サンショウクイ	旅鳥	※	●	●	●	1980年代までは繁殖していたが現在は旅鳥
246		リュウキュウサンショウクイ	留鳥	○	●	●	●	●		
247		コウライウグイス科	コウライウグイス	不定期		●	●	●		
248			オウチュウ科	カンムリオウチュウ	迷鳥		●	●	●	2012.11 福岡市
249				ハイロオウチュウ	迷鳥		●	●	●	2017.9 福津市
250		オウチュウ		不定期		●	●	●		
251		カササギヒタキ科	モズ科	サンコウチョウ	夏鳥	○	●	●	●	亜種サンコウチョウ
252				オオカモズ	迷鳥		●	●	●	
253				チゴモズ	旅鳥	※	●	●	●	●
254	セアカモズ			迷鳥		●	●	●	●	2019.10 福岡市
255	アカモズ			旅鳥		●	●	●	●	亜種シマアカモズ, 亜種アカモズ
256	モズ			留鳥	○	●	●	●	●	
257	タカサゴモズ			迷鳥		●	●	●	●	
258	カラス科			カケス	留鳥	○	●	●	●	●
259		オナガ	絶滅	※	●	●	●	●	1960年代まで確認後、絶滅したと思われる。	
260		カササギ	留鳥	○	●	●	●	●	従来の筑後平野個体群に対して鳥類目録第8版では外来種とされる。	
261		ホシガラス	迷鳥		●	●	●	●	亜種ハシナガホシガラス, 亜種ホシガラス, 亜種不明	
262		コクマルガラス	冬鳥		●	●	●	●		
263		ミヤマガラス	冬鳥		●	●	●	●		
264		ハシボソガラス	留鳥	○	●	●	●	●	亜種ハシボソガラス	
265		ハシブトガラス	留鳥	○	●	●	●	●	亜種ハシブトガラス	
266		レンジャク科	キレンジャク	冬鳥		●	●	●	●	
267			ヒレンジャク	冬鳥		●	●	●	●	
268	シジュウカラ科	ヒガラ	留鳥	○	●	●	●	●		
269		キバラガラ	不定期		●	●	●	●		
270		ヤマガラ	留鳥	○	●	●	●	●	亜種ヤマガラ	
271		コガラ	留鳥	○	●	●	●	●	亜種コガラ	
272		シジュウカラ	留鳥	○	●	●	●	●	亜種シジュウカラ	
273		ツリスガラ科	ツリスガラ	冬鳥		●	●	●		
274		ヒゲガラ科	ヒゲガラ	迷鳥		●	●	●	●	2017.2 北九州市
275			ヒバリ科	ヒバリ	留鳥	○	●	●	●	●
276	ハマヒバリ	迷鳥			●	●	●	●	2012.11 福岡市	
277	ヒメコウテンシ	不定期			●	●	●	●		
278	コヒバリ	迷鳥			●	●	●	●		
279	ヒヨドリ科	ヒヨドリ	留鳥	○	●	●	●	●	亜種ヒヨドリ	
280		シロガシラ	留鳥	※	●	●	●	●	亜種シロガシラ* 2010年代後半、北九州市響灘埋立地で定着	
281	ツバメ科	シロウドツバメ	旅鳥		●	●	●	●		
282		ツバメ	夏鳥	○	●	●	●	●	亜種アカハラツバメ, 亜種ツバメ	
283		イワツバメ	留鳥	○	●	●	●	●		
284		コシアカツバメ	夏鳥	○	●	●	●	●		
285		ウグイス科	ウグイス	留鳥	○	●	●	●	●	亜種ウグイス
286	チョウセンウグイス		迷鳥		●	●	●	●	2013.5 福津市	
287	ヤブサメ		夏鳥	○	●	●	●	●		
288	エナガ科	エナガ	留鳥	○	●	●	●	●	亜種キュウシュウエナガ	
289	ムシクイ科	キマコムシクイ	旅鳥		●	●	●	●		
290		カラフトムシクイ	迷鳥		●	●	●	●		
291		カラフトムジセッカ	迷鳥		●	●	●	●	2015.12 北九州市	
292		ムジセッカ	不定期		●	●	●	●		

●は確認されたことを示す。

植物群落

植物等

哺乳類

鳥類

爬虫類

両生類

魚類

昆虫類

甲殻類等

クモ形類等

貝類

表 鳥類-1(続き)

No.	分類	渡り区分	繁殖	地域				備考	
				北九州	福岡	筑豊	筑後		
293	スズメ目(続き)	ムシクイ科(続き)	キタヤナギムシクイ	迷鳥		●			2011.9 福岡市
294			チフチャフ	迷鳥		●			
295			センダイムシクイ	夏鳥/旅鳥	○	●	●	●	
296			エゾムシクイ	旅鳥		●	●	●	
297			アムールムシクイ	旅鳥		●			
298			メボソムシクイ	旅鳥		●	●		
299			オオムシクイ	旅鳥		●	●	●	
300			コムシクイ	旅鳥		●	●	●	
301		ヨシキリ科	オオヨシキリ	夏鳥	○	●	●	●	
302			コヨシキリ	旅鳥		●	●	●	
303			ヤブヨシキリ	迷鳥		●			2022.2 中間市
304		センニュウ科	エゾセンニュウ	不定期		●	●		
305			オオセッカ	迷鳥			●		亜種不明* 2022.1 小竹町。定期飛来(冬鳥)の可能性あり。
306			シマセンニュウ	旅鳥		●	●		
307			ウチヤマセンニュウ	夏鳥	○	●	●		
308			マキノセンニュウ	不定期		●	●		
309		セッカ科	セッカ	留鳥	○	●	●	●	
310		メジロ科	チョウセンメジロ	迷鳥		●			2012.4 福岡市
311			メジロ	留鳥	○	●	●	●	亜種メジロ
312		クイタダキ科	クイタダキ	冬鳥		●	●	●	
313		ミソサザイ科	ミソサザイ	留鳥/冬鳥	○	●	●	●	亜種ミソサザイ
314		ゴジュウカラ科	ゴジュウカラ	留鳥	○	●	●	●	亜種ゴジュウカラ
315		ムクドリ科	ギンムクドリ	不定期		●	●	●	
316			ムクドリ	留鳥	○	●	●	●	
317			シベリアムクドリ	迷鳥		●			2014.2 福津市
318			コムクドリ	旅鳥	※	●	●	●	1例の繁殖記録がある
319			カラムクドリ	不定期		●	●		
320			ホシムクドリ	冬鳥		●	●	●	
321		ツグミ科	トラツグミ	留鳥	○	●	●	●	
322			マミジロ	旅鳥		●	●	●	
323			ヤドリギツグミ	迷鳥		●			
324			クロウタドリ	迷鳥		●			
325			クロツグミ	夏鳥/旅鳥	○	●	●	●	
326			カラアカハラ	旅鳥	※	●	●		2010年代以降脊振山地で少数繁殖の可能性有り
327			マミチャジナイ	旅鳥/冬鳥		●	●	●	
328			シロハラ	冬鳥		●	●	●	
329			アカハラ	旅鳥/冬鳥		●	●	●	亜種オオアカハラ*, 亜種アカハラ
330			ツグミ	冬鳥		●	●	●	
331			ハチジョウツグミ	冬鳥		●	●	●	
332		ヒタキ科	エゾヒタキ	旅鳥		●	●	●	
333			サメビタキ	旅鳥		●	●	●	
334			コサメビタキ	旅鳥/夏鳥	○	●	●	●	
335			オオルリ	夏鳥	○	●	●	●	亜種オオルリ
336			オガワコマドリ	不定期		●	●		
337			ノゴマ	旅鳥		●	●	●	
338			コルリ	旅鳥/夏鳥	※	●	●	●	2010年代後半以降繁殖期に未確認
339			コマドリ	旅鳥/夏鳥	※	●	●	●	亜種コマドリ 2000年代以降繁殖はみられない
340			シマゴマ	旅鳥		●	●	●	
341			マミジロキビタキ	不定期		●	●	●	
342			キビタキ	夏鳥	○	●	●	●	
343			リュウキュウキビタキ	迷鳥		●			2014.5 北九州市
344			ムギマキ	旅鳥/冬鳥		●	●	●	
345			ニシオジロビタキ	不定期		●	●	●	
346			オジロビタキ	迷鳥		●	●	●	2010.4 福岡市
347			ルリビタキ	冬鳥		●	●	●	
348			クロジョウビタキ	迷鳥		●			
349			ジョウビタキ	冬鳥		●	●	●	
350			ヒメソビヨ	迷鳥		●	●		
351			イソヒヨドリ	留鳥	○	●	●	●	亜種イソヒヨドリ
352			ノビタキ	旅鳥		●	●	●	
353			イナバヒタキ	迷鳥		●			
354			サバクヒタキ	迷鳥		●			
355		カワガラス科	カワガラス	留鳥	○	●	●	●	
356		スズメ科	ニューナイスズメ	冬鳥		●	●	●	
357			スズメ	留鳥	○	●	●	●	
358		イワヒバリ科	ヤマヒバリ	迷鳥		●			
359			カヤクグリ	冬鳥		●	●	●	
360		セキレイ科	イワミセキレイ	不定期	※	●	●	●	1970年代に繁殖確認例がある
361			ツメナガセキレイ	旅鳥		●	●	●	亜種キタツメナガセキレイ, 亜種マミジロツメナガセキレイ, 亜種ツメナガセキレイ
362			キガシラセキレイ	不定期		●	●	●	亜種キガシラセキレイ
363			キセキレイ	留鳥	○	●	●	●	
364			ハクセキレイ	留鳥	○	●	●	●	亜種タイワンハクセキレイ, 亜種ハクセキレイ, 亜種ホオジロハクセキレイ
365			セグロセキレイ	留鳥	○	●	●	●	
366			マミジロタヒバリ	不定期		●	●	●	
367			コマミジロタヒバリ	不定期		●			
368			マキバタヒバリ	迷鳥		●			
369			ヨーロッパビンズイ	迷鳥		●			2023.10 宗像市
370			ビンズイ	冬鳥		●	●	●	亜種ビンズイ
371			セジロタヒバリ	不定期		●	●		
372			ウスベニタヒバリ	迷鳥		●			
373			ムネアカタヒバリ	冬鳥		●	●	●	
374			タヒバリ	冬鳥		●	●	●	
375		アトリ科	アトリ	冬鳥		●	●	●	
376			シメ	冬鳥		●	●	●	
377			コイカル	不定期		●	●	●	
378			イカル	留鳥	○	●	●	●	
379			ウソ	冬鳥		●	●	●	亜種アカウソ, 亜種ウソ
380			ハギマシコ	冬鳥		●	●	●	
381			アカマシコ	迷鳥		●	●	●	2013.5 宗像市
382			ベニマシコ	冬鳥		●	●	●	
383			オオマシコ	迷鳥		●	●	●	
384			カワラヒワ	留鳥	○	●	●	●	亜種オオカワラヒワ, 亜種カワラヒワ
385			ベニヒワ	不定期		●	●	●	亜種ベニヒワ
386			イスカ	不定期		●	●	●	
387			マヒワ	冬鳥		●	●	●	
388		ツメナガホオジロ科	ツメナガホオジロ	冬鳥		●	●	●	
389			ユキホオジロ	迷鳥		●			亜種ユキホオジロ
390		ホオジロ科	シラガホオジロ	迷鳥		●	●		

●は確認されたことを示す。

植物群落
植物等
哺乳類
鳥類
爬虫類
両生類
魚類
昆虫類
甲殻類等
クモ形類等
貝類

表 鳥類-1(続き)

No.	分類			渡り区分	繁殖	地域				備考
						北九州	福岡	筑豊	筑後	
391	スズメ目(続き)	ホオジロ科(続き)	ホオジロ	留鳥	○	●	●	●	●	
392			シロハラホオジロ	旅鳥		●	●	●	●	
393			ホオアカ	留鳥	○	●	●	●	●	
394			コホオアカ	旅鳥/冬鳥		●	●	●	●	
395			キマユホオジロ	不定期		●	●	●	●	
396			カシラダカ	冬鳥		●	●	●	●	
397			ミヤマホオジロ	冬鳥		●	●	●	●	
398			シマアオジ	不定期		●	●	●	●	
399			シマノジコ	不定期		●	●	●	●	
400			ノジコ	旅鳥		●	●	●	●	
401			シベリアアオジ	旅鳥		●	●	●	●	
402			アオジ	冬鳥		●	●	●	●	
403			クロジ	冬鳥		●	●	●	●	
404			シベリアジュリン	冬鳥		●	●	●	●	亜種シベリアジュリン
405			コジュリン	不定期		●	●	●	●	亜種不明*
406			オオジュリン	冬鳥		●	●	●	●	
407		ゴマフスズメ科	キガシラシトド	迷鳥		●	●	●	●	2019.3 福津市
	日本鳥類目録改訂第8版掲載種 計407種					352	396	261	290	
408	ハト目	ハト科	カノコバト	迷鳥		●	●	●	●	日本鳥類目録改訂第8版 検討中の種・亜種 2017.10 福岡市
409	チドリ目	カモメ科	アメリカセグロカモメ	迷鳥		●	●	●	●	日本鳥類目録改訂第8版 検討中の種・亜種 2020.12 宗像市
410	スズメ目	ツグミ科	ノドアカツグミ	迷鳥		●	●	●	●	日本鳥類目録改訂第8版 検討中の種・亜種 2016.11 春日市
411		セキレイ科	サメイロタヒバリ	迷鳥		●	●	●	●	日本鳥類目録改訂第8版 検討中の種・亜種 2009.1 福岡市
計	日本鳥類目録第8版の掲載種および検討中の種・亜種 計411種					352	400	261	290	

(注) 外来種については、日本鳥類目録改訂第8版に記された繁殖記録のある外来種、即ち「人為的に導入された種・亜種」に限定すれば、コブハクチョウ(カモ目カモ科)、コジュケイ(キジ目キジ科)、カワラバト(ドバト)(ハト目ハト科)、ソウシチョウ(スズメ目ソウシチョウ科)、ガビチョウ(同目同科)が、それぞれ県内4地域で留鳥として繁殖が認められる。カササギも同様だが、一部地域では自然分布域からの飛来に由来する可能性も含まれるため、上記の表に記した。

凡例

渡り区分

- 留鳥 県内で繁殖し、一年を通してみられるもの。
- 夏鳥 繁殖期に飛来し、県内で繁殖するもの。
- 冬鳥 越冬のため県内に飛来するもの。
- 旅鳥 渡りの途中に県内に飛来するもの。
- 不定期 毎年ではなく不定期に記録されるもの。
- 迷鳥 県内での記録がおおむね5例以下のもの。

繁殖

- 定期的に繁殖していることを示す。
- ※ 備考を参照。

地域

- 確認されたことを示す。

北九州：北九州市、行橋市、豊前市、中間市、芦屋町、水巻町、岡垣町、遠賀町、菊田町、みやこ町、吉富町、上毛町、築上町

福岡：福岡市、筑紫野市、春日市、大野城市、宗像市、太宰府市、古賀市、福津市、糸島市、那珂川市、宇美町、篠栗町、志免町、須恵町、新宮町、久山町、粕屋町

筑豊：直方市、飯塚市、田川市、宮若市、嘉麻市、小竹町、鞍手町、桂川町、香春町、添田町、糸田町、川崎町、大任町、赤村、福智町

筑後：大牟田市、久留米市、柳川市、八女市、筑後市、大川市、小郡市、うきは市、朝倉市、みやま市、筑前町、東峰村、大刀洗町、大木町、広川町

備考

日本鳥類目録改訂第8版で国内で2亜種以上確認されている種については、同書記載の県内で確認された亜種(亜種不明を含む)を記載。但し、*印を付けた亜種コシジロオオソリハシシギ、亜種カラノスリ、亜種シロガシラ、オオセッカの亜種不明、亜種オオアカハラ、コジュリンの亜種不明は県内での記録がある。また、福岡沖ノ島で記録されたとする亜種ホシガラスは黒木(1962)から亜種不明が妥当。

繁殖に関する情報など特筆すべき内容を記載。

前回改訂時(2011年)の目録作成時以降、新たに記録された種について、証拠となる画像等が確認された初例の年月と自治体などを記載。

表 鳥類-2 数値基準の凡例区分

生息の有無	1:あり	2:なし							
分布パターン	1:1ヶ所のみ	2:2-5ヶ所	3:6-10ヶ所	4:まばら	5:普遍	6:偶産			
分布面積	1:100km ² 未満	2:100-5,000km ²	3:不明						
生息環境の消失危険度	1:極大	2:大	3:あり	4:なし	5:好転				
生息概数	1:絶滅状態	2:50未満	3:50-250	4:250-1,000	5:1,000-2,500	6:2,500-10,000	7:10,000以上		
個体数の増減	1:急減(80%以上)	2:顕著に減少(50-80%)	3:減少(30-50%)	4:減少傾向(10-30%)	5:増減なし	6:増加傾向	7:増加	8:急増	9:変動大
信頼度	1:正確に把握	2:ほぼ把握	3:おおむね把握	4:かなり不明	5:ほぼ不明				

生息の有無、分布パターン、分布面積、生息環境の消失危険度、生息概数は2011年～2020年の最近10年間の状況(可能な限り最新の状況)。

個体数の増減は前回改訂時の期間(2001～2011年)と今回改訂時の期間(2012～2023年)との比較により判定した。

表 鳥類-3 新旧カテゴリー対照表

	福岡県RDB2011のカテゴリー							再選定種数※	追加種数※	掲載種数※
	絶滅	野生絶滅	絶滅危惧IA類	絶滅危惧IB類	絶滅危惧II類	準絶滅危惧	情報不足			
今回のカテゴリー	絶滅	トキ オナガ						2	0	2
	野生絶滅							0	0	0
	絶滅危惧IA類		ハラシギ カラフトアオアシシギ カンムリウミスズメ ヒメクロウミツバメ ヨシゴイ チュウビ ブッポウソウ サンショウクイ コマドリ	ヘニアジサン コルリ				11	0	11
	絶滅危惧IB類		コノハズク リュウキュウコノハズク ウチヤマセンニュウ	ヨタカ クロツラハラサギ クマタカ ヤイロチヨウ	ホウロクシギ ダイシャクシギ コアジサシ	オオソリハシシギ	ウズラ オオコノハズク	13	3	16
	絶滅危惧II類			ハラサギ ミゾゴイ	シノリガモ クロガモ ホオジロガモ カラスバト ミヤコドリ ウズラシギ タカブシギ ツバメチドリ ズグロカモメ ツミ アオバズク コミミズク オオアカゲラ ハヤブサ センダイムシクイ	ジュウイチ タゲリ シロチドリ タマシギ オグロシギ ミユビシギ ハマシギ ウミスズメ サンカンゴイ ササゴイ アマサギ ハイロチュウヒ サンバ ヤマセミ コチヨウゲンボウ	コサメビタキ	33	11	44
	準絶滅危惧			カラシラサギ	トモエガモ ミコアイサ ヤマドリ(亜種アカヤマドリ) アカエリカイツブリ イカルチドリ アカシヨウビン サンコウチヨウ	ツクシガモ ツツドリ クイナ ヒクイナ ケリ シロエリオオハム チュウサギ クロサギ ハチクマ オオタカ ツリスガラ コシアカツバメ オオヨシキリ ゴジュウカラ カヤクグリ		23	18	41
	情報不足								0	5
(合計)							82	37	119	

上位のカテゴリーに移行
 下位のカテゴリーに移行
 カテゴリー変更なし

	福岡県RDB2011のカテゴリー							合計種数
	絶滅	野生絶滅	絶滅危惧IA類	絶滅危惧IB類	絶滅危惧II類	準絶滅危惧	情報不足	
今回除外した種※						カンムリカイツブリ オシドリ ノスリ クロツグミ オオルリ ハギマシコ ニウナイスズメ	コガラ	8

植物群落
植物等
哺乳類
鳥類
爬虫類
両生類
魚類
昆虫類
甲殻類等
クモ形類等
貝類

表 鳥類-3(続き)

		今回追加した種			
今回のカテゴリー	絶滅				
	野生絶滅				
	絶滅危惧IA類				
	絶滅危惧IB類	オバシギ チゴモズ アカモズ(亜種アカモズ)			
	絶滅危惧II類	ムナグロ ダイゼン チュウシャクシギ	オジロトウネン トウネン ソリハシシギ	アカエリヒレアシシギ ツルシギ コウノトリ	ゴイサギ コサギ
	準絶滅危惧	カッコウ ハジロカイツブリ ハジロコチドリ メダイチドリ キョウジョシギ	ヒバシシギ オオジシギ アカアシシギ コアアシシギ アオアシシギ	ユリカモメ カモメ アジサシ オオハム カワガラス	タヒバリ カシラダカ ノジコ
	情報不足	ビロードキンクロ キジ アオシギ	トラフズク オオセッカ		

※ 再選定種数 …福岡県RDB2011の選定種のうち、今回（福岡県RDB2024）でも再び選定した種の数。
 追加種数 …福岡県RDB2011の選定種以外で、今回（福岡県RDB2024）において新たに選定した種の数。
 掲載種数 …福岡県RDB2024に選定した種の数（再選定種数と追加種数の合計）。
 今回除外した種…福岡県RDB2011の選定種のうち、再評価の結果、今回（福岡県RDB2024）は選定しなかった種。

植物群落

植物等

哺乳類

鳥類

爬虫類

両生類

魚類

昆虫類

甲殻類等

クモ形類等

貝類

トキ

Nipponia nippon (Temminck, 1835)

絶滅(EX)

2011
絶滅環境省
絶滅危惧IA類

選定理由 江戸時代末期には、現在の北九州市、福岡市に該当する地域に渡来していたという文献記載が存在する。1798年（寛政10年）に編纂された筑前國續風土記附録には「國中所々に集りをれり」とあり（加藤ら、1978）、シーボルトは1826年の江戸参府途中に北九州市木屋瀬周辺で、春にわなにかかることを聞き、書き記している（斎藤、1967）。福本（1903）には、幕末に福岡市中央区大濠へ晩秋になると北方から渡ってきていたが、明治期になり銃猟が盛んになると、1900年頃には渡来しなくなったことが記されている。

分布情報 北九州市八幡西区、福岡市中央区。ただし、1900年頃以降の記録なし。

オナガ

Cyanopica cyanus (Pallas, 1776)

絶滅(EX)

2011
絶滅環境省
—

選定理由 現在の柳川市、久留米市に該当する地域では、昭和初期まで年中生息し、かつ繁殖していたが（川口、1937：倉成、1962）、1963年の久留米市での記録（倉成、1964）を最後に途絶え、絶滅したと考えられる。九州の他県では佐賀県・熊本県・宮崎県でも1960年以前の記録がある（川口、1937：宿屋、1961：倉成、1962）。

分布情報 北九州市八幡西区、久留米市、柳川市、筑後市、みやま市、大木町。ただし、1963年以降の記録なし。

ヘラシギ

Calidris pygmaea (Linnaeus, 1758)

絶滅危惧IA類(CR)

2011
絶滅危惧IA類環境省
絶滅危惧IA類

選定理由 世界で最も絶滅の危機に瀕した鳥類の一つといわれており、成熟個体の総生息数は500羽以下（IUCN, 2024）と考えられている。県内では、1980年代には博多湾や有明海の埋立地などで毎年のように確認されており、国内で最も出現頻度が高い地域の一つであったが、1990年代以降、確認頻度は減少し、2000年以降はごく稀に確認される程度まで減少している。確認頻度の減少は総個体数が減少していることによると考えられる。

危機要因 その他（個体群の縮小）

分布情報 北九州市小倉南区、福岡市東区、苅田町

種の概要 全長14～16cm。シギの中でも小型の種。冬羽は頭部から背にかけて灰色で、幼鳥は褐色がかかる。腹部は白色。夏羽では頭部から胸部にかけて橙色。一番の特徴はヘラ状の嘴で、この点で他種とは区別できる。繁殖地はチュコト半島南部からカムチャッカ北部で、インド南東部・スリランカから中国南部、インドシナ半島で越冬する。日本では春秋の渡りの時期に干潟、河口部、砂浜海岸で記録がある。昆虫類、甲殻類、種子などを食べる（環境省、2014）。

特記事項 国内希少野生動植物種。カテゴリー判定基準：①, A2, C2b



撮影：岡部海都

カラフトアオアシシギ

Tringa guttifer (Nordmann, 1835)

絶滅危惧IA類(CR)

2011
絶滅危惧IA類環境省
絶滅危惧IA類

選定理由 ヘラシギに次いで絶滅の危機に瀕したシギ類の一つといわれており、成熟個体の総生息数は1,000羽前後 (IUCN, 2024) と考えられている。県内では、1980年代には博多湾や有明海の埋立地などで比較的稀な種であったものの、国内では出現頻度が高い地域であった。2000年以降はごく稀に確認される程度まで減少している。確認頻度の減少は総個体数が減少していることによると考えられる。

危機要因 その他 (個体群の縮小)

分布情報 福岡市西区, 築上町

種の概要 全長29~32cm。頭部から背にかけては灰色を帯びた褐色。腹部は白色で、胸部から脇には細かい黒斑が多数入る。嘴は頭部よりも若干長い。繁殖地はサハリンとオホーツク沿岸西部などで、インド北東部、バングラディッシュ、ミャンマー、中国海南省、マレー半島などで越冬する。日本では春秋の渡りの時期、全国の河口部の干潟や海に近い池沼、水田などで記録がある。小魚、甲殻類、軟体動物などを食べる (環境省, 2014)。

特記事項 国内希少野生動物植物種。カテゴリ判定基準: ①, A2, C2b



撮影: 岡部海都

ベニアジサシ

Sterna dougallii Montagu, 1813

絶滅危惧IA類(CR)

2011
絶滅危惧IB類環境省
絶滅危惧II類

選定理由 大牟田市沖の有明海海上に浮かぶ人工島の三池島で、1994年に繁殖が確認され、日本での繁殖地の北限となっている。本島は海底地下炭鉱の坑道吸気のために建設されたが、炭鉱閉山に伴い、今後の保全に多くの課題が残されている。三池島には夏鳥として飛来するが、数羽~500羽前後と年次変動が大きく、飛来しても天候や捕食者などで繁殖に失敗する年が多くなっている。国内の他地域では、南西諸島で繁殖するが、繁殖成功率は低い。

危機要因 捕食者侵入 (ハヤブサ, ハシブトガラス), 気候変動, 植生変化, その他 (台風や大雨による影響, 生息地の管理放棄による崩壊)

分布情報 福岡市東区, 大牟田市, 苅田町

種の概要 全長約31cm。額から後頭にかけて黒く、背、翼上面は淡青灰色。下面は白色で淡いピンク色を帯びる。尾は深い燕尾。足は橙赤色。嘴は黒色で繁殖期は赤色に変色する。西部太平洋および大西洋の熱帯、亜熱帯、インド洋に分布。日本には夏鳥として飛来し、福岡県三池島を北限として、主に奄美諸島以南の沿岸の岩礁や小島で繁殖する。オーストラリアまで渡って越冬する。コロニーを形成し、海拔10m以内にある海岸性の草本の間隙や下で営巣する (環境省, 2014)。

特記事項 カテゴリ判定基準: ②, A4, B1・3



撮影: 江口浩喜

カムリウミスズメ

Synthliboramphus wumizusume (Temminck, 1836)

絶滅危惧IA類(CR)

2011
絶滅危惧IA類環境省
絶滅危惧II類

選定理由 かつて推定約400個体が繁殖していた沖ノ島属島の小屋島では、二度のドブネズミ侵入に伴う捕食被害からの回復が順調ではなく、現在の個体数は数十個体程度。鳥帽子島では推定100個体ほどが繁殖期に滞在するが、2022年にハシブトガラスによって少なくとも29個体の成鳥と50個の卵が捕食されており、捕食が頻繁に生じると個体群の存続が危惧される (Kongsurakan et al., 2023)。白島周辺での繁殖の可能性も濃厚だが、繁殖個体数は非常に少ないと推測される。

危機要因 外来種侵入 (ドブネズミ), 捕食者侵入 (ハシブトガラス, ハヤブサ), 植生変化, 気候変動, 産地局限, その他 (洋上風力発電開発)

分布情報 北九州市若松区, 福岡市東区, 福岡市西区, 宗像市, 福津市, 糸島市, 新宮町, 岡垣町

種の概要 全長約24cm。ウミスズメに似るが、夏羽では頭部に冠羽がある。繁殖分布は黒潮および対馬海流が流れる日本周辺に限られている。国外では韓国九屈諸島で繁殖。繁殖後は北海道周辺まで北上して夏から秋を過ごした後、冬には再び繁殖地周辺に南下する (Yamaguchi et al., 2016)。沿岸域の島嶼において、崖や岩の割れ目、石と石の間、草の間などに営巣する。個体数は種全体で5,000~10,000羽程度とみられる。

特記事項 国指定天然記念物。カテゴリ判定基準: ②, A4



撮影: 岡部海都

ヒメクロウミツバメ

Hydrobates monorhis (Swinhoe, 1867)

絶滅危惧IA類(CR)

2011
絶滅危惧IA類

環境省
絶滅危惧II類

選定理由 県内では唯一、沖ノ島属島の小屋島にて繁殖する。かつて推定約400個体が繁殖していたが、二度のドブネズミ侵入に伴う捕食被害を受け、繁殖個体の大多数が失われた。2023年現在、繁殖期の夜間に島に訪れる個体数は増加傾向にあるが、実際に繁殖している数は未だ捕食を受ける前の水準には遠く及ばない。隣接する沖ノ島にはドブネズミとクマネズミが生息しており、ネズミ類が再々侵入し捕食されるリスクは失われていない。営巣地のヒゲスゲ群落の衰退も懸念事項である。

危機要因 外来種侵入(ドブネズミ)、植生変化、気候変動、産地局限、その他(洋上風力発電開発)

分布情報 宗像市

種の概要 全長約20cm。全体が黒褐色で、翼の上面にやや不鮮明な淡色帯がある。嘴や足は黒く、尾は浅い凹形。日本近海の太平洋と日本海、東シナ海の沿岸および外洋に分布する。日本からロシアのウラジオストク、韓国、中国の沿岸の島で繁殖する。非繁殖期はインド洋にも生息する。国内では若手県三貫島、京都府杵島、伊豆諸島八丈小島小池根などでの繁殖が知られている。国内では5,000つがい以下と推定されている(環境省, 2014)、(石川県, 2020)。

特記事項 カテゴリー判定基準: ②, A4



撮影: 岡部海都

ヨシゴイ

Ixobrychus sinensis (Gmelin, 1789)

絶滅危惧IA類(CR)

2011
絶滅危惧IA類

環境省
準絶滅危惧

選定理由 県内では5地点で繁殖期の生息が確認されているが、いずれの生息地も生息数は数つがい、県内の生息数は20羽未満となっている。鞍手町の生息地では湿地を農地に戻す計画が進んでおり、生息地消失の危機にある。小竹町、宗像市の生息地では抽水植物が繁茂することにより解放水面が減少し、近年繁殖期に確認できなくなっている。また、ヨシゴイの生息が知れ渡り、長時間撮影者が滞在する場所もあり、影響が懸念される。

危機要因 湖沼開発、湿地開発、ため池改修、水質汚濁、農業使用、気候変動、植生変化、産地局限、その他(写真撮影などによる影響)

分布情報 北九州市若松区、北九州市小倉南区、福岡市西区、筑後市、宗像市、福津市、小竹町、鞍手町

種の概要 全長約37cm。全身淡褐色を基調とする小型のサギ。インドから東南アジア、中国にかけて分布。日本では北海道から九州まで夏鳥として繁殖し、琉球列島では越冬する。営巣環境は湖沼や河川の抽水植物群落である。下に水のある場所で、ヨシやヒメガマの途中にその葉をたくしこんで椀状の巣を作る。個体数の全国的な現状把握はされていないが、生息環境は長期的には河川改修などの影響で徐々に減少していると考えられる(環境省, 2014)。

特記事項 福岡県指定希少野生動物種。カテゴリー判定基準: ①②, A4, B2・3, D



撮影: 片岡智徳

チュウヒ

Circus spilonotus Kaup, 1847

絶滅危惧IA類(CR)

2011
絶滅危惧IA類

環境省
絶滅危惧IB類

選定理由 北九州市若松区と苅田町で繁殖期に生息が確認されている。北九州市若松区では2004年以降繁殖が確認され、現在も1つがいが繁殖している。苅田町では繁殖していると思われるが確認されていない。繁殖には広いヨシ原が必要であるが、2か所ともに開発によりヨシ原が減少して、必要最小限の広さとなり、繁殖できなくなるのではと危惧されている。遠賀川沿いや瑞梅寺川河口周辺で冬季や渡り途中に飛来することがあるが、そのほかの地域では稀。

危機要因 湿地開発、草地開発、産地局限、その他(開発によるヨシ原の減少)

分布情報 北九州市門司区、北九州市若松区、北九州市小倉南区、福岡市西区、直方市、中間市、鞍手町、苅田町

種の概要 全長雄50~52cm、雌50~57cm。足の長い中型のタカ。雄成鳥では初列雨覆、小翼羽、尾羽などの上面に灰色、腰に白帯が出る個体が多い。雌成鳥では、年を重ねるほどに暗色になる傾向がみられる。バイカル湖周辺、モンゴルから東日本にかけて繁殖し、日本から南、東南アジアにかけて越冬する。ヨシ原の広がる湖、河川(下流)、潟、埋立地などに生息する。主にヨシ原で繁殖し、餌は小型哺乳類、鳥類などを捕食する(環境省, 2014)。

特記事項 国内希少野生動物種。カテゴリー判定基準: ①②, A4, D



撮影: 田代省二

ブッポウソウ

Eurystomus orientalis (Linnaeus, 1766)

絶滅危惧IA類(CR)

2011
絶滅危惧IA類

環境省
絶滅危惧IB類

選定理由 森の宝石といわれるブッポウソウは、八女市（旧矢部村）で40数年前に数年間と2014年に再渡来し、以降、1〜2つがい毎年繁殖している。2022年には日本野鳥の会筑後支部が設置した巣箱に入ったが、カメラマンなどが近寄りすぎて営巣を放棄した。県内唯一の繁殖地として静かに遠くから見守って欲しい。県内では沿岸地域などで渡り時期に確認される。九州各地でも繁殖数は少なくなっている。

危機要因 気候変動、産地局限、その他（餌となる飛翔性甲虫の減少、営巣する樹洞の減少、写真撮影などによる影響）

分布情報 北九州市若松区、北九州市小倉南区、北九州市八幡東区、北九州市八幡西区、福岡市東区、福岡市博多区、福岡市中央区、福岡市南区、福岡市西区、福岡市城南区、八女市、宗像市、福津市、赤村、苅田町

種の概要 全長30cm。頭部は黒褐色、体は濃い青緑色。嘴と足は赤い。飛ぶと翼の白斑が目立つ。ユーラシア大陸の東端および東南アジアの島々を中心に、インドから日本、オーストラリアにかけて分布。日本には、夏鳥として本州、四国、九州に渡来する。里山環境など低山帯の林に隣接した開けた環境に生息。四国、九州では人工構造物の穴でごく少数が繁殖している。日本で繁殖するつがい数は550つがいほどである（環境省、2014）。

特記事項 カテゴリー判定基準：①，D。巣箱設置による保全策が実施されているが、2023年時点で成功していない。



撮影：森池勝利

サンショウクイ

Pericrocotus divaricatus (Raffles, 1822)

絶滅危惧IA類(CR)

2011
絶滅危惧IA類

環境省
絶滅危惧II類

選定理由 県内では、1980年代までは繁殖が確認されていたが、1990年代以降、繁殖期の確認情報がない。全国的に繁殖場所での確認例は減っているが、生息環境である森林の状況が変化していない場所で生息状況が悪化していることから、餌となる昆虫類の減少や越冬地での森林伐採が影響しているともいわれている。県内においては生息適地となるアカマツ林や落葉広葉樹林の減少も一因と考えられる。

危機要因 遷移進行、植生変化、気候変動、その他（餌となる昆虫類の減少）

分布情報 北九州市門司区、北九州市若松区、北九州市小倉北区、北九州市小倉南区、福岡市東区、福岡市博多区、福岡市中央区、福岡市南区、福岡市西区、福岡市城南区、直方市、飯塚市、田川市、柳川市、八女市、小都市、筑紫野市、春日市、大野城市、宗像市、福津市、宮若市、糸島市、那珂川市、篠栗町、新宮町、芦屋町、水巻町、岡垣町、小竹町、鞍手町、糸田町、苅田町

種の概要 全長約20cm。体は細く尾は長め、雄の額から頭部は白く、後頭、後頸、過眼線は黒い。背、肩羽、腰、上尾筒は青灰色で、下面全体は白色で脇は灰色を帯びる。本種は、中国東北部、朝鮮半島、本州、四国、九州に夏鳥として飛来し、東南アジアで越冬する。平地や山地の大きな落葉樹のある樹林にすむ。樹冠で昆虫類を採食する。1980年代以降全国各地で急速に生息状況が悪化し、生息が確認できなくなった場所が多い（環境省、2014）。

特記事項 カテゴリー判定基準：①②，D。春秋には渡り途中のものが県内各地で比較的普通に観察される。近縁種リュウキュウサンショウクイ (*P. tegimae*) が近年西日本に生息を拡大、増加しており、県内でも普通にみられるようになっている。



撮影：谷口義和

コルリ

Larvivora cyane (Pallas, 1776)

絶滅危惧IA類(CR)

2011
絶滅危惧IB類

環境省
—

選定理由 県内では英彦山地と脊振山地で繁殖期に生息が確認されていたが、英彦山地では2000年以前に確認できなくなり、脊振山地でも2010年代後半に確認できなくなっている。英彦山地ではニホンジカによる下層植生の食害を受けて生息適地が消失している。脊振山地では現時点でシカ食害による生息環境破壊はみられず、温暖化に伴う様々な影響があるのではと考えられる。ニホンジカについては三郡山地や長崎県方面で増加しており、今後脊振山地の東西からの侵入が懸念されている。

危機要因 気候変動、植生変化、シカ増加、産地局限

分布情報 北九州市門司区、北九州市小倉北区、北九州市小倉南区、北九州市八幡東区、福岡市東区、福岡市博多区、福岡市中央区、福岡市南区、福岡市西区、福岡市城南区、福岡市早良区、行橋市、中間市、大野城市、宗像市、福津市、宮若市、糸島市、宇美町、須恵町、新宮町、芦屋町、水巻町、岡垣町、遠賀町、鞍手町、糸田町、苅田町

種の概要 全長14cm。上面が青、下面が白の美しい小鳥。シベリア東部、中国東北部、朝鮮半島、日本で繁殖し、東南アジアで越冬する。日本では九州以北に夏鳥として渡来する。山地の広葉樹林で繁殖し、渡りの時期には平地の林や公園でも観察される。地上に碗形の巣を作り、1巣卵数は3〜5個。林床で昆虫類やミミズなどを捕食する（福岡県、2011）。

特記事項 カテゴリー判定基準：①，A2，B1・3，D。春秋には渡り途中のものが県内各地で観察される。



撮影：南 順子

コマドリ

Larvivora akahige (Temminck, 1835)

絶滅危惧IA類(CR)

2011
絶滅危惧IA類環境省
一

選定理由 県内では英彦山地のみで繁殖期の生息が確認されていたが、シカ増加に伴う生息環境の消失により、2000年代中頃以降、生息確認ができなくなっている。英彦山地全域でニホンジカによる林床の食害が著しく、コマドリの生息適地はみられない。英彦山では一部で柵を設置し、植生の回復を図っているが、面積が狭くコマドリの生息回復には至っていない。

危機要因 シカ増加, 植生変化, 産地局限

分布情報 北九州市門司区, 北九州市若松区, 北九州市小倉北区, 北九州市小倉南区, 北九州市八幡東区, 北九州市八幡西区, 福岡市中央区, 福岡市南区, 福岡市西区, 福岡市城南区, 福岡市早良区, 飯塚市, 田川市, 筑紫野市, 宗像市, 太宰府市, 古賀市, 福津市, 糸島市, 久山町, 岡垣町, 糸田町

種の概要 日本, サハリン, 南千島で繁殖し, 中国南部で越冬する。九州以北の高山に夏鳥として渡来するほか, 西日本で越冬することもある。下層にササの茂った広葉樹林や針葉樹林に生息し, 地上に営巣する。林床で昆虫類, クモ, ミミズ, 植物の小果実などを食べる(福岡県, 2011)。

特記事項 カテゴリー判定基準:①②, D。春秋には渡り途中のものが県内各地で観察される。



撮影: 片岡智徳

ウズラ

Coturnix japonica Temminck & Schlegel, 1849

絶滅危惧IB類(EN)

2011
情報不足環境省
絶滅危惧II類

選定理由 1980年代頃までは農耕地などで定期的に越冬していたが, 1990年代以降急激に減少し, 2010年代以降はほとんどみられない状態になっている。休耕地の減少や圃場整備, 農道の舗装化などが減少要因とも考えられるが, 環境変化のあまりみられない河川敷や二次草原などでも確認されていないことから, 国内外に生息する個体群の縮小が主要因と考えられる。

危機要因 草地開発, 土地造成, 気候変動, 遷移進行, その他(圃場整備, 農地整備, 個体群の縮小)

分布情報 北九州市門司区, 福岡市西区

種の概要 全長20cmで, 尾は短い。全身褐色, 黄土色, 茶色のまだら模様で, オスでは頬から喉にかけて茶褐色。繁殖期にはモンゴル北部からロシア極東のアムール地方, ウスリー地方, 中国東北部, サハリン, 日本に分布する。日本では本州北部以北で繁殖し, 本州中部以南で越冬する。主に低地の草原, 農耕地, 放棄農耕地に生息する。生息環境の悪化により全国的に生息数は減少している(環境省, 2014)。

特記事項 カテゴリー判定基準: A2



撮影: 岡部海都

ヨタカ

Caprimulgus jotaka Temminck & Schlegel, 1844

絶滅危惧IB類(EN)

2011
絶滅危惧IB類環境省
準絶滅危惧

選定理由 1980年代以前には県内各地の丘陵地や海岸林でも普通に生息していたが, その後急速に分布域は縮小, 後退していき, 現在では英彦山地, 釈迦岳山地, 筑肥山地の標高800m以上の山地などに限られてきている。県内の繁殖鳥のなかでは最も減少率の高い種の一つである。本種の減少要因ははっきりしないが, 里山の管理放棄や森林の開発, 飛翔性の大型昆虫類の減少, 越冬地での環境悪化, イノシシ増加に伴う繁殖阻害などが考えられる。

危機要因 森林伐採, 草地開発, 気候変動, 管理放棄, 植生変化, その他(イノシシ増加, 越冬地での生息環境の悪化)

分布情報 北九州市小倉南区, 福岡市西区, 福岡市早良区, 八女市, 豊前市, 大野城市, うきは市, 糸島市, 筑前町, 添田町, みやこ町, 上毛町, 築上町

種の概要 全長29cm。全体に黒褐色の地に黄褐色の斑が散在する羽色をしている。枝にとまる際には木と平行にとまる。中国東部や朝鮮半島, ロシアのウスリー地方, 日本などに生息し, 冬季にはインドシナ半島やマレーシア半島などに渡る。日本では九州, 四国, 本州, 佐渡, 北海道の原野, 疎林, 森林などに夏鳥として渡来する。1970年頃までは平野部の農村の疎林でも普通に生息していたが, 1980年代になると日本各地で生息状況が悪化した(環境省, 2014)。

特記事項 カテゴリー判定基準:①②, A2, B1・3, D



撮影: 梶田和彦

ハウロクシギ

Numenius madagascariensis (Linnaeus, 1766)

絶滅危惧IB類(EN)

2011
絶滅危惧II類環境省
絶滅危惧II類

選定理由 曾根干潟、瑞梅寺川河口、和白干潟など広い干潟に飛来するが、近年減少が著しい。特に曾根干潟では2000年代前半頃には50羽を超える飛来がみられたものの、近年は10羽を超えることは少なくなり、2010年頃との比較でも60%以上の減少となっている。餌生物の減少などの生息環境悪化に伴う渡りルートの変化や気候変動などによる個体群縮小の影響を受けている可能性がある。世界的に絶滅危機の認識が高まっており、IUCNレッドリストでは減少率の大きさからENとされている。

危機要因 海岸開発、気候変動、その他（個体群の縮小）

分布情報 北九州市小倉南区、福岡市東区、福岡市西区、大牟田市、行橋市、豊前市、福津市、糸島市、芦屋町、岡垣町、遠賀町、苅田町、吉富町

種の概要 全長53~66cm。全身が淡いバフ色で、全身に細かい黒褐色の縦斑がある。嘴は顕著に長く、下に反る。ダイシャクシギに似るが、ダイシャクシギは下腹部や腰が白という点で区別できる。繁殖地は東シベリアからカムチャッカにかけてで、冬は主にオーストラリアで越冬する。日本では春秋の渡りの時期に通過して行く。泥質干潟などでゴカイ類やカニを食べる（環境省、2014）。

特記事項 カテゴリー判定基準：A2, B1・3, D



撮影：田代省二

ダイシャクシギ

Numenius arquata (Linnaeus, 1758)

絶滅危惧IB類(EN)

2011
絶滅危惧II類環境省
I

選定理由 本種の飛来する干潟は全国的にみても少なく、そのほとんどが数羽であるが、曾根干潟には80羽前後が飛来し、越冬している。2011年の改訂時は100羽前後が越冬していたため、10年で2割減少している。また、以前は干潟全体で活動が確認できたが、現在はほぼ中央部から南側でしか確認されない。県内では和白海岸でも数羽が越冬するが、近年は飛来数が1羽のことが多く、減少している。曾根干潟、和白干潟とも埋立ては回避されたが、希少な鳥類の飛来地として永続的な保全が求められる。

危機要因 海岸開発、産地局限、その他（個体群の縮小）

分布情報 北九州市小倉南区、福岡市東区、福岡市西区、柳川市、福津市、芦屋町、岡垣町、苅田町

種の概要 全長60cm。長大な嘴を持つ大型のシギ類。ユーラシア大陸の北部で繁殖し、中国南部、東南アジア、インド、アフリカで越冬する。日本では旅鳥または冬鳥として渡来する。広大な干潟に生息し、カニ類を好んで捕食する（福岡県、2011）。

特記事項 カテゴリー判定基準：B1・3, D



撮影：田代省二

オオソリハシシギ

Limosa lapponica (Linnaeus, 1758)

絶滅危惧IB類(EN)

2011
準絶滅危惧環境省
絶滅危惧II類

選定理由 広い干潟に飛来するが、近年減少が著しく、群れが安定的に飛来するのは曾根干潟だけとなっている。曾根干潟では2010年頃にはピーク期に500羽を超える飛来がみられたものの、近年は100羽前後となっており、80%近い減少となっている。博多湾では渡り期に小群がみられていたが、飛来の頻度は著しく減少している。生息環境悪化に伴う渡りルートの変化や気候変動などによる個体群縮小の影響を受けている可能性がある。

危機要因 海岸開発、気候変動、その他（個体群の縮小）

分布情報 北九州市若松区、北九州市小倉南区、福岡市東区、福岡市西区、福岡市早良区、大牟田市、柳川市、豊前市、古賀市、福津市、糸島市、芦屋町、苅田町

種の概要 全長約40cm。長い足と上に反った長い嘴の中型のシギ類。繁殖羽では腹部は赤褐色、背面は黒褐色に白や赤褐色の斑がある。国内では2亜種が記録されている。極北沿岸部で繁殖し、国内では主に渡り鳥で、沿岸部の干潟などの湿地に全国的に渡来する。渡りルートの違いから春期の個体数は秋期に比べて多く観察されている。貝類、環形動物、甲殻類、昆虫類、魚類、種子などを餌として利用する。非繁殖期には群れをつくり採食する（環境省、2014）。

特記事項 カテゴリー判定基準：A2, B1・3, D



撮影：田代省二

オバシギ

Calidris tenuirostris (Horsfield, 1821)

絶滅危惧IB類(EN)

2011

環境省

選定理由 極北で繁殖するシギ類の減少が指摘されており、その中でも本種は減少率が著しく高く、IUCNレッドリストではENとされている。県内では1970年代に有明海の大和干拓で渡り時期に2,000羽を超える飛来がみられていたが、1980年代以降急速に減少した。博多湾では和白干潟などで1990年代までは200羽前後の飛来がみられたが、近年は10羽前後の小さな群れがみられる程度まで減少している。気候変動などによる個体群縮小の影響を受けている可能性がある。



撮影：日本野鳥の会福岡支部

危機要因 海岸開発，気候変動，その他（個体群の縮小）

分布情報 北九州市小倉南区，福岡市東区，福岡市中央区，福岡市西区，柳川市，豊前市，古賀市，福津市，糸島市，芦屋町，遠賀町，苅田町，吉富町

種の概要 全長26～28cm。嘴，足ともに短めの中型のシギ。夏羽は胸に密な黒斑があり脇腹にはまばらな黒斑がある。頭から顔にかけて密な黒縞があり，背面は灰黒色で，肩羽に暗赤色の斑がある。冬羽は上面が灰色で白っぽくなる。北東シベリアが繁殖地。東南アジア，オーストラリアなどへ渡って越冬。国内では旅鳥として春秋に飛来。中継地や越冬地では主に砂や泥の海岸に生息する。干潟や河口などの泥湿地を好みゴカイ類や小さな貝類を採食する（中村・中村，1995b）。

特記事項 カテゴリー判定基準：A2，B1・3，D

コアジサシ

Sternula albifrons (Pallas, 1764)

絶滅危惧IB類(EN)

2011

環境省

絶滅危惧II類

絶滅危惧II類

選定理由 博多湾，響灘，周防灘，有明海の埋立地や造成裸地，自然海岸，筑後川の河原でコロニーを形成し，繁殖するが，飛来数は年々減少しており，繁殖成功率も著しく減少している。安定的に飛来する場所はなくなっており，飛来はするものの繁殖に至らないまま渡去することも多く，繁殖成功がまったくない年が増えている。営巣適地の減少，カラスやサギ類などによる卵や雛の捕食，人や車の侵入，大雨による営巣地の水没，海水温の上昇に伴う餌資源の変化など，影響要因は多岐にわたる。



撮影：片岡智徳

危機要因 河川開発，海岸開発，気候変動，捕食者侵入（カラス，アオサギ，ハヤブサ，トビ，イヌ，ネコ），自然災害，その他（写真撮影などによる影響）

分布情報 北九州市門司区，北九州市若松区，北九州市小倉南区，福岡市東区，福岡市南区，福岡市西区，福岡市早良区，大牟田市，久留米市，柳川市，大川市，豊前市，福津市，朝倉市，みやま市，苅田町

種の概要 全長約23cm。体と翼の上面は淡灰色で，額，下面，尾羽は白色。成鳥夏羽は頭頂から後頭部が黒色，嘴は黄色で先端に小さな黒色部がある。足は橙黄色。国内に生息する亜種はロシア南東部，中国，日本，東南アジア，フィリピン，ニューギニア，オーストラリアに分布する。国内では本州，四国，九州，琉球列島に夏鳥として飛来する。河川や内湾に生息し，主に小魚を採食する。砂浜海岸，埋立地の人工裸地，人工海浜，砂礫質の河川敷で繁殖する（環境省，2014）。

特記事項 福岡県指定希少野生動物種。カテゴリー判定基準：②，A4，B1・3，C2b

クツラヘラサギ

Platalea minor Temminck & Schlegel, 1849

絶滅危惧IB類(EN)

2011

環境省

絶滅危惧IB類

絶滅危惧IB類

選定理由 2023年の世界一斉センサスでは福岡県で126羽が確認されている（HKBSWS, 2023）。総個体数，国内飛来数とも増加傾向が続いており，県内の飛来数や飛来地も増加している。特異的な採餌法のため，釣り糸や釣り針が絡む被害や採餌中ゴミに当たった嘴折れ事故，電線に接触しての翼の骨折などが毎年のように発生している。また，密集して行動する習性のため，鳥インフルエンザなどのウイルス感染が発生した際には被害が拡大する危惧がある。



撮影：田代省二

危機要因 海岸開発，湿地開発，ため池改修，病虫害，その他（釣り糸・釣り針による被害，投棄ごみによる嘴折れ，電線接触）

分布情報 北九州市門司区，北九州市若松区，北九州市小倉南区，福岡市東区，福岡市南区，福岡市西区，柳川市，大川市，行橋市，豊前市，小郡市，宗像市，福津市，朝倉市，糸島市，須恵町，粕屋町，筑前町，大刀洗町，苅田町，みやこ町，上毛町，築上町

種の概要 全長は70～80cm。全身白色で，成鳥では嘴と目先，足は黒色。嘴はへら状。朝鮮半島西岸，中国遼寧省沿岸などで繁殖し，朝鮮半島南西部，中国大陸沿岸部，台湾，香港，日本などで越冬する。日本では九州と沖縄が主な渡来地である。水辺に生息し，干潟，河口，池，潮遊池，用水路など浅水域で魚類や甲殻類を採食する（環境省，2014）。2023年の世界一斉センサスでは東アジア全体で6,633羽，日本では640羽が確認されている（HKBSWS, 2023）。

特記事項 国内希少野生動物種。カテゴリー判定基準：D

クマタカ

Nisaetus nipalensis Hodgson, 1836

絶滅危惧IB類(EN)

2011
絶滅危惧IB類環境省
絶滅危惧IB類

選定理由 県内では英彦山地、古処山地、釈迦岳山地を中心に分布し、近年は三郡山地や筑肥山地にも生息地域を拡大している。生息数は増加傾向であるが、県内の生息数は250羽未満と多くない。近年の分布拡大は植林地の壮齢化と植林環境への適応が要因として考えられるが、県内には本来営巣木として選択されるモミ類やマツ類が少なく、植林の伐採が急激に進むと減少に転じることが懸念される。

危機要因 森林伐採、ダム建設、その他(写真撮影などによる影響)

分布情報 飯塚市、八女市、豊前市、筑紫野市、うきは市、宮若市、嘉麻市、朝倉市、糸島市、篠栗町、東峰村、添田町、川崎町、赤村、みやこ町、上毛町、築上町

種の概要 体長70~80cmほどの大型猛禽類である。尾羽が長く、翼の幅が広い。成鳥は背面が濃褐色、下面が白く、喉から胸に黒褐色の縦斑がみられる。インド、インドシナ半島、台湾、中国東南部、ロシア極東南部および日本に分布する。九州から北海道までの低山から亜高山地に至るまで、広く繁殖している。発達した森林内に生息している。餌は小型から中型の鳥や哺乳類を広く利用。巣は急斜面の大径木の枝や幹に架ける(環境省、2014)。

特記事項 国内希少野生動物種。カテゴリー判定基準：D



撮影：広塚忠夫

コノハズク

Otus sunia (Hodgson, 1836)

絶滅危惧IB類(EN)

2011
絶滅危惧IA類環境省
—

選定理由 県内では英彦山地の岳滅鬼山付近から経読岳の間の標高700m以上に生息している。生息密度は高いところで1kmに数つがいが生息している場所もあるが、生息数は100つがい未満と推定される。かつて生息していた場所で見られなくなっているところもあり、減少傾向にあると考えられる。県内の高標高帯に生息する種の多くが減少しており、温暖化による照葉樹林の拡大と落葉広葉樹林の衰退による影響を受けていると考えられる。

危機要因 森林伐採、気候変動、捕食者侵入(フクロウ)、植生変化

分布情報 北九州市小倉南区、福岡市西区、福岡市早良区、田川市、豊前市、添田町、みやこ町、築上町

種の概要 全長20cm。日本産フクロウ類中最小。羽角がある。灰褐色の地色に黒褐色の不規則の斑紋が全体にある。虹彩が黄色い。日本に飛来し繁殖する亜種は、インド、ヒマラヤ、東南アジア、台湾、中国、朝鮮半島に分布。国内では夏鳥として九州から北海道まで分布する。山地で大木のある深い森のなかに生息する。夜行性で昆虫を主に捕食する(樋口ら、1997)。

特記事項 カテゴリー判定基準：A2, B1・3, D



撮影：岡部海都

リュウキュウコノハズク

Otus elegans (Cassin, 1852)

絶滅危惧IB類(EN)

2011
絶滅危惧IA類環境省
—

選定理由 県内では現在、沖ノ島のみで生息が確認されている。かつて北九州市白島でもそれと思われる観察例があるが、現在の生息状況は不明。国内ではトカラ列島と沖ノ島間に生息地はなく、隔離的な分布として学術上貴重。沖ノ島の個体群については不明な点も多いが、夏鳥として飛来すると考えられる。島内全域でみられ、生息密度は高い。生息数は40~60つがい程度と考えられる。生息状況は安定しているものの、クマネズミ増加の影響が懸念される。

危機要因 外来種侵入(クマネズミ)、産地局限

分布情報 宗像市

種の概要 全長22cm。福岡県沖ノ島および南西諸島以南の常緑広葉樹林に生息している(沖縄県、2017)。海外では、台湾の蘭嶼と北フィリピンのバタン島で記録がある。頭部に一對の羽角を持ち、足指に羽毛がない。虹彩は黄色。地色は濃い赤錆色で、黒い大理石のような大きな斑が縦横に入る(樋口ら、1997)。コノハズクの声は「ブツ・キョッ・キョー」と聞こえるのに対し、「コホ」または「コッ・コホ」と聞こえる(沖縄県、2017)。昆虫類を主に捕食する(樋口ら、1997)。

特記事項 カテゴリー判定基準：D



撮影：岡部海都

オオコノハズク

Otus semitorques Temminck & Schlegel, 1844

絶滅危惧IB類(EN)

2011
情報不足

環境省
一

選定理由 夜行性で声が聞き取りづらいため、生息状況に不明な点は多いが、英彦山地、釈迦岳山地、古処山地に生息することが判明している。英彦山地ではICレコーダーを用いた調査により、生息状況の解明が進んでいる。県内の生息数は100つがい未満と考えられる。冬季には玄界灘の島嶼部で越冬することが判明しているが、本土側での越冬状況は不明。繁殖は高標高の良好な森林に限定されることから、植生遷移やフクロウの分布拡大に伴う生息環境の悪化が懸念される。



撮影：西 星哉

危機要因 森林伐採、捕食者侵入（フクロウ）、遷移進行

分布情報 北九州市小倉北区、福岡市西区、久留米市、八女市、宗像市、福津市、嘉麻市、那珂川市、新宮町、添田町、みやこ町

種の概要 全長23~25cm。がっしりした足とはっきりした耳羽を持ち、虹彩はオレンジ色。全身が大木の樹皮によく似た複雑な茶色の羽毛で覆われ、耳羽の内側から嘴の両側部にかけて、白っぽい羽毛で縁どられている。極東ロシア（ウスリー川流域）から中国、朝鮮半島、台湾、東南アジアにかけてみられる。日本では全国的に分布し、暖かい地方では留鳥だが、北方の個体群は南に移動する。森林の大木の樹洞で営巣。ネズミ、ヒミズなどの小型哺乳類を捕食する（樋口ら、1997）。

特記事項 カテゴリー判定基準：D

ヤイロチョウ

Pitta nympha Temminck & Schlegel, 1850

絶滅危惧IB類(EN)

2011
絶滅危惧IB類

環境省
絶滅危惧IB類

選定理由 県内各地の標高500m以上の山地に飛来するが、生息密度は低く、安定的な飛来地は極めて少ない。県内の生息数は50つがい前後と推定される。県内では最も生息適地と考えられる英彦山地での確認頻度は多くなく、脊振山地で比較的多い傾向がある。つがい確定後はあまり鳴かなくなるため、生息地の把握が困難な種である。生息地情報が拡散すると、撮影のため人が多く訪れ、繁殖を阻害するおそれがある。ニホンジカやイノシシの増加による生息環境改変の影響が懸念される。



撮影：岡部海部

危機要因 森林伐採、シカ増加、その他（写真撮影などによる影響）

分布情報 北九州市小倉南区、北九州市八幡東区、福岡市南区、福岡市西区、福岡市城南区、福岡市早良区、八女市、豊前市、筑紫野市、宗像市、太宰府市、嘉麻市、朝倉市、糸島市、那珂川市、宇美町、鞍手町、筑前町、添田町、みやこ町

種の概要 全長18~20cm。頭頂は褐色、黒い過眼線がある。喉から胸と脇腹は黄白色で、腹の中央から下尾筒にかけては赤色、背面と肩の羽は緑色で、腰と上尾筒はコバルト色。日本、朝鮮半島および台湾にかけて繁殖し、中国南部からインドネシア、ボルネオ島にかけての地域で越冬する。日本に夏鳥として飛来する。生息地域が九州、四国、本州のごく一部に限られている。常緑広葉樹林の残る低山帯を主な生息地としている。林床でミミズや昆虫類を採食する（環境省、2014）。

特記事項 国内希少野生動物植物種。カテゴリー判定基準：D

チゴモズ

Lanius tigrinus Drapiez, 1828

絶滅危惧IB類(EN)

2011
一

環境省
絶滅危惧IA類

選定理由 県内で確認されるものは主に移動個体群とみなされるものの、ここ数十年で国内全体の繁殖個体数が激減しており、移動中の少数の個体の死亡であっても個体群の存続に影響しかねない状況である。なお、県内では近年繁殖期の観察例が増えており、2023年には筑豊地方で繁殖が確認された。今後新たな繁殖分布地となる可能性があるが、既知の国内繁殖個体群との関係性は不明であり、動向を見守る必要がある。



撮影：野崎幸子

危機要因 その他（個体群の縮小）

分布情報 北九州市八幡東区、福岡市東区、福岡市中央区、福岡市西区、福岡市城南区、福津市、宮若市、粕屋町

種の概要 全長約18.5cm。雄は額、過眼線は黒く、頭は青灰色、背、肩羽、腰は赤褐色で、細い横斑がある。下面全体は白色、嘴は黒。日本には夏鳥として渡来し、中国南部、東南アジアで越冬する。本州中部から東北地方にかけて局地的に分布する。低地から低山の明るい広葉樹林や針広混交林に生息し、雑木林やゴルフ場の松林でも繁殖する。モズよりも樹林地を好み、昆虫を捕食する。国内の主要繁殖地の推定つがい数は160とされ（田悟ら、2023）、絶滅が危ぶまれる。

特記事項 カテゴリー判定基準：A2

アカモズ (亜種アカモズ)

Lanius cristatus superciliosus Latham, 1801

絶滅危惧IB類(EN)

2011
—

環境省
絶滅危惧IB類

選定理由 県内では春秋の渡り時期に記録があり、移動個体群とみなされる。しかし、ここ数十年で国内全体の繁殖個体数が激減しており、移動中の少数の個体の死亡であっても個体群の存続に影響しかねない状況である。ジオロケータを用いた追跡結果によると、九州北部は渡り経路の直下にあり、中継地としても利用されている可能性が高いため (Aoki et al., 2021)、中継地となりうる環境の変化も懸念事項である。



撮影: Marijka Jansen

危機要因 その他 (個体群の縮小)

分布情報 福岡市西区, 宗像市, 福津市

種の概要 全長17~20cm。頭から背、尾羽まで上面は赤褐色であり、喉から腹まで白い。嘴と足は黒色。黒色で少し太い過眼線がある。本州中部からサハリンにかけての地域でのみ局地的に繁殖する亜種で、中国、海南島、インドシナ半島、マレー半島、スンダ列島で越冬する。自然の草地や農耕牧草地、果樹園を好み灌木に営巣する。様々な昆虫類、カエルなどを食べる。国内の推定つがい数は149とされ (Kitazawa et al., 2022)、国内での絶滅が危ぶまれる。

特記事項 カテゴリー判定基準: A2。亜種アカモズを対象とする。

ウチャマセンニュウ

Locustella pleskei Taczanowski, 1890

絶滅危惧IB類(EN)

2011
絶滅危惧IA類

環境省
絶滅危惧IB類

選定理由 県内では沖ノ島および博多湾湾口部の小島嶼で繁殖するほか、響灘の埋立地での生息情報もある。周防灘の津村島では埋立てにより繁殖地が消失したとされている。博多湾湾口部の生息地では1990年代頃の状況と比較すると減少している可能性が高い。県内の生息数は100~200つがい程度と推定される。生息地の島嶼ではクマネズミやドブネズミが確認されている場所が多く、ネズミ類が増加することにより危機的な状況となることが懸念される。



撮影: 片岡智徳

危機要因 外来種侵入 (クマネズミ, ドブネズミ)

分布情報 北九州市若松区, 北九州市小倉南区, 福岡市東区, 福岡市西区, 宗像市

種の概要 全長16.5cm。体の上面はオリーブ茶褐色、下面は汚白色。尾羽は円尾で不明瞭な横斑があり先端に白斑あり。伊豆諸島、熊野灘、瀬戸内海、九州周辺の小島に繁殖個体群があり、朝鮮半島沿岸の小島でも繁殖し、中国南部からインドシナ半島で越冬。九州では丈の低い海岸性照葉樹林に高密度で生息している。年1回繁殖。昆虫食。5月上旬に繁殖地に飛来し、9月上旬には渡去する (環境省, 2014)。

特記事項 カテゴリー判定基準: A4, B1・2

シノリガモ

Histrionicus histrionicus (Linnaeus, 1758)

絶滅危惧II類(VU)

2011
絶滅危惧II類

環境省
—

選定理由 福岡市東区の志賀島東海岸とシオヤ瀬、シオヤ鼻北東の定置網周辺に20羽前後が飛来し越冬する。福津市渡半島でも年により数羽が越冬するほか、相島、地島でも記録がある。志賀島周辺の越冬地は国内越冬分布の南限と考えられ、飛来状況は1970年以降安定している。安定的な飛来地は1地域のみで、飛来数も20羽程度と少ない。現在飛来状況は安定しているが、分布南限であり、気候変動により越冬環境が変化すれば飛来が途絶える可能性がある。



撮影: 片岡智徳

危機要因 気候変動, 産地局限

分布情報 福岡市東区, 福岡市西区, 宗像市, 福津市, 新宮町

種の概要 全長38~51cm。小型のカモで、雄は全身濃紺で、脇と頭側部が赤く、顔の前方や頬、頸部、胸部、背部などに白色の模様が入る。雌は全身焦げ茶で目の後方と頬に白斑がある。日本では冬鳥として全国で記録があるが、主に本州北部に多く、北海道や本州北部の山地溪流部では少数が繁殖する。冬季は海岸の岩礁で生活し、水中に潜水して主に貝類、魚類、甲殻類を捕食する (環境省, 2014)。

特記事項 カテゴリー判定基準: D

クログモ

Melanitta americana (Swainson, 1832)

絶滅危惧Ⅱ類(VU)

2011
絶滅危惧Ⅱ類環境省
一

選定理由 福岡市東区の中道外海側に越冬群が飛来するが、飛来数は年による変動が大きい。20羽前後のことが多いが、100羽を超える年もある。飛来の多い年は玄界灘の他地域や周防灘でも記録されることがある。かつては博多湾内でみられることもあったが、近年はほとんどみられない。海の中道の越冬地は国内越冬分布の南限と考えられる。安定的な飛来地は1地域のみで、飛来数も2桁と少ない。気候変動により越冬環境が変化すれば、飛来が途絶える可能性がある。

危機要因 気候変動、産地局限

分布情報 福岡市東区、行橋市、福津市、岡垣町

種の概要 全長約50cm。雄は全身黒色、嘴の一部が鮮黄色。雌は全身ほぼ褐色で頬が白っぽい（樋口ら、1996）。ユーラシア大陸の北極圏、北アメリカ大陸のアラスカ沿岸、ラブラドル半島に繁殖分布し、冬は両大陸の中緯度地方の沿岸に渡って過ごす。日本には冬鳥として渡来するが、本州中部以北に多い。越冬地では海岸の沿岸や海岸から0.5～2kmぐらい離れた洋上にいる。沿岸の砂浜や磯で潜水して採餌する。主として二枚貝や巻貝類を食べ、ほかに等脚類や甲殻類などを食べる（中村・中村、1995b）。

特記事項 カテゴリー判定基準：D



撮影：岡部海都

ホオジロガモ

Bucephala clangula (Linnaeus, 1758)

絶滅危惧Ⅱ類(VU)

2011
絶滅危惧Ⅱ類環境省
一

選定理由 博多湾東部海域で40～70羽程度の比較的大きな越冬群がみられるほか、周防灘の曾根干潟前面海域、洞海湾、行橋市箕島周辺海域、瑞梅寺川河口などに10～40羽程度の小越冬群が飛来する。県内全体での越冬数は250羽未満と考えられる。博多湾東部は1990年代前半には200羽前後が越冬しており、全国的にみても規模の大きな越冬群であったが、その後縮小傾向となっており、2010年代以降は100羽を超えることは稀となっている。

危機要因 海岸開発

分布情報 北九州市若松区、北九州市小倉北区、北九州市小倉南区、北九州市八幡西区、福岡市東区、福岡市中央区、福岡市西区、福岡市早良区、行橋市、宗像市、古賀市、福津市、荻田町、築上町

種の概要 全長40～51cm。雄は頭部が緑光沢のある黒色。眼の下前方に大きな円形の白斑がある。首下の下面は白色。虹彩は黄色。雌は全体が濃褐色から褐色（樋口ら、1996）。ユーラシア大陸と北アメリカ大陸の高緯度地方に広く繁殖分布し、冬は両大陸の低緯度地方に渡って過ごす。日本では冬鳥としてみられ、本州北部と北海道に多い（中村・中村、1995b）。越冬中は主に入り江、内湾、干潟などの海岸部で過ごす（樋口ら、1996）。潜水して軟体動物、甲殻類、小魚などを捕食する（中村・中村、1995b）。

特記事項 カテゴリー判定基準：B1・2、D



撮影：田村耕作

ジュウイチ

Hierococcyx hyperythrus (Gould, 1856)

絶滅危惧Ⅱ類(VU)

2011
準絶滅危惧環境省
一

選定理由 県内全域の標高500m以上の山地に夏鳥として飛来する。県内で繁殖するカッコウ科4種の中では最も生息密度が低く、県内の生息つがい数は200つがい未満と考えられる。県内の山地に広く分布する托卵相手のオオルリよりも、ジュウイチの分布は狭い。もう1種の托卵相手のコルリは2020年現在、絶滅状態となっている。高標高の落葉広葉樹林を好む傾向にあり、遷移進行による照葉樹林化により生息適地が減少する懸念がある。

危機要因 森林伐採、気候変動、遷移進行

分布情報 北九州市小倉北区、北九州市小倉南区、福岡市早良区、飯塚市、八女市、豊前市、筑紫野市、宗像市、太宰府市、福津市、嘉麻市、糸島市、宇美町、新宮町、東峰村、添田町、福智町、みやこ町、築上町

種の概要 全長約32cm。体の上面は灰黒色、下面は淡い赤褐色。後頸部に白斑がある。インド北部から中国東北部、ウスリー地方、東南アジアなどに分布する（樋口ら、1997）。日本には夏鳥として渡来し、九州以北で繁殖する（中村・中村、1995a）。山地の落葉広葉樹林、針広混交林にすむ。昆虫を主食とし、樹上で鱗翅類の幼虫を好んで食べる（中村・中村、1995a）。「ジュウイチー、ジュウイチー」と大きな声で鳴く。自分では巣を作らずに、コルリやオオルリの巣に托卵する（樋口ら、1997）。

特記事項 カテゴリー判定基準：C2、D



撮影：広塚忠夫

カラスバト

Columba janthina Temminck, 1830

絶滅危惧Ⅱ類(VU)

2011
絶滅危惧Ⅱ類環境省
準絶滅危惧

選定理由

島嶼性で、響灘の白鳥男島、藍島、馬島、玄界灘の玄界島、沖ノ島、大島、地島、姫島で繁殖している。各生息地での確認状況には年による変動がみられ、餌となる果実の豊凶が原因となっている可能性がある。2020年代以降、沖ノ島を除く各生息地で繁殖期の鳴き声が少なく感じられているが、一時的なものかどうか不明。これら島嶼では、近年フクロウが増えており、因果関係は不明であるが、フクロウの存在を嫌っている可能性もある。

危機要因

森林伐採、気候変動、競合種拡大(フクロウ)

分布情報

北九州市若松区、北九州市小倉北区、福岡市東区、福岡市西区、宗像市、福津市、糸島市、新宮町

種の概要

全長40cm。全身黒色で紫や緑の金属光沢がある。本州・九州周辺の付属諸島、伊豆諸島、大隅諸島、奄美諸島、沖縄諸島に留鳥として分布する。国外では、韓国南部の海岸部とその付属諸島、鬱陵島、濟州島にも分布する。温暖な常緑広葉樹林に生息し、果実や堅果を採食する。2～9月にかけて樹上や樹洞に小枝を組み合わせた雑な皿型の巣を作り、1卵を産む。本州や九州の沿岸部でも観察されるが、確実な繁殖記録はない(環境省、2014)。

特記事項

国指定天然記念物、カテゴリー判定基準：B1・2、D



撮影：岡部海都

チドリ目ミヤコドリ科

ミヤコドリ

Haematopus ostralegus Linnaeus, 1758

絶滅危惧Ⅱ類(VU)

2011
絶滅危惧Ⅱ類環境省
一

選定理由

博多湾の和白干潟では1970年代以降、毎年飛来しており、国内では最も安定した越冬地となっている。越冬数は近年増加傾向であり、20～30羽が越冬している。玄界灘の沿岸の砂浜でも比較的記録が多いほか、周防灘沿岸でも記録されることがある。近年東京湾や伊勢湾などでの増加が著しいが、国内の越冬地は局地的であり、東アジアの個体群規模は5,000～10,000羽程度と大きくないことから、本県の越冬地としての価値は高い。

危機要因

海岸開発、産地局限

分布情報

北九州市小倉北区、北九州市小倉南区、福岡市東区、福岡市中央区、福岡市西区、福岡市早良区、行橋市、宗像市、福津市、苅田町

種の概要

全長43cm。体の上面が黒で下面が白、嘴は長く赤い。足はピンク色(樋口ら、1996)。旧北区に広く分布し、非連続的に繁殖地が分布する。カムチャッカ、北朝鮮西部、中国北東部などで繁殖する亜種ミヤコドリ(*H. o. osculans*)が日本へ渡来する(澤、2016)。日本では全国の海岸に稀な旅鳥または冬鳥として渡来するが、千葉県、神奈川県、福岡県などには毎年群れが現れ、越冬している(中村・中村、1995b)。広大な干潟、砂浜、岩礁海岸に飛来する。二枚貝を捕食するほか、カニなども食べる(樋口ら、1996)。

特記事項

カテゴリー判定基準：D



撮影：岡部海都

チドリ目チドリ科

タゲリ

Vanellus vanellus (Linnaeus, 1758)

絶滅危惧Ⅱ類(VU)

2011
準絶滅危惧環境省
一

選定理由

冬鳥として県内各地の広い面積の農耕地に飛来する。筑後地方では筑後川流域周辺や有明海沿岸の農地などで比較的多くみられるが、他地域では局地的。筑後地方以外での安定した飛来地は皆根新田、瑞梅寺川河口周辺、遠賀川河川敷および周辺農地、雷山川周辺、福津市勝浦など。県内全域の生息数は500羽未満と推定され、飛来数は減少傾向となっている。タゲリは世界的に減少しているといわれており、繁殖地と越冬地の双方における農業の近代化や効率化が影響を与えていると指摘されている。

危機要因

その他(農業の効率化)

分布情報

北九州市若松区、北九州市小倉南区、北九州市八幡西区、福岡市博多区、福岡市西区、大牟田市、久留米市、飯塚市、柳川市、大川市、行橋市、豊前市、中間市、小郡市、宗像市、福津市、朝倉市、みやま市、糸島市、遠賀町、小竹町、鞍手町、福智町、みやこ町、築上町

種の概要

全長約31cm。上面は緑色光沢のある黒、下面は白色。黒く長い冠羽があり、胸には黒帯がある(樋口ら、1996)。ユーラシア大陸の中緯度地域で広く繁殖分布し、冬は同大陸南部に渡って過ごす(中村・中村、1995b)。日本では冬鳥だが、北陸地方で繁殖記録がある(樋口ら、1996)。水田、湿地、干潟、河原や湖沼の水辺などでみられる。開けて見通しの良い平坦地を好む。地上の昆虫類やその幼虫など、無脊椎動物を食べる(中村・中村、1995b)。

特記事項

カテゴリー判定基準：A2、D



撮影：田代省二

チドリ目チドリ科

ムナグロ

Pluvialis fulva (Gmelin, 1789)

絶滅危惧Ⅱ類(VU)

2011

環境省

選定理由

主に旅鳥として県内各地の農耕地や埋立地に渡来する。水田や畑地、草刈り跡などを好み、シギ・チドリ類の飛来の多い場所では毎年春秋に小群がみられるほか、他のシギ・チドリ類に比べると比較的多くの場所に出現する。飛来数は減少しており、ほかの渡り性のシギ・チドリ類同様、減少率は高い。春は二毛作増加のため飛来期に生息適地となる水田が減少している。ハス田の減少や減反政策廃止に伴う休耕田の減少も要因の一つである。

危機要因

気候変動、その他（二毛作増加による稲作の遅れ、休耕田減少、個体群の縮小）

分布情報

北九州市若松区、北九州市小倉北区、北九州市小倉南区、北九州市八幡西区、福岡市東区、福岡市西区、大牟田市、久留米市、飯塚市、柳川市、中間市、小郡市、宗像市、福津市、宮若市、嘉麻市、朝倉市、糸島市、岡垣町、遠賀町、鞍手町、大刀洗町、吉富町、築上町

種の概要

全長24cm。上面は明るい褐色、嘴は黒。夏羽では、顔から胸、腹部が黒色になる。額から頸側、胸側、脇にかけて白い。ユーラシア・北アメリカ北部のツンドラで繁殖し、ヨーロッパ、アフリカからインド、東南アジア、オセアニアの海岸で越冬（樋口ら、1996）。日本では旅鳥であるが、一部は越冬する。水田、河原、砂浜、牧草地などでみられる。昆虫類、甲殻類、貝類、ミミズやゴカイ類などの動物食であるが、草の種子も食べる（中村・中村、1995b）。

特記事項

カテゴリー判定基準：A2, D



撮影：日本野鳥の会福岡支部

チドリ目チドリ科

ダイゼン

Pluvialis squatarola (Linnaeus, 1758)

絶滅危惧Ⅱ類(VU)

2011

環境省

選定理由

冬鳥として干潟のある海岸や河口に飛来するが、現在県内で安定して群れが飛来する越冬地は曾根干潟だけとなっている。博多湾の和白干潟でも少数越冬するが、飛来数は減少しており、不安定になっている。京築地域の海岸や筑後川河口でもみられるが、飛来状況は不安定。豊前海では海上の牡蠣筏上で群れが休息するが、採餌時には大分県側に飛び去ることが多い。県内全域での越冬数は100～200羽程度と少なく、各飛来地で減少している。

危機要因

海岸開発、気候変動

分布情報

北九州市若松区、北九州市小倉北区、北九州市小倉南区、福岡市東区、福岡市西区、大牟田市、柳川市、大川市、行橋市、豊前市、中間市、糸島市、苅田町、吉富町、築上町

種の概要

全長29cm。夏羽では顔から腹が黒い。上面は白っぽく、白黒のまだら模様。下腹から下尾筒は白い。飛翔時は腰が白く、下面は黒い脇羽が目立つ。冬羽は上面が灰褐色で、下面は白っぽく、胸には淡褐色斑がある（大西、2014）。ユーラシア北部・北アメリカ北部のツンドラで繁殖し、ヨーロッパ、アフリカからインド、東南アジア、オセアニアの海岸で越冬する（樋口ら、1996）。日本では旅鳥、冬鳥として干潟、河口などに渡来する（大西、2014）。甲殻類、貝類、ゴカイなどを食べる（中村・中村、1995b）。

特記事項

カテゴリー判定基準：A2, D



撮影：岡部海都

チドリ目チドリ科

シロチドリ

Charadrius alexandrinus Linnaeus, 1758

絶滅危惧Ⅱ類(VU)

2011

準絶滅危惧

環境省

絶滅危惧Ⅱ類

選定理由

県内各地の砂浜や埋立地などで繁殖し、干潟や海岸で群れとなり越冬する。かつては筑後川中流域でも営巣していたが、近年はみられない。冬季は曾根干潟、和白干潟、京築地域の干潟や海岸で数十～100羽超の群れがみられる。県内の繁殖数は500羽未満、越冬数は800羽未満と推定される。繁殖・越冬個体群とも縮小しており、自然海岸では砂浜の減少、埋立地では開発進行による裸地環境の消失など、営巣環境の消失がみられるほか、海岸でのレジャーなどにより、繁殖阻害を受ける場合もある。

危機要因

海岸開発、気候変動、捕食者侵入（カラス類）、その他（砂浜の減少、海岸での人のレジャー活動）

分布情報

北九州市門司区、北九州市若松区、北九州市小倉北区、北九州市小倉南区、福岡市東区、福岡市西区、大牟田市、柳川市、筑後市、大川市、行橋市、豊前市、宗像市、古賀市、福津市、糸島市、新宮町、芦屋町、岡垣町、苅田町、吉富町、築上町

種の概要

全長約17cm。嘴の短い小型のチドリ。オスの繁殖羽は黒い過眼線、後頭部に黒斑があり、後頭部は茶色。背面は灰褐色。腹色は白色。世界的に広く分布する。国内では北海道から南西諸島まで留鳥として観察される。主に砂浜や干潟などの海岸域や河川に生息する。砂質海岸や砂質の河口・河川敷・中州、造成中の埋立地などで繁殖する。巣は砂地の窪みに小石などを敷き産卵する。ゴカイや甲殻類、昆虫類を捕食する（環境省、2014）。

特記事項

カテゴリー判定基準：A2, D



撮影：田代省二

タマシギ

Rostratula benghalensis (Linnaeus, 1758)

絶滅危惧Ⅱ類(VU)

2011
準絶滅危惧環境省
絶滅危惧Ⅱ類

選定理由 県内には留鳥として各地の平野部の水田地帯に生息する。営巣環境は稲田、ハス田、休耕田などの水田環境で、ため池や遊水池などの湿地環境ではほとんどみられない。非繁殖期には水路や河川などに移動して越冬する。生息数は1,000体未満と推定される。まとまった面積の水田地帯には生息しているが、二毛作の進んでいる地域では田に水が入る時期が遅くなるため、繁殖しなくなった場所も多い。急速な農業の変化に適応できず、個体数を減らしていると考えられる。



撮影：片岡智徳

危機要因 水路改修、農業使用、乾田化、その他（二毛作増加による稲作の遅れ、休耕田減少、ハス田の減少）

分布情報 北九州市若松区、北九州市小倉南区、福岡市西区、福岡市早良区、久留米市、飯塚市、田川市、柳川市、行橋市、小郡市、筑紫野市、宗像市、古賀市、福津市、うきは市、宮若市、嘉麻市、みやま市、糸島市、篠栗町、志免町、岡垣町、遠賀町、小竹町、鞍手町、筑前町、大刀洗町、みやこ町、上毛町

種の概要 全長約25cm。先端が下に曲がっている長い嘴にずんぐりした体形のシギ。雌の方が色彩が鮮明。目の周囲の白色部はまが玉状に後頭に伸びる。中国、東南アジア、インド、アフリカなどに留鳥として生息する。国内では主に本州中部以南に留鳥として生息する。主に湿原、水田、河川、池沼などのある程度植生のある湿地を好む。一夫多妻制。湿地の植生のある部分に皿状の巣を作る。貝類、環形動物、甲殻類、昆虫類、種子などを食べる（環境省、2014）。

特記事項 カテゴリー判定基準：A2, D

チュウシャクシギ

Numenius phaeopus (Linnaeus, 1758)

絶滅危惧Ⅱ類(VU)

2011
—環境省
—

選定理由 多様な環境に飛来するシギ類で、干潟を好むほか、海岸や沿岸地域の草地、水田などに旅鳥として渡来する。飛来数は春に多く、秋に群れはみられない。現在も沿岸部では比較的普通にみられる種であるが、飛来数の減少は著しい。曾根干潟や瑞梅寺川河口、和臼干潟では1990年代前半頃までは1,000羽前後の飛来がみられたが、近年は100羽程度にまで減少している。生息環境悪化に伴う渡りルートの変化や気候変動などによる個体群縮小の影響を受けている可能性がある。



撮影：岡部海都

危機要因 海岸開発、気候変動、その他（個体群の縮小）

分布情報 北九州市若松区、北九州市戸畑区、北九州市小倉北区、北九州市小倉南区、北九州市八幡西区、福岡市東区、福岡市中央区、福岡市西区、福岡市早良区、大牟田市、久留米市、直方市、柳川市、大川市、行橋市、豊前市、宗像市、古賀市、福津市、みやま市、糸島市、新宮町、芦屋町、岡垣町、遠賀町、苅田町、吉富町、築上町

種の概要 全長42cm。長く下に湾曲した嘴、長い足を持った大型のシギ類（樋口ら、1996）。眉斑と頭中央線が白っぽく、頭側線と過眼線は褐色。顔から胸は淡色で褐色の縦斑がある。上面は褐色（大西、2014）。ユーラシア、北アメリカの高緯度地方のツンドラに点々と繁殖地があり、越冬地はアフリカからインド、ニューギニア、オーストラリア、南アメリカ（樋口ら、1996）。日本には旅鳥として現れる。海岸の干潟、砂浜、河川の砂泥地、水田などでみられる（大西、2014）。嘴を泥の中へ差し込み、甲殻類、昆虫類などを食べる（樋口ら、1996）。

特記事項 カテゴリー判定基準：A2

オグロシギ

Limosa limosa (Linnaeus, 1758)

絶滅危惧Ⅱ類(VU)

2011
準絶滅危惧環境省
—

選定理由 旅鳥として飛来するが少ない。淡水湿地や河口干潟などに飛来し、北九州市曾根新田、瑞梅寺川河口周辺、泉川・雷山川周辺では毎年のようにみられるが、他地域では稀。もともと飛来数は多くなかったが、確認頻度は年々減少しており、偶産種となりつつある。二毛作増加のため、飛来期に生息適地となる水田が減少しているほか、ハス田の減少や減反政策廃止に伴う休耕田の減少も要因の一つである。



撮影：片岡智徳

危機要因 気候変動、その他（二毛作増加による稲作の遅れ、ハス田の減少、休耕田減少、個体群の縮小）

分布情報 北九州市若松区、北九州市小倉北区、北九州市小倉南区、福岡市西区、柳川市、宗像市、福津市、糸島市、鞍手町、築上町

種の概要 全長40～44cm。嘴と足、首の長い大型のシギ類。夏羽は橙赤色で美しいが、冬羽は背面が灰褐色、腹面が白色が目立たない色彩となる。飛ぶ時には腰と翼の白条が目立ち、黒い尾羽も目立つ。嘴はまっすぐ（樋口ら、1996）。ユーラシア大陸の中緯度地域に繁殖分布し、地中海、アフリカ、インド、東南アジア、ニューギニアにかけて越冬する。日本では旅鳥として各地に現れる。河口部、干潟、池沼、水田、ため池など、水につかる泥地に現れる。昆虫類、甲殻類、ミミズ、ゴカイを食べる（中村・中村、1995b）。

特記事項 カテゴリー判定基準：A2, D

ウズラシギ

Calidris acuminata (Horsfield, 1821)

絶滅危惧Ⅱ類(VU)

2011
絶滅危惧Ⅱ類環境省
一

選定理由 県内各地の水田地帯に旅鳥として飛来する。淡水湿地性の渡りのシギ類の中では、タカブシギに次いで飛来数が多かったが、減少が著しい。1980年頃には渡り期間を通じてコンスタントに群れがみられていたが、現在の飛来状況は断続的となっている。春は二毛作増加のため、飛来期に生息適地となる水田が減少している。ハス田の減少や減反政策廃止に伴う休耕田の減少も要因の一つである。

危機要因 気候変動、その他（二毛作増加による稲作の遅れ、ハス田の減少、休耕田減少、個体群の縮小）

分布情報 北九州市若松区、北九州市小倉南区、福岡市東区、福岡市西区、久留米市、柳川市、行橋市、中間市、福津市、糸島市、岡垣町、遠賀町、鞍手町、築上町

種の概要 全長17~21cm。夏羽の頭頂は明るい赤褐色で、白い眉斑がある。上面は茶褐色で顔から胸にかけて細かい茶色の縞模様がある。嘴は黒茶色、足は黄緑。シベリア北部の北極海沿岸で繁殖、越冬地はオーストラリア、ニュージーランドなど（樋口ら、1996）。日本には旅鳥として各地に現れる。内陸の湿地や水田、干潟の草地などでみられる（中村・中村、1995b）。小さな甲殻類、貝類、地上性の昆虫類などを食べる（樋口ら、1996）。

特記事項 カテゴリー判定基準：A2, D



撮影：片岡智徳

オジロトウネン

Calidris temminckii (Leisler, 1812)

絶滅危惧Ⅱ類(VU)

2011

環境省

選定理由 県内では渡り時期に通過するものと越冬のために飛来するものがみられる。渡り個体群は、ほかのシギ類同様、減少している。もともと飛来数は多くなかったが、確認頻度は年々減少しており、偶産種となりつつある。ハス田を好む傾向にあり、ハス田の減少の影響は大きいと考えられるほか、個体群縮小の影響が大きいと考えられる。一方、筑後川水系、矢部川水系を中心に、越冬個体群は増加傾向にあり、温暖化の影響により、越冬域として適した環境になりつつある。

危機要因 気候変動、その他（二毛作増加による稲作の遅れ、ハス田の減少、休耕田減少、個体群の縮小）

分布情報 北九州市若松区、北九州市小倉南区、福岡市南区、福岡市西区、久留米市、八女市、小郡市、筑紫野市、福津市、うきは市、朝倉市、みやま市、糸島市、筑前町、大刀洗町

種の概要 全長13~15cm。夏羽では上面は黄色みがかかった灰褐色で肩羽の縁は赤褐色みを帯びる。冬羽では上面は暗灰褐色の地味な姿になる。嘴は黒色、足は黄緑色（樋口ら、1996）。ユーラシア大陸の北極圏に繁殖分布し、アフリカ大陸中部からインド、東南アジアにかけて越冬する（中村・中村、1995b）。日本には旅鳥または冬鳥として少数が飛来。水田や干拓地、河川などで観察される（樋口ら、1996）。双翅類の幼虫・成虫などの昆虫類、小型の甲殻類、軟体動物、ミミズやゴカイ類などを食べる（中村・中村、1995b）。

特記事項 カテゴリー判定基準：A2, D



撮影：南 順子

トウネン

Calidris ruficollis (Pallas, 1776)

絶滅危惧Ⅱ類(VU)

2011

環境省

選定理由 主に旅鳥として県内各地の干潟や海岸、水田、埋立地などに渡来する。渡り性のシギ類では最も普通で飛来数も多い種の一つ。ハマシギやシロチドリに混じり数羽が越冬することもある。春秋共に群れで飛来し、秋の方が群れの規模が大きく、期間も長い。現在も普通にみられる種であるが、減少率は高く、50%を越えている。生息環境悪化に伴う渡りルートの変化や気候変動などによる個体群縮小の影響を受けている可能性がある。

危機要因 海岸開発、気候変動、その他（二毛作増加による稲作の遅れ、ハス田の減少、休耕田減少、個体群の縮小）

分布情報 北九州市門司区、北九州市若松区、北九州市小倉南区、福岡市東区、福岡市西区、大牟田市、久留米市、柳川市、行橋市、小郡市、宗像市、古賀市、福津市、みやま市、糸島市、粕屋町、芦屋町、岡垣町、遠賀町、鞍手町、刈田町、吉富町、築上町

種の概要 全長13~16cm。小型のシギで、嘴は短く、足も短い。夏羽では顔から胸にかけて赤褐色、背中も赤褐色でこまかい斑紋があり、胸から下腹部にかけて白色。冬羽では上面が灰褐色になる。嘴と足は黒色。繁殖地はシベリア北部で、越冬地は東南アジア、オセアニアの海岸部（樋口ら、1996）。日本には旅鳥として各地に現れ、最も普通にみられる（中村・中村、1995b）。九州や沖縄では越冬することもある。干潟や砂浜、埋立地の水たまり、内陸の湿地などに生息する。昆虫類の幼虫や甲虫、小さな種子などを主に食べる（樋口ら、1996）。

特記事項 カテゴリー判定基準：A2, D



撮影：片岡智徳

ミユビシギ

Calidris alba (Pallas, 1764)

絶滅危惧Ⅱ類(VU)

2011
準絶滅危惧環境省
一

選定理由 主に冬鳥として砂浜海岸や砂質の干潟に飛来する。博多湾では100羽を超える群れが越冬しているほか、玄界灘および響灘沿岸の砂浜では数十羽程度の小群が越冬している。周防灘や有明海では稀にみられるだけで、定期的な飛来地はみられない。県内の飛来数は200羽前後と推定される。ほかのシギ類と比較すると減少率は小さいが、徐々に減少している。飛来地の生息環境は維持されており、餌生物の減少や個体群そのものの縮小が影響していると考えられる。

危機要因 海岸開発, 気候変動, その他(個体群の縮小)

分布情報 北九州市若松区, 北九州市小倉南区, 福岡市東区, 福岡市西区, 行橋市, 宗像市, 古賀市, 福津市, 新宮町, 芦屋町, 岡垣町, 吉富町

種の概要 全長20~21cm。嘴と足が短い小型のシギ。夏羽は頭から胸にかけて茶褐色で縞がある。冬羽は背面は灰白色, 下面は白色となる。嘴と足は黒色。北極海に面する半島や島嶼が繁殖地。越冬地は北半球低緯度地域から南半球まで広く分布(樋口ら, 1996)。日本には旅鳥として全国に現れ, 本州以南では少数が越冬する(中村・中村, 1995b)。海岸の砂浜を好んで生息, 波打ち際で波に合わせて走り, 小さな甲殻類, 貝類, ゴカイ類などを食べる(樋口ら, 1996)。

特記事項 カテゴリー判定基準: A2, D



撮影: 片岡智徳

ハマシギ

Calidris alpina (Linnaeus, 1758)

絶滅危惧Ⅱ類(VU)

2011
準絶滅危惧環境省
準絶滅危惧

選定理由 冬鳥または旅鳥として県内各地の干潟や海岸に飛来する。越冬するシギ・チドリ類では最も個体数が多い種であるが, 減少が著しい。曾根干潟, 博多湾, 筑後川河口では大きな群れで越冬する。豊前海では1,000羽以上の群れが養殖筏で休息するが, 採餌は大部分側側に移動して行い, 干潟で群れがみられることは稀。博多湾や曾根干潟ではかつて1,000羽を超える群れが飛来していたが, いずれも減少しており, 特に博多湾で著しい。筑後川河口では現在も1,000羽を超える群れが越冬している。

危機要因 海岸開発, 気候変動, その他(個体群の縮小)

分布情報 北九州市門司区, 北九州市若松区, 北九州市戸畑区, 北九州市小倉北区, 北九州市小倉南区, 北九州市八幡西区, 福岡市東区, 福岡市中央区, 福岡市西区, 福岡市早良区, 大牟田市, 久留米市, 柳川市, 大川市, 行橋市, 豊前市, 宗像市, 福津市, 糸島市, 新宮町, 芦屋町, 岡垣町, 遠賀町, 鞍手町, 苅田町, 吉富町, 築上町

種の概要 全長約20cm。長く下にやや曲がった嘴を持つ小型のシギ類。繁殖羽では頭頂, 背部は赤褐色地の黒色の斑, 胸は白色地に黒褐色の縦斑があり, 腹部に大きな黒色斑がある。非繁殖羽は頭頂部から背面が灰褐色, 喉から腹部にかけて白色。ユーラシア, 北アメリカの極北沿岸で繁殖し, ヨーロッパ, アフリカ北部, 中東, 中国の沿岸, 北アメリカ東・西沿岸で越冬する。国内では, 渡り期に干潟を中心とした各地の湿地で観察され, 越冬期には優占する(環境省, 2014)。

特記事項 カテゴリー判定基準: A2



撮影: 岡部海都

ソリハシシギ

Xenus cinereus (Güldenstädt, 1775)

絶滅危惧Ⅱ類(VU)

2011
—環境省
—

選定理由 旅鳥として春秋の渡り時期に飛来する。主に干潟でみられ, 曾根干潟, 博多湾, 有明海で飛来数が多い。比較的普通にみられる種であったが, ほかの渡りのシギ類同様, 減少傾向が著しく, 減少率が大きい。飛来地の生息環境は維持されており, 餌生物の減少や渡りルートの変化, 個体群そのものの縮小が影響していると考えられる。

危機要因 海岸開発, 気候変動, その他(個体群の縮小)

分布情報 北九州市若松区, 北九州市戸畑区, 北九州市小倉南区, 福岡市東区, 福岡市西区, 久留米市, 柳川市, 大川市, 行橋市, 宗像市, 古賀市, 福津市, みやま市, 糸島市, 粕屋町, 遠賀町, 鞍手町, 苅田町, 吉富町, 築上町

種の概要 全長約23cm。長めの嘴が反り返っている小型のシギ類。足は黄色で背面が灰褐色, 腹面が白い(樋口ら, 1996)。ユーラシア大陸の高緯度地方に繁殖分布し, アフリカ大陸からインド, 東南アジア, オーストラリアにかけて越冬する。日本には旅鳥として各地に現れる。干潟, 砂浜, ため池などの砂泥地に現れる。双翅類の成虫・幼虫などの昆虫類, 小型の甲殻類などを食べる(中村・中村, 1995b)。

特記事項 カテゴリー判定基準: A2, D



撮影: 岡部海都

アカエリヒレアシシギ

Phalaropus lobatus (Linnaeus, 1758)

絶滅危惧Ⅱ類(VU)

2011

環境省

選定理由 玄界灘、響灘などの海域に旅鳥として飛来し、沿岸の水田などでみられることもある。1980年代頃まで、春には農耕地でみられるシギ類の中でも個体数が多い種の一つであったが、その後急減し、陸域ではほとんどみられなくなった。本来の生息域である海域でも著しく減少しており、航路などでみられる頻度は激減している。減少要因は不明であるが、日本に飛来する個体群が縮小している可能性がある。玄界灘や響灘では洋上風力発電施設の建設による影響が懸念される。



撮影：西 星哉

危機要因 気候変動、その他(洋上風力発電開発、個体群の減少)

分布情報 北九州市門司区、北九州市小倉南区、福岡市南区、福岡市西区、宗像市、古賀市、福津市、糸島市、岡垣町、遠賀町、苅田町

種の概要 全長19cm。繁殖羽では眼の後方から首の前にかけてのえりの部分が赤栗色、喉と腹が白いほかは上面全体が黒褐色。冬羽は顔から下面は白色、上面は灰色。北極圏周辺で繁殖し、主に温・熱帯の太平洋沿岸で越冬。日本では旅鳥として春秋に沿海や全国の沿岸、時に内陸部の湖沼などでみられる(樋口ら, 1996)。渡り期には沿岸の海上、特に洋上に現れる(中村・中村, 1995b)。小型の水生昆虫や甲殻類、大きな動物プランクトンなどを集めてつまみとる(樋口ら, 1996)。

特記事項 カテゴリー判定基準：A2

タカブシギ

Tringa glareola Linnaeus, 1758

絶滅危惧Ⅱ類(VU)

2011
絶滅危惧Ⅱ類環境省
絶滅危惧Ⅱ類

選定理由 県内各地の水田地帯に旅鳥として飛来する。越冬例もあるが、定期的な越冬地はみられない。淡水湿地性の渡りのシギ類の中では最も普通種で、現在でも県内各地でみられるが、減少率が特に高い種でもある。1980年頃には渡り期間を通じてコンスタントに群れがみられていたが、現在の飛来状況は断続的となっている。春は二毛作増加のため飛来期に生息適地となる水田が減少している。ハス田の減少や減反政策廃止に伴う休耕田の減少も要因の一つである。



撮影：片岡智徳

危機要因 気候変動、その他(二毛作増加による稲作の遅れ、休耕田減少、個体群の縮小)

分布情報 北九州市門司区、北九州市若松区、北九州市小倉南区、福岡市南区、福岡市西区、大牟田市、久留米市、豊前市、中間市、小郡市、筑紫野市、宗像市、古賀市、福津市、宮若市、朝倉市、みやま市、糸島市、宇美町、粕屋町、岡垣町、遠賀町、鞍手町、築上町

種の概要 全長約20cm。長い嘴と、長い足を持つ小型のシギ類。上面は黒褐色に白斑、黒斑があり、腹部は白色。脚はくすんだ黄色。ユーラシア大陸北部が高緯度地域で繁殖し、アフリカ南部、インド、東南アジア、オセアニアで越冬する。全国的に渡り鳥として確認され、関東以南の地域で越冬する。湿地、湖、池沼、河川、水田、ハス田など、主に陸水域を多く利用する。軟体動物、クモ類、昆虫類、魚類、カエル、種子などを食べる(環境省, 2014)。

特記事項 カテゴリー判定基準：A2, D

ツルシギ

Tringa erythropus (Pallas, 1764)

絶滅危惧Ⅱ類(VU)

2011

環境省
絶滅危惧Ⅱ類

選定理由 旅鳥として飛来するが少ない。主に淡水湿地に飛来し、響灘埋立地、曾根新田、瑞梅寺川河口周辺、泉川・雷山川周辺では毎年のように飛来するが、他地域では稀。もともと飛来数は多くなかったが、確認頻度は年々減少しており、偶産種となりつつある。二毛作増加のため飛来期に生息適地となる水田が減少しているほか、ハス田の減少や減反政策廃止に伴う休耕田の減少も要因の一つである。



撮影：岡部海都

危機要因 気候変動、その他(二毛作増加による稲作の遅れ、休耕田減少、個体群の縮小)

分布情報 北九州市若松区、北九州市小倉南区、福岡市西区、福津市、糸島市、遠賀町、鞍手町

種の概要 全長約30cm。嘴が細長く、足が長い中型のシギ。繁殖羽は全体的に黒色。非繁殖羽は腹部が白色、背面が灰褐色。脚は暗赤色。スカンジナビア半島北部からロシア極東部の高緯度地域で繁殖し、地中海沿岸、アフリカ中央部から東南アジアまでの主に沿岸地域で局地的に越冬する。国内では渡り鳥として確認される。干潟、湿原、河川や池沼などの水辺や水田、ハス田、休耕田に生息する。水生昆虫、甲殻類、軟体動物、魚類などを食べる(環境省, 2014)。

特記事項 カテゴリー判定基準：A2, D

ツバメチドリ

Glareola maldivarum Forster, 1795

絶滅危惧Ⅱ類(VU)

2011
絶滅危惧Ⅱ類環境省
絶滅危惧Ⅱ類

選定理由 1970年代以降、有明海沿岸や博多湾の埋立地で繁殖が確認され、1994～2004年にかけて筑後川中流の中州で小群の繁殖が継続的に行われていた。筑後川の営巣地では草木が茂り、営巣地として適さなくなった。近年も同所に飛来することはあるが、繁殖には至っていない。近年災害級の大雨が増え、本種のような氾濫原的環境で繁殖する種には出水後の環境は繁殖に適しているとも考えられるが、同時に繁殖中の営巣地消失のリスクも抱えている。

危機要因 遷移進行, 自然災害

分布情報 北九州市若松区, 北九州市小倉南区, 福岡市西区, 久留米市, 筑後市, 福津市, 朝倉市, 糸島市, 築上町

種の概要 全長23～24cm。全体がベージュ色で、腰および腹部は白色。嘴は黒色で基部が赤く、目から喉にかけて、喉を囲う黒線がある。翼が長く、尾羽は燕尾で、飛び方もツバメのような飛び方をする。日本では主に西日本で繁殖する。春秋の渡り時期には全国で記録がある。荒地状の草原、乾燥した畑、埋立地などの人工裸地、砂質や砂礫質の河川敷など、裸地的な環境を好む。シロチドリやコチドリが営巣するような植被率の低い環境で営巣する。空中を飛翔しながら昆虫を食べる(環境省, 2014)。

特記事項 カテゴリー判定基準: A2, D



撮影: 片岡智徳

ズグロカモメ

Saundersilarus saundersi (Swinhoe, 1871)

絶滅危惧Ⅱ類(VU)

2011
絶滅危惧Ⅱ類環境省
絶滅危惧Ⅱ類

選定理由 曾根干潟は国内有数の越冬地となっており、200～300羽が飛来する。瑞梅寺川河口、今川河口、筑後川河口や有明海の干潟でも飛来数は多くないものの安定して越冬している。1990年代から2000年にかけて急増し、2010年代以降の飛来状況は比較的安定している。国内の飛来状況は中国の繁殖地の状況に左右されているが、繁殖地では埋立過程で形成される一時的な湿地環境への集中化がみられ、繁殖地の状況が悪化すれば、一気に絶滅の危機に転じるおそれがある。

危機要因 海岸開発, 産地局限

分布情報 北九州市門司区, 北九州市小倉北区, 北九州市小倉南区, 福岡市東区, 福岡市中央区, 福岡市西区, 大牟田市, 柳川市, 行橋市, 豊前市, 福津市, みやま市, 糸島市, 岡垣町, 鞍手町, 苅田町, 吉富町, 築上町

種の概要 全長30cm。上面が淡青灰色、下面は白色。成鳥夏羽では頭部が黒色。目の周りが白い。足は濃赤色。冬羽では頭部が白く、目の後方に黒色斑がある。中国の渤海と黄海沿岸で繁殖し、朝鮮半島南西部、日本、中国南東部、台湾、香港、ベトナムで越冬する。日本では西日本の沿岸を中心に越冬する。干潟に生息し、干出した泥干潟や浅瀬で主に甲殻類やゴカイ類を採食する(環境省, 2014)。世界の総生息確認数は14,400羽(IUCN, 2024)と推定されている。

特記事項 カテゴリー判定基準: D



撮影: 田代省二

ウミスズメ

Synthliboramphus antiquus (Gmelin, 1789)

絶滅危惧Ⅱ類(VU)

2011
準絶滅危惧環境省
絶滅危惧ⅠA類

選定理由 戦前の記録では博多湾内において1,000羽余りの大群や沿岸各地からの観察記録があり、飛来数が多かったことが伺われる。1980年代前半頃までは博多湾内でも比較的良好に観察されていたが、現在は玄界灘の海域で小群のみみられる程度になっている。飛来数は年による変動が大きい。玄界灘は国内越冬地の南限と考えられるが、温暖化により越冬環境として適さなくなっている可能性がある。洋上風力発電施設の建設による影響が懸念される。

危機要因 気候変動, その他(洋上風力発電開発)

分布情報 北九州市門司区, 福岡市東区, 宗像市, 福津市, 糸島市, 岡垣町

種の概要 全長25cmの小型の海鳥。夏羽では頭部全体から喉まで広く黒色で、目の後ろから側頭部にかけて白色線が入る。背から肩羽と翼上面は暗灰色。ユーラシア東部の海岸と千島列島、アリューシャン列島、北アメリカ北西部で繁殖する。日本で繁殖確認されているのは北海道天売島のみ。冬期になると全国の沿岸にも分布し、群れでみられる。繁殖を終えると繁殖地である陸地を離れ、沿岸や外洋に生息する(環境省, 2014)。

特記事項 カテゴリー判定基準: A2, D



撮影: 洪田 朗

コウノトリ

Ciconia boyciana Swinhoe, 1873

絶滅危惧Ⅱ類(VU)

2011
—

環境省
絶滅危惧ⅠA類

選定理由 県内では稀に飛来する迷鳥であったが、増加した再導入個体群が飛来するようになり、小都市・筑前町および京築地域のため池群、直方市周辺、宗像市周辺などで冬季に定期的にみられるようになった。そのほかの地域での記録も増えている。2022年には大刀洗町で営巣を開始したものの、電柱での営巣であったため、途中で撤去され、繁殖成功には至らなかった。小都市では巣塔が設置され、地域での保護の機運が高まっている。



撮影：田代省二

危機要因 湖沼開発、湿地開発、ため池改修、農業使用

分布情報 北九州市若松区、北九州市小倉南区、福岡市東区、福岡市中央区、福岡市早良区、直方市、筑後市、行橋市、小都市、筑紫野市、宗像市、太宰府市、福津市、宮若市、嘉麻市、糸島市、筑前町、大刀洗町、みやこ町、上毛町

種の概要 全長約110cm。体部は白色、風切り羽は白の混じる黒色、足は朱色。長い嘴、頸と足を持つ。ロシアの極東南部と中国の東北部で繁殖し、中国の主に揚子江の中流域や韓国、台湾、日本などで越冬する。日本の在来個体群は1971年に野生絶滅したが、大陸から少数が飛来している。2005年から開始された再導入計画で日本の野外個体群は増加している。餌となる魚類、両生類、甲殻類などが生息し、営巣地となる立木のある湿地を主な生息環境とする（環境省、2014）。

特記事項 ワシントン条約付属書Ⅰ、国指定特別天然記念物、国内希少野生動物種、カテゴリー判定基準：D

ヘラサギ

Platalea leucorodia Linnaeus, 1758

絶滅危惧Ⅱ類(VU)

2011
絶滅危惧ⅠB類

環境省
情報不足

選定理由 クロツラヘラサギと共に本種の越冬も増加しており、主にクロツラヘラサギの飛来地と一緒に行動している。響灘埋立地、曾根干潟、今川河口、豊前市ため池群、瑞梅寺川河口、多々良川河口、泉川河口、福津市津屋崎周辺、小都市・筑前町周辺ため池群、有明海沿岸などに定期的に飛来している。危機の要因についてはクロツラヘラサギと同じで、釣り針・釣り糸による被害、投棄ゴミによる嘴折れ、電線接触による被害などが挙げられる。



撮影：田代省二

危機要因 海岸開発、湿地開発、ため池改修、病害虫、その他（釣り糸・釣り針による被害、投棄ごみによる嘴折れ、電線接触）

分布情報 北九州市若松区、北九州市小倉南区、福岡市東区、福岡市南区、福岡市西区、福岡市城南区、筑後市、行橋市、豊前市、中間市、小都市、筑紫野市、春日市、宗像市、福津市、朝倉市、糸島市、篠栗町、小竹町、鞍手町、筑前町、苅田町、みやこ町、吉富町、上毛町、築上町

種の概要 全長86cm。全身白色で、嘴はへら状で黒く、先端部は黄色。繁殖期は後頭部に橙黄色の冠羽を生じ、上胸に橙黄色の帯ができる。目先の裸出部は狭く、目と嘴は離れて見える。ヨーロッパ、アフリカ、インド、中国などに分布する。日本には10月頃に飛来し、5月頃まで生息する。クロツラヘラサギと混群を作る（環境省、2014）。

特記事項 カテゴリー判定基準：D

サンカノゴイ

Botaurus stellaris (Linnaeus, 1758)

絶滅危惧Ⅱ類(VU)

2011
準絶滅危惧

環境省
絶滅危惧ⅠB類

選定理由 県内では冬鳥としてヨシ原に飛来するが、飛来地は限られており、定期的な飛来がみられるのは響灘ビオトープ、瑞梅寺川河口周辺、小竹町南良津親水公園くらいとなっている。保護色でヨシ原の中に潜んでいることから、極めて発見が困難な種であり、生息状況が十分に把握されていない面もある。ヨシ原の存在が生息の必須条件であり、まとまったヨシ原の保全が求められる。極めて警戒心の強い鳥であり、釣り人の水辺への立ち入りや釣り糸・釣り針による影響も考えられる。



撮影：岡部海都

危機要因 湖沼開発、河川開発、湿地開発、ため池改修、水質汚濁、その他（釣り糸・釣り針による被害、釣り人の水辺接近）

分布情報 北九州市門司区、北九州市若松区、福岡市西区、中間市、筑紫野市、福津市、小竹町

種の概要 全長70～80cmのサギの仲間。上面は黄褐色で濃い褐色斑があり、下面は淡く大きな褐色の縦斑がある。生息地のヨシ原などの景観に類似した色彩で、生息域で確認することは簡単でない。旧北区の広範囲にわたる地域で繁殖する。アフリカ、南アジア、東南アジアに渡り、越冬する。北海道では夏鳥または留鳥。本州以南では留鳥または冬鳥。湖、池沼、その他の湿原など湿地に生息する。魚類を主に捕食する。個体数は少ない（環境省、2014）。

特記事項 カテゴリー判定基準：D

ミゾゴイ

Gorsachius goisagi (Temminck, 1836)

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

2011 絶滅危惧ⅠB類	環境省 絶滅危惧Ⅱ類
-----------------	---------------

選定理由 県内では山地から丘陵地にかけての樹林に夏鳥として飛来する。県内のほぼ全域に飛来するが生息密度は低く、脊振山地、三郡山地北部、福智山地など県北部に比較的多く、筑後川より南側の県南部には少ない傾向がみられる。森林の林床でひっそりと生息しているため確認が困難な種であるが、イメージよりも生息数は多いと考えられる。植林地でもみられるが、谷筋に広葉樹が残っている必要があり、豊かな森林の保全が必要。

危機要因 森林伐採、自然災害

分布情報 北九州市若松区、北九州市小倉北区、北九州市小倉南区、北九州市八幡西区、福岡市中央区、福岡市南区、福岡市西区、福岡市早良区、久留米市、直方市、田川市、八女市、筑紫野市、大野城市、宗像市、太宰府市、古賀市、福津市、宮若市、朝倉市、糸島市、那珂川市、宇美町、新宮町、岡垣町、東峰村、添田町、糸田町、川崎町、上毛町、築上町

種の概要 全長約50cm。体の上面は赤褐色で、腹側はクリーム色に黒色の縦斑が入る。他のサギに比べ嘴が短い。基本的に日本の本州、九州、四国および周辺島嶼の温暖域のみで繁殖する渡り鳥で、非繁殖期にはフィリピンを中心とした東南アジアで越冬する。標高1,000m以下の平地から低山の広葉樹林および針広混交林で繁殖している。巣は地上5~15mの枝に作り、3~5卵を産む。ミミズやサワガニ、陸産貝類、地上性昆虫などを主に食べる（環境省、2014）。

特記事項 カテゴリー判定基準：D



撮影：渡邊啓文

ゴイサギ

Nycticorax nycticorax (Linnaeus, 1758)

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

2011 —	環境省 —
-----------	----------

選定理由 普通種とされるサギ類であるが、近年全国的に急減していることが注目されている。県内の生息状況は地域差が大きく、福岡地方ではサギコロニー内で本種がほとんどみられなくなり、北九州地方でも著しく減少している。筑豊地方、筑後地方ではまだ生息数は多いものの、今後の減少が懸念される。原因は不明であるが、大型種のアオサギ、ダイサギは増加し、チュウサギ以下の小型種が減少していることから、コロニー内での競合関係や二毛作、乾田化による採餌環境の減少などが考えられる。

危機要因 湖沼開発、河川開発、湿地開発、ため池改修、水路改修、農薬使用、水質汚濁、乾田化、競合種拡大（アオサギ、ダイサギ）

分布情報 北九州市門司区、北九州市若松区、北九州市小倉北区、北九州市小倉南区、北九州市八幡東区、北九州市八幡西区、福岡市東区、福岡市博多区、福岡市中央区、福岡市南区、福岡市西区、福岡市城南区、大牟田市、久留米市、直方市、飯塚市、田川市、柳川市、八女市、筑後市、大川市、行橋市、中間市、小都市、筑紫野市、春日市、宗像市、福津市、うきは市、宮若市、朝倉市、糸島市、須恵町、粕屋町、水巻町、岡垣町、遠賀町、鞍手町、桂川町、筑前町、大刀洗町、大木町、香春町、川崎町、大任町、赤村、苅田町、みやこ町、築上町

種の概要 全長約57cm。成鳥は頭上から肩羽、背は青緑色を帯びた黒色、翼上面と尾は灰色。後頭には細長い白い飾り羽がある。下面は全体に白い。嘴は黒、足は黄色、虹彩は赤い。南北アメリカ、ユーラシア、アフリカ大陸の温帯から熱帯に分布（樋口ら、1996）。日本では夏鳥または留鳥で、本州から九州の各地で繁殖する。コサギ、アマサギなどと混生して集団繁殖することが多く、雑木林などの樹上に営巣する（中村・中村、1995b）。水辺で魚類、ザリガニ、カエル、昆虫、小型哺乳類を食べる。夜行性（樋口ら、1996）。

特記事項 カテゴリー判定基準：A2、D



撮影：田代省二

ササゴイ

Butorides striata (Linnaeus, 1758)

絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

2011 準絶滅危惧	環境省 —
---------------	----------

選定理由 県内には夏鳥として飛来するが、生息状況は地域差が大きい。矢部川水系には特に多く、筑後市諏訪神社では規模の大きなコロニーがみられる。福岡地方では御笠川・樋井川・室見川、北九州地方では割子川・紫川などに飛来する。筑豊地方、京築地域の河川ではあまりみられない。かつては川沿いや海岸の竹林・笹藪などでコロニーがみられたが、現在は川沿いの街路樹で繁殖するものが多い。2000年前後に急速な減少が感じられたが、現在は比較的安定している。

危機要因 河川開発、水路改修

分布情報 北九州市若松区、北九州市戸畑区、北九州市小倉北区、北九州市小倉南区、北九州市八幡東区、北九州市八幡西区、福岡市東区、福岡市博多区、福岡市中央区、福岡市南区、福岡市西区、福岡市城南区、福岡市早良区、大牟田市、久留米市、直方市、飯塚市、田川市、八女市、筑後市、行橋市、中間市、小都市、筑紫野市、春日市、大野城市、宗像市、太宰府市、古賀市、福津市、うきは市、嘉麻市、朝倉市、みやま市、糸島市、宇美町、篠栗町、志免町、水巻町、岡垣町、遠賀町、大刀洗町、広川町、川崎町、福智町、苅田町

種の概要 全長約52cm。頭上が黒色で、後頭部から黒い冠羽が伸びる。背と雨覆は濃い灰色。下面は明るい灰色で、足と眼は黄色い。世界中の熱帯から温帯に分布し、多くの亜種に分けられている（樋口ら、1996）。日本には夏鳥として渡来し、本州から九州の各地で繁殖する。水辺近くのカワヤナギ、雑木林、市街地の街路樹などの樹上に巣を作る。大きな木に小集団で営巣する場合もある（中村・中村、1995b）。水辺に生息し、魚、カエル、ザリガニなどを食べる。日中だけでなく夜間も活発に採餌する（樋口ら、1996）。

特記事項 カテゴリー判定基準：C2、D



撮影：岡部海都

ペリカン目サギ科

アマサギ

Bubulcus ibis (Linnaeus, 1758)

絶滅危惧Ⅱ類(VU)

2011
準絶滅危惧環境省
一

選定理由

サギコロニーで繁殖するシラサギ類の中では最も少なく、各地で減少している。福岡地方ではほとんどみられなくなっており、北九州地方でも著しく減少している。筑豊地方、筑後地方ではまだ繁殖しているものの、個体数は多くない。原因は不明であるが、ほかの中型サギ類同様、コロニー内での競合関係の可能性が考えられる。また、他種と比較して乾燥した環境を好むサギであるが、繁殖期には水田での採餌が主となるため、乾田化による影響もあると考えられる。



撮影：田代省二

危機要因

湿地開発、農業使用、乾田化、競合種拡大(アオサギ、ダイサギ)

分布情報

北九州市門司区、北九州市若松区、北九州市小倉北区、北九州市小倉南区、北九州市八幡東区、北九州市八幡西区、福岡市東区、福岡市西区、福岡市早良区、大牟田市、久留米市、直方市、飯塚市、田川市、柳川市、八女市、筑後市、大川市、行橋市、中間市、小郡市、筑紫野市、宗像市、古賀市、福津市、うきは市、嘉麻市、朝倉市、みやま市、糸島市、那珂川市、宇美町、志免町、久山町、粕屋町、水巻町、岡垣町、遠賀町、鞍手町、桂川町、筑前町、大木町、香春町、添田町、糸田町、川崎町、大任町、刈田町、みやこ町、上毛町、築上町

種の概要

全長約50~60cm。非繁殖羽は全身真っ白で嘴は黄色。繁殖羽は頭部から首にかけてと背中にオレンジ色の飾り羽。求愛期には虹彩と嘴が赤くなる。全大陸の温帯から熱帯に分布。日本では大部分が夏鳥。本州以南で繁殖(樋口ら、1996)。コサギ、チュウサギなどと混生して集団繁殖することが多く、雑木林、竹林などの樹上に営巣する。農耕地や草原、河原、湖沼地などに生息するが、ほかのサギ類と比べると乾いた草地を好む。イナゴ、バッタなどの昆虫類やカエルなどをよく食べる(中村・中村、1995b)。

特記事項

カテゴリー判定基準：A2, D

ペリカン目サギ科

コサギ

Egretta garzetta (Linnaeus, 1766)

絶滅危惧Ⅱ類(VU)

2011

環境省

選定理由

ゴイサギと並び減少が著しいサギ類で、福岡地方ではコロニーでほとんどみられなくなり、冬季の越冬数も著しく減少している。筑豊地方、筑後地方ではまだ生息数は多いものの、今後の減少が懸念される。原因は不明であるが、大型種のアオサギ、ダイサギは増加し、チュウサギ以下の小型種が減少していることから、コロニー内での競合関係や二毛作、乾田化による採餌環境の減少などが考えられる。



撮影：田代省二

危機要因

湖沼開発、河川開発、湿地開発、ため池改修、水路改修、農業使用、水質汚濁、乾田化、競合種拡大(アオサギ、ダイサギ)

分布情報

北九州市門司区、北九州市若松区、北九州市小倉北区、北九州市小倉南区、北九州市八幡東区、北九州市八幡西区、福岡市東区、福岡市博多区、福岡市中央区、福岡市南区、福岡市西区、福岡市城南区、福岡市早良区、大牟田市、久留米市、直方市、飯塚市、田川市、柳川市、八女市、筑後市、大川市、行橋市、豊前市、中間市、小郡市、筑紫野市、春日市、大野城市、宗像市、太宰府市、古賀市、福津市、うきは市、宮若市、嘉麻市、朝倉市、みやま市、糸島市、那珂川市、宇美町、篠栗町、志免町、須恵町、新宮町、久山町、粕屋町、芦屋町、水巻町、岡垣町、遠賀町、小竹町、鞍手町、桂川町、筑前町、大刀洗町、大木町、香春町、添田町、糸田町、川崎町、大任町、福智町、刈田町、みやこ町、吉富町、上毛町、築上町

種の概要

全長約61cm。羽色は全身純白。嘴と足は黒色。目先の裸出部と足指は黄色。繁殖期には後頭から長い冠羽が伸び、胸と背から飾り羽が伸びる。ユーラシアの温帯、熱帯域、アフリカ、オーストラリアに広く分布。本州以南で繁殖し、年間を通じて同じ地域にとどまるもの以外にフィリピン方面に渡って越冬するものがある(樋口ら、1996)。他のサギ類と混生して集団繁殖することが多く、雑木林、竹林などの樹上に営巣する(中村・中村、1995b)。水田、河川、湿地、干潟などの水辺で小魚、甲殻類、カエルなどを捕食する(樋口ら、1996)。

特記事項

カテゴリー判定基準：A2, D

タカ目タカ科

ツミ

Accipiter gularis (Temminck & Schlegel, 1845)

絶滅危惧Ⅱ類(VU)

2011
絶滅危惧Ⅱ類

環境省

選定理由

県内各地の山地に生息しているが、生息密度は低い。森林性のため、生息に気づかれないことも多い。アセスメント関連の猛禽類調査で確認されることが多い。山麓から高標高地にかけて広くみられ、自然度の高い森林に生息する傾向がある。林道開発や太陽光発電施設開発のための森林伐採による生息地消失のほか、同所的に生息する猛禽類との競合関係による影響も考えられる。渡りルート上での風力発電施設の建設による影響も懸念される。



撮影：伊関文隆

危機要因

森林伐採、競合種拡大(クマタカ、オオタカ)、その他(太陽光発電開発、風力発電開発)

分布情報

北九州市門司区、北九州市小倉北区、北九州市小倉南区、北九州市八幡東区、北九州市八幡西区、福岡市東区、福岡市中央区、福岡市南区、福岡市西区、福岡市城南区、大牟田市、八女市、豊前市、中間市、筑紫野市、大野城市、福津市、嘉麻市、朝倉市、糸島市、那珂川市、須恵町、新宮町、久山町、鞍手町、桂川町、筑前町、東峰村、添田町、赤村、みやこ町、築上町

種の概要

全長雄約27cm、雌約32cm。雄では上面濃い青灰色、下面は汚白色で、脇から脇腹にかけては淡い赤褐色。雌では上面が濃いスレート色で、下面は黒褐色の模様がある。雄の眼は暗赤褐色、雌は黄色(樋口ら、1997)。シベリア南部から中国東北部、ウスリーにかけて繁殖し、中国南部、フィリピン、ボルネオ島などに渡って越冬する。日本では全国各地で繁殖(中村・中村、1995a)。平地から亜高山帯の林に生息する。近年では市街地やその周辺での繁殖例が増えている(樋口ら、1997)。主に小鳥を捕食する(中村・中村、1995a)。

特記事項

カテゴリー判定基準：D

ハイロチュウヒ

Circus cyaneus (Linnaeus, 1766)

絶滅危惧Ⅱ類(VU)

2011
準絶滅危惧

環境省
一

選定理由 冬鳥として農耕地や河川敷に飛来するが少ない。響灘埋立地、曾根新田、瑞梅寺川河口周辺、遠賀川および筑後川の河川敷、有明海沿岸干拓地などでそれぞれ数羽が越冬しており、県内の越冬数は50羽を超えないと考えられる。山地の伐採地や山間地の放棄水田などでみられることもある。休耕地の減少とともに農地環境での生息適地は減少している。河川敷においては草刈りが徹底されている場所が多いため、本種の好む草地環境は少なくなっている。



撮影：片岡智徳

危機要因 湿地開発, 草地開発, 土地造成, その他(休耕地の減少)

分布情報 北九州市門司区, 北九州市若松区, 北九州市小倉南区, 福岡市東区, 福岡市西区, 飯塚市, 柳川市, 豊前市, 中間市, 小郡市, 福津市, 宮若市, 小竹町, 苅田町

種の概要 全長43~53cm。雄は腰の白い斑紋と、翼の先端が黒いほかは、灰白色でよく目立つ。雌は体は褐色で、暗褐色の縦斑がある。雄も雌も腰が白っぽい(樋口ら, 1997)。ユーラシア大陸の亜寒帯や北アメリカ大陸で繁殖し、冬は南下して越冬する。日本には冬鳥として渡来するが数は少ない。平地の広い草原、ヨシ原、農耕地や牧草地に生息する。山地の草地や造成地にも出現する(中村・中村, 1995a)。カエル、野ネズミ類や小鳥類などを捕食する(樋口ら, 1997)。

特記事項 カテゴリー判定基準：C2, D

サシバ

Butastur indicus (Gmelin, 1788)

絶滅危惧Ⅱ類(VU)

2011
準絶滅危惧

環境省
絶滅危惧Ⅱ類

選定理由 夏鳥として県内全域の山地や丘陵地に飛来する。市街地に近い場所から減少しており、福岡地方や北九州地方では減少が著しい。県内の生息数は1,000~2,000羽程度と推定されるが、顕著な減少が感じられる。九州での分布を拡大しているオオタカや低山地に生息域を拡大しているクマタカとの競合が考えられる。林道開発や太陽光発電施設開発のための森林伐採、渡りルート上での風力発電施設の建設による影響も懸念される。



撮影：岡部海都

危機要因 森林伐採, 競合種拡大(クマタカ, オオタカ), その他(太陽光発電開発, 風力発電開発)

分布情報 北九州市門司区, 北九州市若松区, 北九州市小倉北区, 北九州市小倉南区, 北九州市八幡東区, 福岡市東区, 福岡市南区, 福岡市西区, 福岡市早良区, 大牟田市, 久留米市, 直方市, 飯塚市, 八女市, 行橋市, 豊前市, 中間市, 筑紫野市, 大野城市, 宗像市, 太宰府市, 古賀市, 福津市, うきは市, 宮若市, 嘉麻市, 朝倉市, みやま市, 糸島市, 那珂川市, 宇美町, 篠栗町, 須恵町, 新宮町, 久山町, 芦屋町, 水巻町, 小竹町, 鞍手町, 桂川町, 筑前町, 東峰村, 香春町, 添田町, 川崎町, 大任町, 赤村, 福智町, 苅田町, みやこ町, 上毛町, 築上町

種の概要 全長約50cm。中型の猛禽類。頬は灰色で、薄い眉斑があり、喉は白く中央に黒い縦線がある。背、翼の上面は褐色で、下面は胸は濃褐色で腹は白く、褐色の横斑がある。日本、朝鮮半島、中国東部で繁殖し、南西諸島、中国南部、東南アジアで越冬する。日本では東北から九州にかけて繁殖する。平地から山地の森林と草場が混在する環境に生息する。水田や草地に隣接した樹林に営巣し、カエルやトカゲなどの両生・爬虫類、バッタなどの昆虫類を捕食する(環境省, 2014)。

特記事項 カテゴリー判定基準：A2

アオバズク

Ninox japonica (Temminck & Schlegel, 1845)

絶滅危惧Ⅱ類(VU)

2011
絶滅危惧Ⅱ類

環境省
一

選定理由 夏鳥として県内全域の社寺林や山地に飛来する。飛来状況にはやや地域差があり、筑豊地方や京築地域では環境が比較的良好にも関わらず生息密度が低い傾向にある。かつて生息していた神社などでみられなくなった場所が増えている。社寺林は鎮守の森として保全されている場所も多いが、老齢による倒木のため樹洞がなくなり、生息できなくなるケースが多い。餌となる大型昆虫類の減少やフクロウとの競合のほか、撮影対象として人気があるため、撮影者による影響も考えられる。



撮影：田代省二

危機要因 森林伐採, 植生変化, 競合種拡大(フクロウ), その他(餌となる昆虫類の減少, 写真撮影などによる影響)

分布情報 北九州市若松区, 北九州市小倉南区, 北九州市八幡西区, 福岡市中央区, 福岡市南区, 福岡市西区, 福岡市早良区, 久留米市, 直方市, 飯塚市, 田川市, 八女市, 筑後市, 行橋市, 豊前市, 小郡市, 筑紫野市, 春日市, 大野城市, 宗像市, 太宰府市, 古賀市, 福津市, うきは市, 宮若市, 嘉麻市, 朝倉市, みやま市, 糸島市, 那珂川市, 篠栗町, 須恵町, 岡垣町, 小竹町, 桂川町, 筑前町, 添田町, 川崎町, 赤村, みやこ町, 築上町

種の概要 全長29cm。頭部から背面が黒褐色、腹面は白色の幅広い縦縞または斑。光彩は黄色。沿海州から朝鮮半島、中国東部、東南アジア、インドなどで繁殖し、北部のものは冬季に南方に渡って越冬する(樋口ら, 1997)。日本ではほぼ全土で繁殖し、大部分の地域で夏鳥であるが、沖縄県では越冬する。低地や低山帯の大きい樹木のある樹林にすみ、巨木があれば公園や社寺林にもすみつく。夜行性で、主として昆虫食。大型の昆虫類を飛びながら捕えて食べる。巣は樹洞を使うことが多く、巣箱も使用する(中村・中村, 1995a)。

特記事項 カテゴリー判定基準：C2, D

コミミズク

Asio flammeus (Pontoppidan, 1763)

絶滅危惧Ⅱ類(VU)

2011
絶滅危惧Ⅱ類

環境省
一

選定理由 冬鳥として農耕地や河川敷に飛来するが少ない。響灘埋立地、曾根新田、瑞梅寺川河口周辺、福津市津屋崎、遠賀川および筑後川の河川敷、椎田干拓、有明海沿岸干拓地などでそれぞれ数羽が越冬しており、県内の越冬数は50羽を超えないと考えられる。休耕地の減少とともに農地環境での生息適地は減少している。河川敷においては草刈りが徹底されている場所が多いため、本種の好む草地環境は少なくなっている。撮影対象として人気があるため、撮影者による影響も考えられる。



撮影：片岡智徳

危機要因 湿地開発、草地開発、土地造成、その他（休耕地の減少、写真撮影などによる影響）

分布情報 北九州市若松区、北九州市小倉南区、福岡市西区、久留米市、柳川市、中間市、小郡市、宗像市、古賀市、福津市、うきは市、糸島市、築上町

種の概要 全長38cm。全体に褐色で斑があり、顔盤は淡灰褐色で眼の周囲は黒い。虹彩は黄色。耳羽が短く、胸の縦縞が太い（樋口ら, 1997）。北半球の寒帯、亜寒帯で繁殖し、冬は主に温帯に渡って越冬する。日本では冬鳥としてほぼ全国的に渡来する。埋立地、河原の荒地、水田など広々と開けた荒地地状の環境に多い。夜行性だが昼間も活動する。ハタネズミ、アカネズミなどのげっ歯類、ヒバリ、ツグミなどの小鳥や昆虫類を食べる（中村・中村, 1995a）。

特記事項 カテゴリー判定基準：C2, D

ヤマセミ

Megaceryle lugubris (Temminck, 1834)

絶滅危惧Ⅱ類(VU)

2011
準絶滅危惧

環境省
一

選定理由 県内各地の河川の上流部に生息する。矢部川水系では生息数が多いが、福岡地方や北九州地方の河川では少ない。自然災害による崩落面の出現は本種の営巣場所になり得るが、災害復旧工事のための上流域における護岸整備により河岸に接する樹林が消失したり、河道の直線化により採餌適地が少なくなるなど、生息環境が悪化している。工事が長期に渡るケースも多く、大きな影響を与えている。撮影対象として人気があるため、撮影者による影響も考えられる。



撮影：田代省二

危機要因 河川開発、その他（災害復旧工事の長期化による影響、写真撮影などによる影響）

分布情報 北九州市小倉北区、北九州市小倉南区、福岡市早良区、大牟田市、久留米市、飯塚市、八女市、筑紫野市、大野城市、うきは市、宮若市、朝倉市、糸島市、那珂川市、東峰村、大刀洗町、広川町、添田町、川崎町、赤村、みやこ町、上毛町、築上町

種の概要 全長約38cm。体全体が白黒まだら模様、頭頂の羽は長く冠羽状。嘴は長く足は短い。オスの翼下面は白色でメスは橙褐色。アジア東部山地帯に分布する（樋口ら, 1997）。北海道から九州の各地で留鳥。山地の渓流や湖沼に生息する。河川では上流部の渓谷にすみ、中流以下では稀。土質の崖に横穴を掘って営巣する。餌は主に川魚で、5～20cmくらいのイワナ、ヤマメ、ウグイ、フナなどを食べるが、カエル、サワガニ、昆虫類も捕食する（中村・中村, 1995a）。

特記事項 カテゴリー判定基準：C2, D

オオアカゲラ

Dendrocopos leucotos (Bechstein, 1802)

絶滅危惧Ⅱ類(VU)

2011
絶滅危惧Ⅱ類

環境省
一

選定理由 英彦山地・三郡山地・古処山地・釈迦岳山地・筑肥山地の高標高帯の主に落葉広葉樹林や針葉樹の壮齢林に生息している。かつては脊振山地にも生息していたが1990年代頃からみられなくなり、三郡山地・古処山地では分布範囲が縮小しつつある。温暖化に伴う落葉広葉樹林の衰退の影響を受けている可能性があり、常緑広葉樹林に適応可能なアカゲラが個体数を増やしているのに対し、本種は分布域、生息数とも減少傾向となっている。



撮影：広塚忠夫

危機要因 森林伐採、気候変動、植生変化、自然災害

分布情報 福岡市東区、福岡市中央区、八女市、豊前市、うきは市、宮若市、嘉麻市、朝倉市、須恵町、東峰村、添田町、川崎町、みやこ町、築上町

種の概要 全長28cm。背面が全体に黒く、全体に白い羽毛が混じって太い横縞状の模様になっている。腹面は白く黒い縦斑をとともう。腹は赤い。雄の頭部は赤く、雌では頭頂全体が黒い（樋口ら, 1997）。ユーラシアの中緯度の森林に広く分布。日本では北海道から本州、四国、九州、奄美大島に留鳥として生息する。低山帯、亜高山帯の樹林にすむ。原生林や自然木の多い森林地帯に多く、二次林や造林地にはあまり現れない。アリ類、甲虫の幼虫などを食べる（中村・中村, 1995a）。

特記事項 カテゴリー判定基準：C2, D

コチョウゲンボウ

Falco columbarius Linnaeus, 1758

絶滅危惧Ⅱ類(VU)

2011
準絶滅危惧

環境省
一

選定理由 冬鳥として農耕地に飛来するが少ない。筑後地方では筑後川沿いの農耕地に広く分布し、比較的個体数も多いが、そのほかの地方では非常に少なく、福岡地方、北九州地方、筑豊地方とも数羽が越冬するだけで、飛来しなくなった場所も多い。県内の越冬数は50羽を超えないと考えられる。本種が生息するには開けた広い農地と安全なねぐらが必要となるが、筑後地方以外では本種の好むねぐら環境が少ない可能性がある。



撮影：片岡智徳

危機要因 その他（ねぐら環境の減少、写真撮影などによる影響）

分布情報 北九州市小倉南区、福岡市西区、久留米市、柳川市、中間市、宗像市、朝倉市、那珂川市、遠賀町、鞍手町、大木町、築上町

種の概要 全長28~34cm。雄は頭上から体の上面が青灰色、頭の後ろにオレンジ色の部分がある。雌の上面は灰色みがかった褐色（樋口ら、1997）。ユーラシア大陸と北アメリカ大陸の高緯度地方で繁殖し、冬は低緯度地方に渡って過ごす。日本では冬鳥として各地でみられる。干拓地や川辺の荒れ地草原、灌木草原、裸土の多い農耕地などでみられる。低空を飛んで小鳥などを急襲する。主な餌は小鳥で、小哺乳類や昆虫類も食べる（中村・中村、1995a）。

特記事項 カテゴリー判定基準：C2, D

ハヤブサ

Falco peregrinus Tunstall, 1771

絶滅危惧Ⅱ類(VU)

2011
絶滅危惧Ⅱ類

環境省
絶滅危惧Ⅱ類

選定理由 玄界灘・響灘の島嶼にはそれぞれ1~数つがいが生息しているほか、県内各地の採石場跡や自然岸壁で繁殖している。工場や煙突、鉄塔などの人工物への営巣も増えている。県内の生息数は100つがい前後と推定され、生息状況は安定または増加していると考えられる。繁殖地近傍でのレジャー活動（釣り・クライミングなど）による繁殖阻害や風力発電施設の建設による影響が懸念される。



撮影：岡部海都

危機要因 その他（風力発電開発、レジャー活動（釣り・クライミングなど））

分布情報 北九州市門司区、北九州市若松区、北九州市戸畑区、北九州市小倉北区、北九州市小倉南区、北九州市八幡東区、北九州市八幡西区、福岡市東区、福岡市中央区、福岡市西区、福岡市城南区、福岡市早良区、大牟田市、久留米市、飯塚市、田川市、柳川市、八女市、行橋市、豊前市、中間市、小郡市、筑紫野市、春日市、大野城市、宗像市、古賀市、福津市、うきは市、宮若市、嘉麻市、朝倉市、みやま市、糸島市、那珂川市、宇美町、志免町、須恵町、新宮町、芦屋町、水巻町、岡垣町、遠賀町、小竹町、鞍手町、広川町、添田町、福智町、苅田町、吉富町、上毛町、築上町

種の概要 全長は雄が38~44cm、雌が46~51cm。成鳥は上面は青灰色、下面は白または生成り色で、黒い横斑がある。幼鳥は上面が褐色、下面は薄茶色で、太い褐色の縦斑が目立つ。目の下の頬には所謂「ハヤブサヒゲ」がある。種ハヤブサは南極大陸など一部を除き全世界に分布する。国内では北海道から九州まで留鳥として生息する。主に海岸や河川流域などの崖地や岩場に生息し、断崖や岩場の岩棚や穴に直に卵を産む。中・小型の鳥類を高速で飛行して捕食する（環境省、2014）。

特記事項 カテゴリー判定基準：D

センダイムシクイ

Phylloscopus coronatus (Temminck & Schlegel, 1847)

絶滅危惧Ⅱ類(VU)

2011
絶滅危惧Ⅱ類

環境省
一

選定理由 県内各地の山地に夏鳥として飛来するが、生息密度は低い。福智山地では比較的生息密度が高い。山腹の林道沿いの落葉広葉樹林によくみられる。経年的な動向はよくわかっていないが、1980年代には生息密度は既に低く、それ以降徐々に減少しているように感じられる。照葉樹林への遷移進行により生息適地の減少のおそれがある。本種の減少は本種を主な托卵相手とするツツドリにも影響を与えるが、本種とツツドリの生息密度の比較から、ツツドリによる托卵の影響も大きいといえる。



撮影：瀬井俊一

危機要因 森林伐採、気候変動、遷移進行、植生変化、その他（ツツドリによる托卵）

分布情報 北九州市若松区、北九州市小倉北区、北九州市小倉南区、北九州市八幡東区、北九州市八幡西区、福岡市東区、福岡市博多区、福岡市中央区、福岡市南区、福岡市西区、福岡市早良区、直方市、田川市、八女市、豊前市、中間市、小郡市、筑紫野市、春日市、大野城市、宗像市、太宰府市、古賀市、福津市、宮若市、嘉麻市、朝倉市、みやま市、糸島市、那珂川市、篠栗町、志免町、須恵町、新宮町、久山町、粕屋町、芦屋町、水巻町、岡垣町、遠賀町、大刀洗町、香春町、添田町、川崎町、赤村、福智町、苅田町、みやこ町、吉富町、上毛町、築上町

種の概要 全長約13cm。背面は灰緑色、腹面は白い。肩斑が白く、その上下が暗色で、頭の中央に淡い条線がある（樋口ら、1997）。ウスリーから朝鮮半島および日本にかけて繁殖し、マレー半島など東南アジアで越冬する。日本には夏鳥として渡来し、北海道から九州までの各地で繁殖する。主に低山帯の落葉広葉樹林に生息する。林床に低木や藪の多いところを好む。樹上で葉や枝についている昆虫類を捕える。鞘翅類、膜翅類や双翅類などの成虫や幼虫を主に食べる（中村・中村、1995a）。

特記事項 カテゴリー判定基準：C2, D。春秋には渡り途中のものが県内各地で比較的普通に観察される。

コサメヒタキ

Muscicapa dauurica Pallas, 1811

絶滅危惧Ⅱ類(VU)

2011
情報不足

環境省
一

選定理由

繁殖個体群は県内各地の山地に渡来するが、生息密度は著しく低い。渡り時期には県内全域の山地や公園などに飛来し、普通にみられる。繁殖環境は落葉樹のある場所を好み、標高帯は山麓部から高標高帯まで広く確認されている。1970年代以前には比較的普通に生息していた記録が残っているが、1980年代以降、繁殖期の確認事例は著しく減少した。県内では里山的な落葉樹の雑木林が著しく減少しており、サンショウクイと共に減少したと考えられる。



撮影：野崎幸子

危機要因

森林伐採、気候変動、管理放棄、遷移進行

分布情報

北九州市門司区、北九州市若松区、北九州市小倉北区、北九州市小倉南区、北九州市八幡東区、北九州市八幡西区、福岡市東区、福岡市博多区、福岡市中央区、福岡市南区、福岡市西区、福岡市城南区、福岡市早良区、大牟田市、久留米市、直方市、飯塚市、田川市、八女市、筑後市、大川市、行橋市、豊前市、中間市、小郡市、筑紫野市、春日市、宗像市、太宰府市、古賀市、福津市、うきは市、宮若市、朝倉市、みやま市、糸島市、那珂川市、宇美町、篠栗町、志免町、須恵町、新宮町、久山町、粕屋町、芦屋町、水巻町、岡垣町、東峰村、大木町、広川町、香春町、添田町、糸田町、赤村、苅田町、吉富町、築上町

種の概要

全長約13cm。背面は灰褐色。腹面は白い。胸の暗色は斑紋が不明瞭。眼が大きく、足は小さい(樋口ら, 1997)。ヒマラヤ、シベリア南部から中国東北部や朝鮮半島などで繁殖し、インドから中国南部、ポルネオ島などに渡って越冬する。日本には夏鳥として渡来し、北海道から九州まで繁殖する。平地から標高1,000mぐらいまでの落葉広葉樹林、雑木林に生息し、密生した林よりも明るい林を好む。チョウ、ガ、ウンカ、アブなどの昆虫類をフライングキャッチ法で捕える(中村・中村, 1995a)。

特記事項

カテゴリー判定基準：D

ツクシガモ

Tadorna tadorna (Linnaeus, 1758)

準絶滅危惧(NT)

2011
準絶滅危惧

環境省
絶滅危惧Ⅱ類

選定理由

博多湾、曾根干潟、今川河口および有明海に冬鳥として飛来する。広い干潟を好むほか、埋立地造成過程の浚渫土を投入した湿地にも飛来する。飛来数は大きな変動があり、曾根干潟および博多湾で1970～1990年代に増加した後、減少している。一方、有明海では2010年代以降増加を続けている。県内の飛来数は1,500～2,000羽程度。本種はその名の通り北部九州を代表するカモ類であり、全国的にみても群れが飛来する場所は多くなく、本県の生息地は特に重要である。カテゴリー判定基準：a)。



撮影：田代省二

分布情報

北九州市門司区、北九州市若松区、北九州市小倉南区、福岡市東区、福岡市南区、福岡市西区、福岡市早良区、大牟田市、久留米市、直方市、飯塚市、柳川市、筑後市、行橋市、豊前市、中間市、小郡市、宗像市、福津市、嘉麻市、朝倉市、みやま市、糸島市、粕屋町、水巻町、小竹町、大刀洗町、福智町、苅田町、築上町

トモエガモ

Sibirionetta formosa (Georgi, 1775)

準絶滅危惧(NT)

2011
絶滅危惧Ⅱ類

環境省
絶滅危惧Ⅱ類

選定理由

県内各地のため池やダム、河川などに冬鳥として飛来する。1980年代までは比較的珍しい種であったが、1990年代以降、数百羽の群れが飛来する場所が現れ、2010年代以降になると県内全域で群れがみられるようになり、珍しい鳥ではなくなった。高密度の群れを作る習性があり、他県では数万羽の大群がみられる場所もあるが、本種は感染症による大量死の事例もあることから、越冬地の分散化は絶滅リスクを回避する上でも望ましい。カテゴリー判定基準：b)。



撮影：岡部海都

分布情報

北九州市門司区、北九州市若松区、北九州市小倉南区、北九州市八幡西区、福岡市東区、福岡市中央区、福岡市南区、福岡市西区、福岡市城南区、福岡市早良区、大牟田市、久留米市、直方市、飯塚市、柳川市、八女市、大川市、行橋市、豊前市、中間市、小郡市、筑紫野市、春日市、宗像市、太宰府市、古賀市、福津市、うきは市、朝倉市、みやま市、糸島市、篠栗町、遠賀町、鞍手町、桂川町、筑前町、大刀洗町、広川町、川崎町、福智町、苅田町、上毛町、築上町

ミコアイサ

Mergellus albellus (Linnaeus, 1758)

準絶滅危惧(NT)

2011
絶滅危惧II類環境省
一

選定理由 冬鳥として飛来するが、生息地は限定的で、県内の飛来数は150~200羽程度。経年的に安定した飛来地はなく、10年前後で移り変わっていく傾向がある。近年は宗像市吉田・多礼ダム、北九州市養福寺貯水池周辺、豊前市ため池群などに20~50羽程度の群れが飛来している。飛来状況は安定しておりカテゴリー判定基準には該当しないものの、飛来数の少なさからNTとした。

分布情報 北九州市若松区、北九州市小倉南区、北九州市八幡西区、福岡市東区、福岡市南区、福岡市西区、久留米市、直方市、飯塚市、田川市、行橋市、豊前市、春日市、宗像市、糸島市、粕屋町、遠賀町、鞍手町、筑前町、福智町、苅田町、築上町



撮影：片岡智徳

ヤマドリ (亜種アカヤマドリ)

Syrnaticus soemmerringii soemmerringii (Temminck, 1830)

準絶滅危惧(NT)

2011
絶滅危惧II類環境省
準絶滅危惧

選定理由 県内各地の山地に留鳥として生息する。生息密度の地域差はあまりないよう感じられる。狩猟鳥ではあるが、ヤマドリ・キジを撃つ狩猟者が減っているためか、年間狩猟数は50羽程度で、狩猟による影響はあまりない。一方、狩猟者への聞き取りによると、猪・鹿猟を行う際に山で出会うヤマドリはかなり減っていると感じられるとのこと。ニホンジカ増加に伴う下層植生の変化や地面を掘り返すイノシシによる繁殖阻害などの影響を受けている可能性がある。カテゴリー判定基準：a), b)。

分布情報 北九州市小倉北区、北九州市小倉南区、北九州市八幡東区、福岡市西区、福岡市城南区、福岡市早良区、久留米市、直方市、八女市、豊前市、筑紫野市、宗像市、太宰府市、うきは市、宮若市、嘉麻市、朝倉市、みやま市、糸島市、那珂川市、宇美町、篠栗町、久山町、鞍手町、筑前町、東峰村、香春町、添田町、川崎町、大任町、赤村、福智町、苅田町、みやこ町、上毛町、築上町



撮影：片岡智徳

ツツドリ

Cuculus optatus Gould, 1845

準絶滅危惧(NT)

2011
準絶滅危惧環境省
一

選定理由 県内各地の山地に夏鳥として飛来する。センダイムシクイに托卵するため、センダイムシクイの生息が本種の生息条件となっている。各生息地での生息密度は高くない。今のところかつて生息していた場所で飛来がなくなった場所は把握されていないが、減少しているように感じられる。センダイムシクイの減少が本種の減少に繋がるため、センダイムシクイの生息環境である落葉広葉樹林の減少が、本種に大きな影響を与えると考えられる。カテゴリー判定基準：a), b)。

分布情報 北九州市門司区、北九州市小倉南区、福岡市西区、福岡市早良区、飯塚市、八女市、豊前市、筑紫野市、宗像市、太宰府市、福津市、うきは市、嘉麻市、朝倉市、糸島市、那珂川市、宇美町、須恵町、水巻町、筑前町、東峰村、香春町、添田町、福智町、みやこ町、上毛町、築上町



撮影：瀬井俊一

カッコウ

Cuculus canorus Linnaeus, 1758

準絶滅危惧(NT)

2011

環境省

選定理由

県内各地の山地に夏鳥として渡来する。本来は草原性の鳥だが、県内には草原環境がほとんどないため、落葉広葉樹林や伐採地のある環境に生息している。ホオジロやモズなど広く普通にみられる種に托卵するため、托卵相手の増減の影響は受けていないと考えられるが、生息密度は低い。みられなくなった地域は把握されていないものの、減少しているように感じられる。本県の気候状況が生息に適さないようになっているとすれば、温暖化の進行とともに減少していく可能性がある。カテゴリー判定基準：a), b)。



撮影：広塚忠夫

分布情報

北九州市小倉南区、福岡市西区、福岡市城南区、福岡市早良区、久留米市、飯塚市、八女市、豊前市、筑紫野市、太宰府市、福津市、宮若市、嘉麻市、朝倉市、糸島市、那珂川市、宇美町、篠栗町、須恵町、筑前町、東峰村、広川町、添田町、川崎町、赤村、みやこ町、上毛町

クイナ

Rallus indicus Blyth, 1849

準絶滅危惧(NT)

2011
準絶滅危惧

環境省

選定理由

県内各地のヨシ原のある水辺に冬鳥として飛来する。飛来数はあまり多くない。ヨシ原に隠れているため、生息の把握が困難な種であるが、確認頻度は減少傾向が感じられる。水害対策のための河川改修（河道掘削など）によるヨシ原の撤去などの影響を受けやすい。カテゴリー判定基準：a), b)。



撮影：片岡智徳

分布情報

北九州市小倉南区、福岡市東区、福岡市西区、久留米市、筑後市、豊前市、中間市、筑紫野市、宗像市、太宰府市、福津市、宮若市、糸島市、篠栗町、小竹町、香春町

ヒクイナ

Zapornia fusca (Linnaeus, 1766)

準絶滅危惧(NT)

2011
準絶滅危惧

環境省
準絶滅危惧

選定理由

県内各地の湿地に留鳥として生息している。河川、ため池、調整池、水田、休耕湿地など多様な湿地に生息しており、山間地の休耕地やかなり小さな湿地でもみられることがある。かつて思われていたよりも普通に生息していることがわかってきたが、規模の小さな湿地は造成工事などにより開発されることも多い。カテゴリー判定基準：b)。



撮影：岡部海都

分布情報

北九州市門司区、北九州市若松区、北九州市小倉南区、福岡市東区、福岡市西区、福岡市城南区、福岡市早良区、大牟田市、久留米市、田川市、柳川市、筑後市、行橋市、豊前市、中間市、春日市、宗像市、太宰府市、古賀市、福津市、うきは市、宮若市、嘉麻市、朝倉市、糸島市、篠栗町、志免町、新宮町、久山町、岡垣町、遠賀町、小竹町、鞍手町、桂川町、筑前町、大刀洗町、大木町、広川町、みやこ町、吉富町、上毛町、築上町

アカエリカイツブリ

Podiceps grisegena (Boddaert, 1783)

準絶滅危惧(NT)

2011 絶滅危惧II類	環境省 一
-----------------	----------

選定理由 玄界灘および周防灘に冬鳥として飛来する。渡来数は少なく、玄界灘では200羽前後、周防灘では50羽前後と考えられる。玄界灘での個体数動向は比較的安定していると考えられる。周防灘における生息は近年把握された。県内の生息地は国内分布の南限にあたりと考えられ、温暖化に伴う影響が懸念される。また、響灘や玄界灘では多くの洋上風力発電施設の計画が立ち上がっているが、生息海域で計画が実施されれば影響は大きいと考えられる。カテゴリー判定基準：b)。

分布情報 北九州市小倉南区、福岡市東区、福岡市西区、宗像市、古賀市、福津市、新宮町、吉富町、築上町



撮影：片岡智徳

ハジロカイツブリ

Podiceps nigricollis Brehm, 1831

準絶滅危惧(NT)

2011 —	環境省 —
-----------	----------

選定理由 県内には主に冬鳥として海域に渡来し、玄界灘、響灘、周防灘では群れがみられる。有明海では少ない。各生息地では1,000羽以上の大群がみられることもあったが、群れの規模は縮小傾向にあり、大きな群れはみられなくなってきている。現在のところ生息数が3,000羽以上と考えられ、各生息地で普通にみられるためNTに留めたが、減少率は大きい。温暖化に伴う餌生物の分布変化や洋上風力発電施設の建設による影響などが懸念される。カテゴリー判定基準：a), b)。

分布情報 北九州市門司区、北九州市若松区、北九州市戸畑区、北九州市小倉北区、北九州市小倉南区、北九州市八幡西区、福岡市東区、福岡市博多区、福岡市中央区、福岡市西区、福岡市早良区、大牟田市、久留米市、行橋市、豊前市、中間市、宗像市、古賀市、福津市、糸島市、那珂川市、新宮町、粕屋町、芦屋町、岡垣町、荻田町、吉富町、築上町



撮影：岡部海都

ケリ

Vanellus cinereus (Blyth, 1842)

準絶滅危惧(NT)

2011 準絶滅危惧	環境省 情報不足
---------------	-------------

選定理由 県内では局地的に繁殖分布しており、北九州市払川周辺、みやこ町犀川周辺、行橋市津留周辺、糟屋郡宇美川・須恵川流域、古賀市周辺、宮若市周辺、川崎町真崎周辺、筑後川下流周辺などに各数十つがいが生息している。県内の生息数は300～400羽程度と考えられる。1980年代頃から繁殖が確認され、生息数や営巣地は拡大傾向にある。本種はカテゴリー判定基準には該当しないものの、国内の分布が局地的であり、各個体群の重要性が認められること、現時点での生息数の少なさからNTとした。

分布情報 北九州市若松区、北九州市小倉南区、福岡市東区、福岡市西区、福岡市早良区、久留米市、行橋市、中間市、小郡市、宗像市、太宰府市、古賀市、福津市、宮若市、糸島市、宇美町、志免町、須恵町、新宮町、久山町、粕屋町、遠賀町、鞍手町、大木町、添田町、川崎町、みやこ町



撮影：田代省二

ハジロコチドリ

Charadrius hiaticula Linnaeus, 1758

準絶滅危惧(NT)

2011

環境省

選定理由 県内では和白干潟で毎年数羽が越冬しており、近年、曾根干潟でも1～2羽が越冬するようになった。和白干潟では1980年代に越冬するようになり、以降毎年越冬するようになった。多い年には4羽が記録された年もあるが、近年は1羽のことが多い。日本は本来の分布から離れているため、本種が定期的に飛来する場所は少ないと考えられる。本種はカテゴリー判定基準には該当しないものの、国内の定期的な渡来地としての重要性からNTとした。

分布情報 北九州市小倉南区、福岡市東区



撮影：片岡智徳

イカルチドリ

Charadrius placidus Gray & Gray, 1863

準絶滅危惧(NT)

2011
絶滅危惧II類

環境省

選定理由 県内では主に河川中流域の河原で繁殖している。筑後川および矢部川の中流域とその支流で生息数が多いほか、遠賀川水系、室見川、多々良川、紫川、祓川、山国川などでも少数繁殖している。冬季にはため池などに飛来することもある。生息状況は比較的安定しているが、生息つがい数は100つがい前後と多くない。繁殖期間中の洪水の増加や河原への車の乗り入れ、人の立ち入りによる繁殖阻害が懸念される。カテゴリー判定基準：b)。

分布情報 北九州市小倉南区、北九州市八幡東区、福岡市東区、福岡市南区、福岡市西区、福岡市早良区、大牟田市、久留米市、飯塚市、田川市、八女市、筑後市、行橋市、小郡市、筑紫野市、春日市、宗像市、古賀市、福津市、うきは市、宮若市、嘉麻市、朝倉市、みやま市、糸島市、那珂川市、篠栗町、志免町、桂川町、大刀洗町、香春町、添田町、糸田町、川崎町、大任町、福智町、みやこ町、吉富町、上毛町、築上町



撮影：広塚忠夫

メダイチドリ

Charadrius mongolus Pallas, 1776

準絶滅危惧(NT)

2011

環境省

選定理由 県内では旅鳥として各地の海岸に渡来するほか、少数が越冬している。群れが飛来するのは曾根干潟と博多湾で、三毛門海岸や有明海にも少数が飛来する。また、それらの場所では1～数羽が越冬することがある。渡り時期に飛来する群れの規模は経年的に縮小している。最新のIUCNの見解(2023)では、主な越冬地であるオーストラリアでの減少率が3世代で50%を越えていることから、ENとされており、総個体群の縮小が明らかになっている。カテゴリー判定基準：a)。

分布情報 北九州市戸畑区、北九州市小倉北区、北九州市小倉南区、福岡市東区、福岡市西区、大牟田市、柳川市、行橋市、豊前市、宗像市、古賀市、福津市、糸島市、新宮町、苅田町、吉富町、築上町



撮影：岡部海都

キョウジョシギ

Arenaria interpres (Linnaeus, 1758)

準絶滅危惧(NT)

2011

環境省

選定理由 県内では旅鳥として各地の干潟や海岸に渡来するほか、少数が越冬している。渡り時期に群れが飛来するのは三毛門海岸で、博多湾や響灘の海岸にも少数が飛来する。また、それらの場所では越冬群もみられ、三毛門海岸では40羽前後、博多湾、響灘では10羽前後が越冬する。博多湾でも1990年代前半頃までは定期的に群れが飛来していたが、現在は減少している。渡り個体群は顕著に縮小しているが、越冬個体群は拡大していると考えられる。カテゴリー判定基準：a)。

分布情報 北九州市門司区、北九州市若松区、北九州市小倉北区、北九州市小倉南区、福岡市東区、福岡市中央区、福岡市西区、柳川市、行橋市、豊前市、福津市、糸島市、芦屋町、岡垣町、苅田町、吉富町、築上町



撮影：岡部海都

ヒバリシギ

Calidris subminuta (Middendorff, 1853)

準絶滅危惧(NT)

2011

環境省

選定理由 旅鳥として県内各地に飛来する。淡水湿地性で、主に水田やハス田でみられるほか、埋立地の湿地で確認されることもある。もともと飛来数は多くはなかったが、出現頻度は徐々に減少している。春は二毛作増加のため、生息適地となる水田が減少している。ハス田の減少や減反政策廃止に伴う休耕地の減少も要因の一つである。カテゴリー判定基準：a), b)。

分布情報 北九州市若松区、北九州市小倉南区、福岡市東区、福岡市西区、大牟田市、久留米市、中間市、小郡市、筑紫野市、宗像市、福津市、みやま市、糸島市、岡垣町、遠賀町、苅田町



撮影：田村耕作

オオジシギ

Gallinago hardwickii (Gray, 1831)

準絶滅危惧(NT)

2011

環境省
準絶滅危惧

選定理由 主に旅鳥として県内各地の農耕地や埋立地に渡来する。ほかのジシギ類との識別が極めて難しく、飛来状況に不明な点も多かったが、識別技術向上により把握されてきている。飛来数は春の方が多く、玄界灘・響灘の沿岸部の農耕地に広く飛来している。秋は早い時期に飛来するが、少ない。ほかのジシギ類と比較して、減少率は高く感じないが、出現頻度は徐々に減少している。カテゴリー判定基準：a)。

分布情報 北九州市小倉南区、福岡市西区、中間市、小郡市、宗像市、福津市、宮若市、遠賀町、鞍手町、上毛町



撮影：西 星哉

アカアシシギ

Tringa totanus (Linnaeus, 1758)

準絶滅危惧(NT)

2011
—環境省
絶滅危惧II類

選定理由 旅鳥として飛来するが少ない。主に淡水湿地に飛来し、瑞梅寺川河口周辺、福津市津屋崎、泉川・雷山川周辺では毎年のように飛来するが、他地域では稀。もともと飛来数は多くなかったが、確認頻度は年々減少しており、偶産種となりつつある。二毛作増加のため、飛来期に生息適地となる水田が減少しているほか、ハス田の減少や減反政策廃止に伴う休耕田の減少も要因の一つである。カテゴリー判定基準：a), b)。

分布情報 北九州市若松区、北九州市小倉南区、福岡市東区、福岡市西区、行橋市、中間市、福津市、糸島市、苅田町、築上町



撮影：田村耕作

コアアシシギ

Tringa stagnatilis (Bechstein, 1803)

準絶滅危惧(NT)

2011
—環境省
—

選定理由 旅鳥として飛来するが少ない。淡水湿地や河口干潟などに飛来し、曾根新田、瑞梅寺川河口周辺、泉川・雷山川周辺では毎年のようにみられるが、他地域では稀。もともと飛来数は多くなかったが、確認頻度は年々減少しており、偶産種となりつつある。二毛作増加のため、飛来期に生息適地となる水田が減少しているほか、ハス田の減少や減反政策廃止に伴う休耕田の減少も要因の一つである。カテゴリー判定基準：a), b)。

分布情報 北九州市若松区、北九州市小倉南区、福岡市東区、福岡市西区、宗像市、福津市、宮若市、みやま市、糸島市、遠賀町、鞍手町、築上町



撮影：田村耕作

アオアシシギ

Tringa nebularia (Gunnerus, 1767)

準絶滅危惧(NT)

2011
—環境省
—

選定理由 旅鳥および冬鳥として県内各地に飛来する。通過個体群は海岸や水田などに飛来し、瑞梅寺川河口や有明海では群れがみられる。かつては多々良川河口に50羽程度の群れが飛来していたが、現在は数羽程度となっており、顕著に減少している。一方、越冬個体群は瑞梅寺川河口で10~20羽が越冬しているほか、周防灘沿岸の河口部、多々良川水系、遠賀川水系、有明海沿岸の河口やクリーク、筑後川水系などで1~数羽がみられ、増加傾向となっている。カテゴリー判定基準：a)。

分布情報 北九州市門司区、北九州市若松区、北九州市小倉北区、北九州市小倉南区、福岡市東区、福岡市西区、大牟田市、久留米市、柳川市、大川市、中間市、小郡市、宗像市、福津市、朝倉市、みやま市、糸島市、篠栗町、志免町、粕屋町、芦屋町、岡垣町、遠賀町、鞍手町、大木町、福智町、苅田町、吉富町、築上町



撮影：村尾裕美

ユリカモメ

Chroicocephalus ridibundus (Linnaeus, 1766)

準絶滅危惧(NT)

2011

環境省

選定理由

冬鳥として渡来するが、越冬地は局地的。玄界灘沿岸では室見川、那珂川、多々良川などの下流部や大濠公園で群れがみられ、博多湾内の能古島周辺海域や玄界灘沿岸の海域で採餌を行っている。周防灘沿岸では曾根干潟、今川・祓川下流、山国川下流で群れがみられ、沿岸海域で広く採餌を行っている。有明海では筑後川下流で小群がみられるほか、沖合で群れがみられる。県内の飛来数は3,000羽前後と考えられるが、いずれの飛来地でも減少が感じられる。カテゴリー判定基準：a)。

分布情報

北九州市門司区、北九州市若松区、北九州市小倉北区、北九州市小倉南区、福岡市東区、福岡市博多区、福岡市中央区、福岡市南区、福岡市西区、福岡市早良区、大牟田市、柳川市、大川市、行橋市、豊前市、春日市、宗像市、福津市、糸島市、新宮町、粕屋町、芦屋町、水巻町、岡垣町、荻田町、吉富町、築上町



撮影：田代省二

カモメ

Larus canus Linnaeus, 1758

準絶滅危惧(NT)

2011

環境省

選定理由

冬鳥として渡来するが、越冬地は局地的。玄界灘沿岸では室見川下流や博多港、響灘沿岸では遠賀川下流や洞海湾、周防灘沿岸では関門海峡周辺、曾根干潟、椎田干拓前面海域などでみられ、室見川と曾根干潟には数百羽の群れが飛来する。有明海でも見られることがある。県内の飛来数は500羽前後と考えられるが、いずれの飛来地でも減少が感じられる。カテゴリー判定基準：a)。

分布情報

北九州市門司区、北九州市若松区、北九州市小倉北区、北九州市小倉南区、福岡市東区、福岡市博多区、福岡市中央区、福岡市西区、福岡市早良区、直方市、柳川市、大川市、行橋市、豊前市、宗像市、福津市、糸島市、新宮町、芦屋町、水巻町、遠賀町、荻田町、吉富町、築上町



撮影：西 星哉

アジサシ

Sterna hirundo Linnaeus, 1758

準絶滅危惧(NT)

2011

環境省

選定理由

旅鳥として玄界灘、響灘、周防灘などの海域に渡来するが少ない。やや沖合を飛翔していることが多いため、生息状況は十分に把握されていないが、春は5月頃、秋は9～10月頃に飛来する。海の中道シオヤ鼻北東沖の定置網では安定的に観察されている。1980年代頃までは博多湾内などで、比較的普通に観察されていたが、1990年代以降減少し、岸からの観察では稀な種となった印象。カテゴリー判定基準：a)。

分布情報

北九州市門司区、福岡市東区、福岡市西区、福津市、新宮町、芦屋町、岡垣町、築上町



撮影：洪田 朗

オオハム

Gavia arctica (Linnaeus, 1758)

準絶滅危惧(NT)

2011
—

環境省
—

選定理由 冬鳥として玄界灘，響灘，周防灘に渡来する。玄界灘および響灘では全域で300～500羽程度が飛来していると推定される。周防灘では遠浅の沖合に一定の密度で分布しており，100～200羽は飛来していると推定される。年による飛来数の変動はみられるものの，長期的な飛来状況は比較的安定している。安定した越冬地は全国的にあまり知られておらず，重要性が高い。アビ類は利用海域に洋上風車群が建設されると寄り付かなくなるとの研究結果もあり (Garthe et al., 2023)，洋上風力発電施設の建設が生息海域の減少につながる可能性がある。カテゴリー判定基準：b)。

分布情報 北九州市若松区，福岡市東区，福岡市西区，行橋市，豊前市，大野城市，宗像市，古賀市，福津市，糸島市，新宮町，芦屋町，岡垣町，苅田町，吉富町，築上町



撮影：岡部海都

シロエリオオハム

Gavia pacifica (Lawrence, 1858)

準絶滅危惧(NT)

2011
準絶滅危惧

環境省
—

選定理由 冬鳥として玄界灘，響灘，周防灘に渡来する。玄界灘および響灘では大きな群れがみられ，全域で3,000羽以上が飛来していると推定される。周防灘では少ない。年による飛来数の変動はみられるものの，長期的な飛来状況は比較的安定している。安定した越冬地は全国的にあまり知られておらず，重要性が高い。アビ類は利用海域に洋上風車群が建設されると寄り付かなくなるとの研究結果もあり (Garthe et al., 2023)，洋上風力発電施設の建設が生息海域の減少につながる可能性がある。カテゴリー判定基準：b)。

分布情報 北九州市若松区，北九州市小倉北区，福岡市東区，福岡市西区，宗像市，古賀市，福津市，糸島市，新宮町，芦屋町，岡垣町，吉富町，築上町



撮影：片岡智徳

チュウサギ

Ardea intermedia Wagler, 1829

準絶滅危惧(NT)

2011
準絶滅危惧

環境省
準絶滅危惧

選定理由 県内全域の水田地帯に飛来するが，生息状況には地域差があり，福岡地方，北九州地方，有明海沿岸などでは少ない。ほかの中・小型サギ類同様，減少しており，福岡地方ではコロニーでほとんどみられなくなっている。筑豊地方や筑後地方の北部ではまだ生息数は多いものの，今後の減少が懸念される。原因は不明であるが，コロニー内での競合関係や二毛作，乾田化による採餌環境の減少などが考えられる。カテゴリー判定基準：a)，b)。

分布情報 北九州市門司区，北九州市若松区，北九州市小倉南区，北九州市八幡西区，福岡市東区，福岡市西区，福岡市早良区，大牟田市，久留米市，直方市，飯塚市，田川市，柳川市，八女市，筑後市，大川市，行橋市，豊前市，中間市，小郡市，筑紫野市，宗像市，太宰府市，古賀市，福津市，うきは市，宮若市，嘉麻市，朝倉市，みやま市，糸島市，那珂川市，宇美町，篠栗町，志免町，新宮町，久山町，粕屋町，水巻町，岡垣町，遠賀町，小竹町，鞍手町，桂川町，筑前町，大刀洗町，大木町，広川町，香春町，添田町，川崎町，大任町，赤村，福智町，苅田町，みやこ町，吉富町，上毛町，築上町



撮影：岡部海都

クロサギ

Egretta sacra (Gmelin, 1789)

準絶滅危惧(NT)

2011
準絶滅危惧

環境省
一

選定理由 玄界灘，響灘，周防灘の島嶼や岩礁海岸に留鳥として生息している。生息密度は低く，県内の生息数は250羽未満と推定される。生息状況は比較的安定しており，危機の要因も特に見当たらないためカテゴリー判定基準には該当しないものの，生息数の少なさからNTとした。

分布情報 北九州市門司区，北九州市若松区，北九州市小倉北区，福岡市東区，福岡市中央区，福岡市西区，行橋市，宗像市，古賀市，福津市，糸島市，新宮町，芦屋町，岡垣町，苅田町



撮影：片岡智徳

カラシラサギ

Egretta eulophotes (Swinhoe, 1860)

準絶滅危惧(NT)

2011
絶滅危惧IB類

環境省
準絶滅危惧

選定理由 県内各地の河口や干潟に旅鳥として飛来するが少ない。博多湾ではほぼ毎年飛来する。多くの地域では偶産種であるが，本県は繁殖地に近いこともあり，国内では最も高頻度でみられる地域である。前回の改訂では総生息数の少なさと国内渡来地としての重要性からENとしたが，その後の見直しで当初思われていたより総生息数が多いことが示されている。総生息数は減少傾向が認められるとされており，県内の出現頻度も減少傾向が感じられる。カテゴリー判定基準：a)。

分布情報 北九州市戸畑区，北九州市小倉南区，福岡市東区，福岡市西区，宗像市，福津市，嘉麻市，糸島市，芦屋町，大木町，吉富町



撮影：岡部海都

ハチクマ

Pernis ptilorhynchus (Temminck, 1821)

準絶滅危惧(NT)

2011
準絶滅危惧

環境省
準絶滅危惧

選定理由 本県では主に旅鳥として渡り時期に通過する。数例の繁殖記録がある。本県は本種の渡りのメインルートとなっており，国内個体群の大半が通過する。春は朝鮮半島方面から海上を飛んで本県沿岸を目指し，秋は本州から響灘・玄界灘沿いおよびやや内陸を通過して五島を目指す。洋上風力発電施設の建設は春の渡りへの影響が大きい。また，現在計画はないものの，渡りルート下の山地で風力発電施設が設置されれば，本種の国内個体群全体への影響に繋がる。カテゴリー判定基準：b)。

分布情報 北九州市門司区，北九州市若松区，北九州市小倉北区，北九州市小倉南区，北九州市八幡東区，福岡市東区，福岡市博多区，福岡市中央区，福岡市南区，福岡市西区，福岡市城南区，福岡市早良区，大牟田市，久留米市，直方市，飯塚市，八女市，筑後市，小都市，筑紫野市，春日市，宗像市，太宰府市，古賀市，福津市，宮若市，嘉麻市，みやま市，糸島市，那珂川市，宇美町，篠栗町，新宮町，久山町，水巻町，岡垣町，鞍手町



撮影：田代省二

オオタカ

Accipiter gentilis (Linnaeus, 1758)

準絶滅危惧(NT)

2011
準絶滅危惧環境省
準絶滅危惧

選定理由 本県ではかつて冬鳥であったが、2000年代に入り繁殖が確認され、その後各地に増えていき、現在はほぼ県内全域で繁殖するようになった。現在の生息数は200つがい前後と推定される。生息数は増加しており、危機の要因も特に見当たらないためカテゴリー判定基準には該当しないが、生息数の少なさや生態系上位種としての重要性からNTとした。

分布情報 北九州市門司区、北九州市若松区、北九州市小倉北区、北九州市小倉南区、福岡市東区、福岡市中央区、福岡市南区、福岡市西区、大牟田市、久留米市、直方市、飯塚市、柳川市、八女市、筑後市、中間市、小郡市、筑紫野市、宗像市、太宰府市、古賀市、福津市、宮若市、朝倉市、みやま市、糸島市、久山町、小竹町、桂川町、筑前町、東峰村、大刀洗町、添田町、川崎町、築上町



撮影：片岡智徳

アカショウビン

Halcyon coromanda (Latham, 1790)

準絶滅危惧(NT)

2011
絶滅危惧II類環境省
—

選定理由 県内各地の山地に夏鳥として渡来する。主に谷部の発達した広葉樹林に生息する。英彦山地、古処山地では比較的、生息密度が高く、福智山地、釈迦岳山地、筑肥山地では低い傾向があり、県内全域での生息数は2,000羽未満と推定される。低標高地での減少が感じられる。撮影対象として人気のある種で、生息情報が拡散され、繁殖地に多くの人が集まる事例が発生している。カテゴリー判定基準：a)。

分布情報 北九州市小倉北区、北九州市小倉南区、北九州市八幡東区、北九州市八幡西区、福岡市博多区、福岡市早良区、直方市、飯塚市、八女市、豊前市、筑紫野市、春日市、宗像市、太宰府市、古賀市、福津市、うきは市、宮若市、嘉麻市、朝倉市、糸島市、那珂川市、宇美町、篠栗町、須恵町、久山町、桂川町、筑前町、東峰村、添田町、みやこ町、築上町



撮影：片岡智徳

サンコウチョウ

Terpsiphone atrocaudata (Eyton, 1839)

準絶滅危惧(NT)

2011
絶滅危惧II類環境省
—

選定理由 県内各地の丘陵地や山麓部に生息し、高標高帯には生息しない。生息状況には地域差があり、福岡市ではかつての生息地でみられなくなった場所が増えている。撮影対象として人気のある種で、撮影者の接近による影響も懸念される。カテゴリー判定基準：a)。

分布情報 北九州市門司区、北九州市若松区、北九州市小倉北区、北九州市小倉南区、北九州市八幡東区、福岡市東区、福岡市博多区、福岡市中央区、福岡市西区、福岡市城南区、大牟田市、久留米市、直方市、飯塚市、田川市、八女市、行橋市、豊前市、中間市、小郡市、筑紫野市、宗像市、太宰府市、古賀市、福津市、宮若市、嘉麻市、朝倉市、みやま市、那珂川市、須恵町、新宮町、久山町、芦屋町、水巻町、岡垣町、遠賀町、小竹町、鞍手町、桂川町、筑前町、大刀洗町、赤村、みやこ町、築上町



撮影：片岡智徳

ツリスガラ

Remiz consobrinus (Swinhoe, 1870)

準絶滅危惧(NT)

2011
準絶滅危惧環境省
一

選定理由

県内各地のヨシ原のある水辺に冬鳥として渡来するが局所的。響灘埋立地、曾根干潟周辺、瑞梅寺川河口周辺、多々良川、泉川河口周辺、筑後川水系、矢部川水系などでは定期的に飛来し、越冬している。渡り時期には越冬期にみられない場所にも飛来する。経年的な個体数動向は、1970年代から80年代にかけて増加した後、減少傾向となっている。カテゴリー判定基準：a)。

分布情報

北九州市若松区、北九州市小倉南区、福岡市東区、福岡市南区、福岡市西区、福岡市早良区、大牟田市、久留米市、直方市、飯塚市、柳川市、八女市、筑後市、大川市、豊前市、中間市、小郡市、宗像市、太宰府市、福津市、うきは市、宮若市、朝倉市、みやま市、糸島市、篠栗町、岡垣町、遠賀町、小竹町、鞍手町、筑前町、大刀洗町、大木町、福智町、苅田町、築上町



撮影：片岡智徳

コシアカツバメ

Cecropis daurica (Laxmann, 1769)

準絶滅危惧(NT)

2011
準絶滅危惧環境省
一

選定理由

県内各地に夏鳥として渡来するがやや局地的で、特に筑後地方では繁殖地が少ない。河川や道路などの高架橋下、漁港、アパートなどの共同住宅、学校などに集団で営巣する。コロニー規模は縮小傾向にあり、繁殖しなくなった場所も多い。イワツバメとの営巣場所の競合の影響が考えられ、河川の橋脚や漁港などではイワツバメに置き換わっている場所が多い。学校や漁港、共同住宅では衛生対策として巣が撤去される事例も増えている。カテゴリー判定基準：a), b)。

分布情報

北九州市門司区、北九州市若松区、北九州市小倉北区、北九州市小倉南区、福岡市東区、福岡市西区、福岡市城南区、福岡市早良区、久留米市、田川市、行橋市、豊前市、中間市、小郡市、筑紫野市、宗像市、古賀市、福津市、うきは市、宮若市、嘉麻市、朝倉市、みやま市、糸島市、那珂川市、須恵町、新宮町、水巻町、岡垣町、遠賀町、鞍手町、筑前町、東峰村、添田町、川崎町、大任町、赤村、苅田町、みやこ町、吉富町、上毛町、築上町



撮影：岡部海都

オオヨシキリ

Acrocephalus orientalis (Temminck & Schlegel, 1847)

準絶滅危惧(NT)

2011
準絶滅危惧環境省
一

選定理由

県内各地のヨシ原のある水辺に夏鳥として渡来する。飛来状況には地域差があり、福岡地方や北九州地方では減少しているのに対し、遠賀川流域や筑後川流域では生息数が多い。福岡地方や北九州地方では河川での生息が減少傾向にある。これは、降雨量増加に伴い洪水頻度が増えており、洪水によって引き起こされるヨシ原の倒伏を嫌っている可能性がある。カテゴリー判定基準：a), b)。

分布情報

北九州市門司区、北九州市若松区、北九州市戸畑区、北九州市小倉北区、北九州市小倉南区、福岡市東区、福岡市博多区、福岡市西区、大牟田市、久留米市、直方市、飯塚市、田川市、柳川市、大川市、行橋市、豊前市、中間市、小郡市、筑紫野市、宗像市、太宰府市、古賀市、福津市、うきは市、宮若市、嘉麻市、朝倉市、みやま市、糸島市、篠栗町、粕屋町、水巻町、岡垣町、小竹町、鞍手町、筑前町、香春町、添田町、糸田町、大任町、福智町、苅田町、みやこ町、吉富町、築上町



撮影：片岡智徳

ゴジュウカラ

Sitta europaea Linnaeus, 1758

準絶滅危惧(NT)

2011
準絶滅危惧環境省
一

選定理由 英彦山地・三郡山地・古処山地・釈迦岳山地・筑肥山地の高標高帯の主に落葉広葉樹林や針葉樹の壮齢林に生息しているが生息密度は低い。三郡山地・古処山地では分布範囲が縮小しつつあり、1990年代までは標高約600mの若杉山でも生息していたが、その後みられなくなった。温暖化に伴う落葉広葉樹林の衰退の影響を受けている可能性がある。カテゴリー判定基準：a), b)。

分布情報 八女市, 豊前市, 太宰府市, 嘉麻市, 朝倉市, 宇美町, 東峰村, 添田町, 川崎町, 大任町, みやこ町, 上毛町, 築上町



撮影：片岡智徳

カワガラス

Cinclus pallasii Temminck, 1820

準絶滅危惧(NT)

2011
—環境省
—

選定理由 県内各地の河川の上流部に生息する。矢部川水系では生息数が多いが、福岡地方や北九州地方・京築地域の河川では少ない。異常気象による山間地での激甚災害とそれに伴う復旧工事の影響により、生息環境が悪化している場所も多く、朝倉市周辺の水系では確認できない場所もある。工事が長期に渡るケースも多く、大きな影響を与えている。カテゴリー判定基準：a), b)。

分布情報 北九州市小倉南区, 福岡市西区, 福岡市早良区, 久留米市, 飯塚市, 八女市, 筑紫野市, うきは市, 宮若市, 嘉麻市, 朝倉市, 糸島市, 那珂川市, 篠栗町, 筑前町, 東峰村, 広川町, 添田町, 赤村, 苅田町, みやこ町, 築上町



撮影：田代省二

カヤクグリ

Prunella rubida (Temminck & Schlegel, 1845)

準絶滅危惧(NT)

2011
準絶滅危惧環境省
一

選定理由 英彦山地および釈迦岳山地に少数が飛来し越冬する。本来の生息地から離れた分布ではあるが、日本固有種であり、越冬地の多様性という点で重要と考えられる。また、本種は落葉広葉樹林の下層に繁茂する笹藪を好むが、英彦山地ではニホンジカによる食害が著しく、現在越冬している場所は、シカ害対策で張られたネットの内側の笹藪に限られている。釈迦岳周辺ではスズタケが残っている場所に生息しているが、ニホンジカの生息が確認されており、環境の悪化が懸念される。カテゴリー判定基準：a), b)。

分布情報 八女市, 添田町



撮影：広塚忠夫

タヒバリ

Anthus rubescens (Tunstall, 1771)

準絶滅危惧(NT)

2011

環境省

選定理由 県内各地の農耕地や河川に冬鳥として渡来する。普通種であり、飛来数も多いが、市街地近郊では減少が著しい。福岡地方や北九州地方では大きな群れがみられなくなっている。カテゴリー判定基準：a)。

分布情報 北九州市門司区、北九州市若松区、北九州市小倉南区、福岡市東区、福岡市南区、福岡市西区、福岡市早良区、大牟田市、久留米市、飯塚市、田川市、柳川市、筑後市、大川市、行橋市、豊前市、中間市、小郡市、筑紫野市、宗像市、古賀市、福津市、うきは市、宮若市、嘉麻市、朝倉市、みやま市、糸島市、那珂川市、篠栗町、志免町、粕屋町、芦屋町、岡垣町、遠賀町、小竹町、鞍手町、桂川町、筑前町、東峰村、大刀洗町、大木町、広川町、香春町、添田町、糸田町、川崎町、大任町、福智町、苅田町、みやこ町、吉富町、上毛町、築上町



撮影：片岡智徳

カシラダカ

Emberiza rustica Pallas, 1776

準絶滅危惧(NT)

2011

環境省

選定理由 県内各地の丘陵地や農耕地に冬鳥として渡来する。丘陵地や山間地の林縁などでは現在も普通にみられるが、平地の農耕地での減少が著しく、かつて普通に生息していた場所でみられなくなった場所が増えている。カテゴリー判定基準：a)。

分布情報 北九州市門司区、北九州市若松区、北九州市小倉南区、北九州市八幡東区、福岡市東区、福岡市南区、福岡市西区、福岡市早良区、大牟田市、久留米市、直方市、飯塚市、田川市、八女市、筑後市、行橋市、豊前市、中間市、小郡市、筑紫野市、春日市、宗像市、古賀市、福津市、うきは市、宮若市、嘉麻市、朝倉市、みやま市、糸島市、那珂川市、篠栗町、須恵町、新宮町、久山町、遠賀町、小竹町、鞍手町、桂川町、筑前町、東峰村、大刀洗町、広川町、香春町、添田町、糸田町、川崎町、大任町、みやこ町、上毛町、築上町



撮影：岡部海都

ノジコ

Emberiza sulphurata Temminck & Schlegel, 1848

準絶滅危惧(NT)

2011

環境省
準絶滅危惧

選定理由 旅鳥として県内各地の農耕地や丘陵地に飛来するが少ない。春は玄界灘・響灘の鳥嶋で比較的良好に見られる。特に秋の確認頻度が減少しているように感じられる。カテゴリー判定基準：a)。

分布情報 福岡市東区、福岡市西区、大牟田市、中間市、宗像市、古賀市、福津市、糸島市、新宮町、芦屋町



撮影：Marijka Jansen

ビロードキンクロ

Melanitta stejnegeri (Ridgway, 1887)

情報不足(DD)

2011

環境省

選定理由

県内には玄界灘や博多湾などの海域に、冬鳥として数羽が不安定に飛来する程度と思われていたが、2022年の周防灘での海上調査において、陸から見えない沖合の広範囲で50羽以上が確認され、比較的規模の大きい越冬地となっている可能性が示唆された。西日本では数十羽規模の越冬地はほとんど知られておらず、貴重と考えられる。単年の観察状況であるため、継続して調査を行い、状況を把握する必要がある。

分布情報

福岡市東区、福岡市西区、宗像市、福津市、吉富町、築上町



撮影：岡部海都

キジ

Phasianus versicolor Vieillot, 1825

情報不足(DD)

2011

環境省

選定理由

県内の分布状況には地域差が大きく、筑豊地方や北九州地方では比較的普通にみられるものの、福岡地方や筑後地方では少なくなっている。県内のキジの確認場所は放鳥事業の放鳥地と強い一致性があり、放鳥事業に依存していると考えられる。放鳥個体の由来や在来個体群との関係はまったく把握されておらず、在来のものとは異なる個体群を放鳥してきたとすれば、既に遺伝的な固有性は失われている可能性があり、遺伝子レベルの解析が望まれる。

分布情報

北九州市門司区、北九州市若松区、北九州市小倉北区、北九州市小倉南区、北九州市八幡東区、北九州市八幡西区、福岡市東区、福岡市西区、福岡市早良区、大牟田市、久留米市、直方市、飯塚市、柳川市、八女市、行橋市、豊前市、中間市、小郡市、筑紫野市、宗像市、太宰府市、福津市、うきは市、宮若市、嘉麻市、糸島市、那珂川市、新宮町、久山町、芦屋町、岡垣町、小竹町、鞍手町、桂川町、筑前町、東峰村、広川町、添田町、川崎町、福智町、苅田町、みやこ町、上毛町、築上町



撮影：田代省二

アオシギ

Gallinago solitaria Hodgson, 1831

情報不足(DD)

2011

環境省

選定理由

県内には冬鳥として飛来していると考えられるが、確認例は少なく、安定した飛来地は知られていない。河川の上流域や丘陵地の水路やため池で確認されている。鳥類の調査が行われないような小河川の上流部や丘陵地の農業水路に生息していること、警戒心が強く人が接近すると身を隠す習性があることなどから、渡来状況は十分把握されておらず、生息状況は過小評価されていると考えられる。

分布情報

北九州市小倉南区、北九州市八幡東区、福岡市東区、福岡市南区、那珂川市、川崎町、赤村



撮影：広塚忠夫

トラフズク

Asio otus (Linnaeus, 1758)

情報不足(DD)

2011

環境省

選定理由 県内には冬鳥として飛来していると考えられるが、確認状況は断片的で、安定した飛来地は知られていない。本種は完全な夜行性で、冬季の夜間調査はほとんど行われていないことから、生息状況については過小評価されている可能性がある。特に筑後地方の筑後川・矢部川の河川敷や久留米市（旧田主丸町）の果樹・植木の畑地には比較的多く生息している可能性がある。

分布情報 北九州市若松区，北九州市小倉南区，福岡市西区，久留米市，宗像市，うきは市



撮影：Marijka Jansen

オオセツカ

Locustella pryeri (Seebohm, 1884)

情報不足(DD)

2011

環境省
絶滅危惧IB類

選定理由 県内では2021年に小竹町の湿地において初めて確認された。その翌年にも同所で確認され、越冬していること、九州の他地域でも発見され始めていることから、偶発的な確認例ではなく、安定的な越冬地である可能性が示唆されている。これまで九州の野鳥観察者にとって馴染みのない種であり、極めて隠密性が高く、確認が非常に困難な種であることから、生息状況はほとんどわかっていない。

分布情報 小竹町